徳島の剣道

特集

1．中学校武道必修化始まる
2．遠藤一美先生旭日中綬章拝受
3．西日本勤労者剣道大会優勝

第29号

徳島県剣道連盟

徳島武徳殿

聞き取り調査による想像図

昭和３年11月26日竣工　平成24年11月吉田昌彦作成

※詳細についてはＰ254参照のこと

巻頭言

心ひとつに

徳島県剣道連盟 会長 坂下彦之

剣友各位におかれましては、益々ご健勝にてご精武、ご活躍のことと心からお慶び申し上げます。

皆様もご承知のとおり全日本剣道連盟が昭和二十七年十月に設立され昨年六十年の還暦を迎え、記念講演、高段者名簿の作成発行、記念祝賀会等が実施されました。

私も竹刀を握り六十年、徳島県剣道連盟と共に今日まで歩んで参りました。このことは、恩師堀江幸雄先生をはじめ先輩・先生方の温かいご指導によるものであり、心から深謝申し上げます。

剣の道に携われる吾々は、「剣道の理念」を基に修練の心構え等を充実、体得し、日々精進努力し、健全な身体と精神の昂揚は勿論、身体の錬磨、剣技の向上に務め、剣友皆の心を一つにしてこそ徳島県剣道連盟の発展があると思います。

剣友各位の益々のご活躍を心から祈念申し上げ、巻頭の辞といたします。

なお、本誌にも特集されていますように、昨年秋に名誉会長遠藤一美先生が「旭日中綬章」を叙勲されましたことを徳島県剣道連盟会員一同心よりお祝い申し上げます。

『徳島の剣道 第二十九号』目次

巻頭言……坂下　彦之……1

《特集Ⅰ　中学校武道必修化始まる》

剣道連盟に感謝……佐々木義史……4

剣連から剣道講師派遣……三木　毅……6

これからの剣道教育……立川　信彦……11

《特集Ⅱ　遠藤一美氏旭日中綬章拝受》

旭日中綬章拝受にあたり……遠藤　一美……13

遠藤一美先生の叙勲を祝して……高島　稔之……15

旭日中綬章叙勲を祝って……西岡　侃……17

《特集Ⅲ　西日本勤労者剣道大会優勝》

十六年ぶりの優勝に思う……平野　誠司……19

西日本勤労者剣道大会……山名　信行……21

顕彰一覧

全剣感謝状受賞

師よ友よ……吉田　租……24

剣道有功賞

剣道有功賞を戴いて……中山　啓男……26

少年剣道教育奨励賞

少年剣道教育奨励賞をいただき……二反田和則……29

少年剣道教育奨励賞を受賞して……桑原　啓治……31

平成二十四年度徳島県中学校剣道優秀選手……33

平成二十四年度徳島県高等学校剣道優秀選手……34

先生を偲ぶ

高下正義先生を偲んで……久保　隆司……35

師と出会えて……松田みつ子……38

岡内和生先生を偲ぶ……鎌田　恵……40

岡内和生君を偲ぶ　遺し託されたもの……村井　正志……43

全国講習会報告

全国講師要員（指導法）講習会……近藤　亘……45

居合道中央講習会……岸田　光博……47

中堅剣士講習会……岩木　一功……49

秋期講習会……藤本　雅史……51

全国中高部活動指導者研修会……加藤　哲裕……55

社会体育指導員上級と
日本体協会公認スポーツ指導員……米倉　滋……57

徳島の剣道史

鴻山の宍戸神社……坂本　憲一……58

大会・行事所感

徳島眉山ライオンズクラブ
第四十二回小学校・中学校剣道大会……米倉　滋……64

第四十回記念磯部旗争奪那賀川剣道大会を終えて……二反田和則……65

閉校「鳴門市立鳴門工業高校」
～母校と共に歩んだ四四・五年間～……藤本　雅史……66

鳴門工業高等学校閉校剣道部記念大会を感じて……正木　幸弘……73

徳島市立高校創立五十周年記念稽古会……中尾　幸雄……74

各種大会に参加して

第十一回宮本武蔵顕彰女子剣道大会（お通杯）に参加して……岩木　淳子……78

第三十四回全国スポーツ少年団剣道交流大会……中西　実……79

第六十回全日本都道府県対抗剣道優勝大会に参加して……近藤　亘……83

全日本都道府県女子剣道大会に参加して……竹内佳代子……84

管内矯正職員武道大会……前田　秀一……87

選抜大会に出場して……富岡東高校　山本　悠……88

平成二十四年度全国高校総体
剣道競技に出場して……城北高校　黒木　景太……90

インターハイに出場して……富岡東高校　湯浅絵里加……92

第四十二回全国中学剣道大会に参加して……宮武　美穂……95

平成二十四年度第五十四回
全国教職員剣道大会に出場して……福多　雅英……97

良さを引き出す……湯城　豊勝……99
第七回全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会……山室　和士……100
第七回全日本都道府県対抗
少年剣道優勝大会に出場して……田中　皓己……102
第五十五回全日本実業団剣道大会報告……目﨑　明宏……103
女性剣士としての全日本……平野　千尋……105
瞬間善処……平野　誠司……106
ぎふ清流国体　少年女子……伊藤奈津子……108
第四十七回全日本居合道大会を振り返って……岸田　光博……110
全日本選手権に出場して……六條　洋二……113
第六十四回（平成二十四年度）
四国四県剣道大会観戦記……中尾　正輝……115
全国警察剣道大会に出場して……近藤　正章……118
平成二十四年度徳島県高齢剣友会活動状況……笠井　勝……119
全国高齢者武道大会参加報告（雑感）……芝原　功一……122
第二十四回土佐生涯剣友会交流大会に参加して……藤川　和秋……125

随想

剣道に惚れる……大澤　孝彰……126
私の剣道人生（回顧）……高田　豊……128
感謝合掌……原田　勝……129
岫雲（しゅううん）……原田　進……132
「戦の神様」白人神社……大石　雅生……134
剣道家の竹取物語……高橋　国保……137
剣道と私……藤本　辰夫……141

称号・段位合格者

七段に合格して……藤井　利一……143
剣道七段に合格して……藤本　文義……144
七段合格に感謝……中川　正……146
生涯剣道に向かって……三木　毅……147
七段審査に合格して……桝山　紹生……149
七段審査に臨んで……矢武　秀生……150
七段を拝受して想うこと……福永　徳……151
六段に合格して……谷　博……153
剣道六段に合格して……金野　裕美……154
六段審査に合格して……野崎　寛治……155
六段に合格して……横畠　保……157
剣道六段に合格して……鈴江　俊和……158
剣道六段審査に合格して……敦賀　晋平……159
六段合格に想うこと……南谷　雅彦……160
剣道六段に合格して……岡本　茂……162
剣道六段に合格して……柳谷　照男……164
剣道六段への挑戦……島尾　眞旦……166
剣道教士号をいただいて……美馬　和義……168
錬士号に合格……篠原　永光……169
称号・段位合格者一覧……170

がんばろう徳島

部活だより
鳴門教育大学……真嶋　健司……175
城東高校……山本　雅裕……176
阿南第一中学校……福多　博史……178
平成二十三年度　大会記録……180
徳島新聞に見る戦いの跡……207
平成二十五年度　昇段審査学科試験問題・解答例……238
平成二十五年度　徳島県剣道連盟行事予定表……246
平成二十五年度　審査実施計画表……248
徳島県剣道連盟審査資格・審査料等……249
居合道　道場案内……250
徳島県剣道稽古場所一覧……251
徳島武徳殿の雄姿を求めて
未完成ながら想像図を作成　新たな資料を求む……三木　毅……254

編集後記

特集Ⅰ　中学校武道必修化始まる

剣道連盟に感謝

徳島県教育委員会　体育学校安全課　指導主事
佐々木　善　史

平成二十四年度から適用された新学習指導要領・保健体育で「我が国固有の伝統文化である武道を推進する」ことをねらいとして、武道を第一学年及び第二学年において、すべての生徒が履修することとなりました。

徳島県では、三年前から国の委託事業を活用し、実践校を指定して施設や防具の整備を行うとともに、外部指導者を派遣してきました。また、県内保健体育科教員を対象にした実技指導者講習会を、全日本剣道連盟の佐藤義則先生をお迎えし開催しました。さらに、鳴門教育大学木原資裕先生を中心とした研究委員会で、学習計画やＤＶＤを作成していただき、県内すべての保健体育科教員に配付しております。このように三年間の準備期間を経て、今年度より必修化に至っています。

○五十五校が剣道を選択

平成二十四年度、剣道を実施する中学校は徳島県下で五十五校（八十六校中）です。割合にすると六十四％になります。剣道具については、市町村教育委員会の協力もあり、五十五校すべての中学校で剣道具を使った授業ができています。しかし、生徒数に対して、防具数が不足している学校もあり、交代で防具を付けるなど、工夫して授業を行っています。

○外部指導者の派遣

徳島県剣道連盟の近藤亘理事長に、外部指導者を派遣したい旨をお伝えしたところ快く協力していただきました。剣道連盟で中学校武道必修化に向けた研修会を実施し、受講した方を中学校に派遣してくださるということでしたが、研修会には五〇名近くの方が参加していただいたそうで、剣道連盟の熱意に驚くとともに、感謝の気持ちがこみ上げてまいりました。中学校から外部指導者の希望があったのは一四校で、それぞれの学校で指導にあたっていただきました。授業では保健体育科教員が中心にティームティーチングで行い、専門家の補助を受けることで、剣道には素人であった保健体育科教員も少しずつ指導技術が進歩してきたと思っております。

○指導者実技講習会の開催

十月に、二回にわたり、流通経済大学の柴田一浩先生をお招きして、中学校保健体育科教員の実技講習会を行いました。剣道連盟からも臼木崇さん、谷口順二さんに参加をいただきました。柴

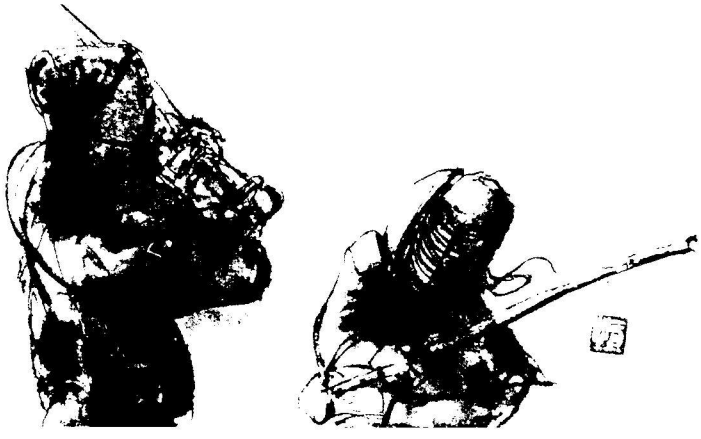
田先生の講習内容はとても斬新なもので、一〇時間の授業で試合ができることを中心にしたものでした。攻める側と守る側を決めて試合をすることで、もつれ合わずスムーズに試合ができる方法を教えていただきました。今年、多くの学校の武道の授業を見学に回らせていただきましたが、柴田先生の講習会の内容を踏まえて授業をしている学校が多かったように思います。

○「伝統文化」と「楽しさ」のバランス

武道では礼節を重んじ日本の伝統文化に触れることが大きな目的です。また、体育の授業では、武道の楽しさを味わうことも大切な要素であると思います。「伝統文化」と「楽しさ」このバランスが、授業の中では大切だと授業を見て感じています。来年は、今年習得した基礎の上に、さらに充実した授業を行い、剣道の魅力を多くの生徒に感じてほしいと思いました。

○感謝

最後になりましたが、近藤亘理事長様はじめ剣道連盟の皆様方には大変お世話になりました。剣道連盟の方々の温かい御協力に、心より感謝をいたしております。来年度も、徳島県の中学生のために皆様方のお力添えをよろしくお願いします。



中学校武道正課はじまる
剣連から剣道講師派遣

剣道連盟 副会長　三木　毅

中学校武道正課の法的根拠と授業展開の内容

一、中学校武道正課の法的根拠

平成十八年法律第百二十号は「教育基本法」を全面改正するというものである。すなわち、終戦直後の昭和二十二年に制定された教育基本法の全部を改正したものである。教育基本法の全面改正に伴い、学校現場で展開される「学習指導要領」も改正された。

多岐にわたる関係法令、学習指導要領を列挙できないので、要約を述べることとする。

ア．教育基本法改正の趣旨

戦後六十年近くが経ち、いろいろな意味で社会は大きく変改した。中でも子供達のことを一言で言えば「基礎的な人間力が総合的に落ちてきている。」と言える。子供達の学力低下や学習意欲、体力の低下をはじめ規範意識の希薄化、対人関係能力の低下、生活習慣の乱れなど、さまざまな問題が指摘されている。これまで個々の問題を、対処療法的に解決しようとしてきたが、これは決してバラバラの問題ではなく互いに関連しており、教育の土台をしっかりすべきだとの認識に至った。

学校、家庭、地域社会が全体的に教育力を低下させるなかで、本来は家庭や地域社会で行われるべき子供の育成までもが学校に期待されるようになり、学校では過剰な課題をかかえながら役割を果たしきれない、それが社会全体の教育力低下を生むという悪循環に陥ってきた。いま一度、基本に立ち返って、教育の理念として何が大切か幅広く議論して、これからの時代にふさわしい教育理念を国民の共通理解として打ち立てるために、国民全体による教育改革を進め、「教育基本法」を全面改正することとなった。

イ．教育基本法改正の内容

改正された教育基本法には、学校だけでなく家庭や地域社会など、いろいろな分野の教育力が重要であるとの考えが多く盛り込まれている。改正の注目点は、愛国心とも言われ表記は「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する……」とされた。

また第二条の教育の目標は五本柱を掲げ豊かな情操と道徳心、公共の精神などが盛り込まれ、第三条では「生涯学習の理念」も新たに盛り込まれている。これは一見当たり前のことばかりであるが、最近の深刻な問題であった。

改正法はこれまでの教育基本法が掲げてきた普遍的な理念を継承ししつ、公共の精神等、日本人が持っていた「規範意

識」を大切にし、それらを醸成してきた伝統と文化の尊重などが新たに掲げられた。

ウ．武道が必修化された理由

武道が正課とされた理由を挙げると次の三つに要約される。

一つは、武道と欧米のスポーツとは共通する部分が多いが大きな相違点は、武道が「人間形成を目指す教育」という点にある。武道は、伝統的に精神的な面を尊重する考え方が重視されており、より修養的或いは鍛錬的な目的を強くもっている。

二つには、武道は「礼にはじまり礼に終わる」といわれるように「礼法」を特に重要視している。試合などの場面において、高ぶる気持ちを抑えたり、試合などで激しい攻防のまだ心理的な興奮が静まっていない時でも、その興奮を抑え、正しい姿で丁寧な「礼」を行う事が求められている。「礼」を重んじ、その形式に従うことは、自己を制御するとともに相手を尊重する態度を形に表すことでありその自己抑制が人間形成にとって重要な要素とされている。

三つには、武道における試合では、試合者同士は相手を自己と敵という対立関係ではなく、人間としての生き方、在り方を共に学び合う仲間同士であるとされている。自己が試合に勝つことができたのは相手があって成立したのであり、共に学び合う相手があったからであり、さらに互いが目指す目標は「道」を極めることであって、試合の勝敗のみにこだわることは慎むべきであるということが重視されている。そしてそれに基づく伝統的な運動文化である武道を、学校における体育学習の内容として重視してゆくことは、我が国の文化や伝統を尊重する点はもとより、これからの国際社会において、世界に生きる日本人を育成していく立場からも、有意義なことである。

エ．学習指導要領の内容

武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身につけ、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことのできる運動である。また、武道に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視する運動である。

武道は、中学校で初めて学習する内容であるため、基本動作と基本となる技を確実に身につけ、基本動作や基本となる技を用いて、相手の動きの変化に対応した攻防ができるようにすることが求められている。また、技能の上達に応じて、基本となる技を用いた自由練習や極簡単な試合で攻防を展開することへ発展させて、得意技を身につけ、自由練習や簡単な試合で攻防が展開できるようにすることが狙いであるとされている。

従って、第一学年及び第二学年では、技ができる楽しさや喜

びを味わい、基本動作や基本となる技ができるようにする。

また、武道の学習に積極的に取り組み、伝統的な行動の仕方を守る事などに意欲をもち、健康や安全に気を配るとともに、礼に代表される伝統的な考え方などを理解し、課題に応じた運動の取り組み方を工夫できるようにすることが大切とされている。

二、授業現場の担当教諭と外部派遣剣士の在り方

中学校での剣道授業は、体育授業のなかで行われる。よって担当教諭は体育教諭ということであり剣道の経験のない体育教諭の場合に剣道連盟に外部講師の派遣要請がなされるものである。

学校教育の現場は担当教諭が主体となって授業を行う事が基本であることから派遣剣士はあくまでも、教諭の授業の補助者という立場である。

個別の授業を展開していくためには、事前に担当教諭と十分な打ち合わせを行うことが重要であり、担当教諭が授業展開するごとに、その補助として個々の剣道指導をすることとなる。

三、剣道選択中学校

県下には八十六中学校が存在し、平成二十四年七月現在で剣道を選択した中学校は五十五校（六十四パーセント）で、そのうち部外講師が必要であると要請のあった中学校は、次の十四校であった。

城西・小松島・坂野・阿南第二・那賀川・羽ノ浦・市立川島・脇町・穴吹・山城・西祖谷・神山東・半田・貞光

男女とも行う学校は十三校、女子のみは阿南第二中学校である。

四、剣道連盟の対応

ア．平成二十年三月からの対応

徳島県教育委員会の学校担当課である「スポーツ健康課」石井博課長のもとでは、「平成二十四年四月からの武道必修化に向けた取り組み」を開始しており、徳島県剣道連盟に対して平成二十年三月十三日に「武道振興協議会を立ち上げたい」との申し入れがあった。

そこで、第一回会議までに双方が検討事項を模索することとし、平成二十年七月十三日徳島市沖浜町の「ふれあい健康館」において、第一回武道振興会を開催した。そこで議論したことは

○地域武道場の活用
○地域の武道指導者と体育教員との連携
○今後のスケジュール

であった。

その後、回を重ねたうえ、平成二十一年四月には、会議の名称を「中学校武道必修化に向けた地域連携指導推進協力者会議」と改称した。

この協力者会議は現在も進行中であり、「剣道・柔道・ダンス」の部門から委員が参加して、武道正科に向けた取り組

みや、体育教諭の研修会を推進することとなった。

徳島県剣道連盟では、平成二十一年九月から県下三ブロックにおいて、各支部長に対して、「中学校を訪問して剣道が選択されるよう要請を行い、全剣連が発行した『剣道授業の展開』を配布する活動を早期に実施する」方針を示し、さらに、中学校から、外部講師の派遣要請に当たる窓口担当者を各支部に設けた。

イ．剣道連盟の派遣指導者研修会の開催と部外派遣講師登録

剣道連盟では平成二十四年七月三十一日付けで県下各支部長に対し、「中学校武道必修化に向けた地域連携指導者候補者の推薦及び研修会の開催」通知を発した。　これに基づき、各支部から四十七名の候補者が推薦されたので、平成二十四年九月十七日徳島市南昭和町のセンチュリーホテル会議室において、「平成二十四年度　中学校剣道部外講師研修会」を開催した。

この研修会の趣旨は「剣道実技以外の剣道にかかわる多岐に亘る事項を習得する」ことを目的とされた。研修項目を列挙すると次のとおりである。

○平成十八年改正の教育基本法
○学習指導要領の内容
○授業の単元計画
○剣道の歴史・特性
○日本刀と竹刀
○礼儀
○我が国の武道の種類と発祥発展概要
○剣道の理念
○剣道修練の心構え
○剣道指導の心構え
○相手（師匠・稽古相手・試合相手など）を敬う心
○剣道は何故袴姿なのか
○竹刀の節は何故五つなのか
○構えの表と裏の意味
○左座右起の理由
○蹲踞する理由とやり方
○ナンバ歩き

の十七項目であった。

この研修終了者した五段以上の剣士は、県教育委員会から派遣要請があった中学校の所在地に基づき、派遣すべき者を教育委員会に登録し派遣することとなった。

五、平成二十四年度派遣講師授業の実際

中学校の武道時間数は年間十三時間であり、具体的には五十分授業で十三回ということである。

剣道授業では、中学生が剣道を楽しく学び、その楽しさの中で喜びを味わい剣道に親しむということが重要な要素とされている。剣道授業の場面は、剣道歴史・特性・竹刀の名称・足捌き・竹刀の振り方・打突の仕方・防具の装着と収納・打ち込み

稽古・自由稽古・試合要領など多岐に亘る。

全剣連発行の「剣道授業の展開」では各単元授業でのなすべき内容が示されておりこれに基づき授業を進めるのであるが、中学生個々人の理解度・個性が異なるので、時間配分どおりに授業を進めることは到底難しいのが実態である。

二十四年度に派遣された部外講師の剣士諸氏から、授業展開の実際について調査した。その概要は次のとおりである。

ア．生徒の関心度

○最初は、不安が大きかったが、慣れてくるとおもしろさを感じるようになった。次回を楽しみにしている。

○剣道は、礼儀を尊ぶものであることがよく分かった。生活の中で生かしていきたい。

○女子の感想として、竹刀で人を叩くことに、抵抗がある。

イ．部外指導者の意見

○校長・教諭とも剣道への関心度は高いと感じた。（校長等授業参観校は一校であった。）

○担当の体育教諭は剣道未経験者のため、部外講師に頼りがちとなった。（事前打ち合わせが重要。）

○剣道の実際を事前にビデオを見せ全体像を理解させておくと、授業の実際が順調になるのでないか。

○五十分の一時限授業ではまとまった実技指導が難しい。学校側から、二時限続きの授業に変更してくれた。

○防具の着装・収納に多くの時間を要する。特に紐の扱いが全く馴染んでいない。

○防具の数が少なく、生徒を分割しての着装となった。

○竹刀の握り方、振り方、剣道用語などは理解度が低い。

○単元計画は濃密すぎるので、的を絞って指導する工夫が必要である。

○生徒は、礼儀・刀知識・精神面よりも、競技性に興味が強い。（武道的要素の浸透授業の展開が課題）

六、まとめ

武道必修化の初年度に県下で五十五校において剣道が選択され、うち、十四校が部外指導員の派遣要請があった。

学校長や担当教諭は部外講師に対しては敬意を表してくれていることを感じるが、授業の展開については、担当教諭との打ち合わせでは、十三時限の授業全体像の形成を濃密に企画しておくべきを感じた。

初年度としては、よい滑り出しであったと思われる。初年度の経験を踏まえて、前記「部外指導者の意見」の項を参考にして、さらに検証、検討を加え前進させればよき授業がなされると思われる。

年度が替わると、教員異動により部外講師の要請に変化が予想されるので、初年度十四校以上の要請に応えられる体制を確立しておく必要がある。

これからの剣道教育

勝浦中学校校長　立川信彦

教育の使命は、常に人づくりにあります。教育基本法においても、教育の目的は「人格の完成」を目指すことであることが明記されています。

平成二十四年四月から実施された新学習指導要領で、中学校の保健体育授業に日本の伝統文化である「武道」が必修となりました。本校ではこれを受けて剣道を採用し、取り組んでおります。これは全日本剣道連盟が制定した「剣道の理念」を踏まえつつ稽古や試合を通して日本の伝統文化である剣道を正しく継承し、さらには「人間形成」を醸成するという教育的な期待感を意図したものであると考えます。

剣道の授業を通し、精神面では、相手を尊重し、伝統的な作法、所作、行動などの礼節を重んじ、思いやりのある心や感謝の心を育てていきたいと考えています。また、技術面においては、剣道の授業は中学一・二年生を対象として実施しており、学習指導要領では基本動作と基本となる技を身につけると共に相手の動きの変化に対応した攻防ができるようにすることとなっています。

さらに、体格差や技能差、男女差などを配慮したグループ分けの実施、生徒の学習段階や個人差を踏まえた段階的な指導、用具や活動場所の安全点検の実施など特に安全に留意した授業が実施されるよう配慮しています。

剣道を学ぶことで、単に試合の勝敗を目指すだけでなく、技能の習得などを通して礼法を身につけ、人間としての望ましい自己形成を育むことが重要であり、規範意識の希薄化が問題となっている今日だからこそ、更にその重要性は高まっております。このことは、学校現場だけでなく、社会や家庭など学校以外の場所においても重要視されつつある問題だと認識されています。

そこで、学校で学習するすべてのことに共通して言えることですが、教育には時に強制が必要です。「必ず宿題をやってきなさい」と言うのも強制、剣道の素振りを苦しくても百回繰り返しなさい、と言うのも強制です。それに耐え抜いたものだけに、次のもっと高いレベルの学習や剣道が可能になるのです。

私たちが生活していく上で、大切なことは辛抱をすると言うことです。辛抱することによって、人生で必ず求められる「忍耐力」が身につき「目標」を持つことを覚え、その目標に向かって忍耐することを覚えるのです。その結果、目標に向かって近づき、成功するようになると、なお一層辛抱の楽しさが分かってきます。

辛抱していると、必ずいいことがあります。「自律」ということを自然に覚えるのです。目標は、始めは学校の先生や剣道の師範から強制的に与えられるものですが次第に自分で目標を掲げることができるようになります。これが自律です。

自律した人は、人から与えられた目標ではなく、自分で決めた

目標に向かって勉強することや人生を生きていくことができるようになります。その境地に達すると、何でも人のせいにしていた自分が間違っていたことに改めて気づくようになります。

本校では自律した人間になっていけるよう剣道の授業を通して生徒と共に教師も伸びていきたいと考えております。

特集Ⅱ　旭日中綬章拝受

旭日中綬章拝受にあたり

遠藤一美

皆様にはますますご清祥のことと心よりお慶び申し上げます。

さて、私ごとですが、平成二十四年秋の叙勲勲章伝達式に際しましてははからずも、旭日中綬章拝受の栄に浴し、身の引き締まる思いでございます。

平成二十四年十一月三日付けで、旭日中綬章を授与されることと成り、十一月九日、東京プリンスホテル二階鳳凰の間に於いて、勲章及び勲記の伝達を頂きました。引き続き、夫婦ともども皇居に参内し、天皇陛下に拝謁の栄誉とともにお言葉まで賜り、感激の極みでございました。

顧みますと、昭和四十年阿南市議会議員初当選以来、阿南市議会議員五期十七年、また、昭和五十八年からは徳島県議会議員を六期二十四年努めさせていただきました。この間、青少年の健全育成はもとより、橘湾石炭火力発電所の誘致、本州四国連絡橋の早期実現、一般国道五十五号阿南道路の早期完成、徳島県南部運動公園の整備促進など、ハード・ソフト両面に力を注ぎ、県民生活や県内産業の基盤整備に一定の成果を得ることが出来たものと考えております。これも、ひとえに皆様方から頂きました長年に亘る心温まるご指導、ご支援の賜ものと家族ともども感謝申し上げます。今後は、皆様から頂きましたご厚情を胸に刻み一層精進して参りたいと肝に命じています。引き続き、ご指導ご鞭撻を下さいますようお願い申し上げます。

後になりましたが、諸先生方、ご家族皆様方の益々のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、ご挨拶と致します。

火山
红鶴舞

遠藤一美先生の叙勲を祝して

徳島県剣道連盟審議員
徳島県高齢剣友会理事長　高島　稔之

徳島県剣道連盟名誉会長・高齢剣友会会長の遠藤一美先生が、平成二十四年秋の叙勲で、これまでの永年の地方自治功労が認められ、旭日中綬章をお受けになりました。

遠藤先生、本当におめでとうございました。心よりお慶びを申し上げます。

昭和四十年十一月～昭和五十八年三月までの連続五期十七年間の阿南市議会議員としての活動、昭和五十八年四月～平成二十三年四月までの通算六期二十四年間の徳島県議会議員としての活動を終えるまで、実に四十年間、地方議会議員としてご活躍されました。その間、市議会・県議会ともに重要な委員会の委員長を務められ、両議会ともに議長の重責をも果されました。

その間、四国市議会議長会会長表彰（地方自治功労三回）
全国市議会議長会会長表彰（地方自治功労二回）
阿南市長表彰（地方自治功労一回）
全国都道府県議会議長会表彰（地方自治功労三回）
徳島県体育協会体育功労者表彰（体育功労）
徳島県知事表彰（体育功労）
文部大臣表彰（体育功労）

など、数々の表彰を受けておられます。

また、剣道・体育関係の役職としては、
徳島県剣道連盟名誉会長（現在）
徳島県高齢剣友会会長（現在）
全日本高齢剣友会副会長（現在）
阿南市体育協会会長（現在）
徳島県剣道連盟会長（十四年間）
徳島県剣道連盟副会長（五年間）
徳島県剣道連盟阿南支部長（十四年間）
全日本剣道連盟理事（二年間）
徳島県体育協会理事（八年間）

など、数々の要職を務められています。

そして、徳島県剣道連盟会長を辞された平成二十三年三月には、全日本剣道連盟から、これまでのご尽力とご功績に対して感謝状が授与されました。

今回の叙勲祝賀会は、平成二十五年二月十日、ホテル クレメント徳島で徳島県知事を始め国会議員、県議会議員、市町村長及び市町村議会議員、経・財界人、剣道関係者等三百余名の参加者が出席して盛大に開催され、遠藤先生の人脈の広さを改めて感じることができました。

この度のご受章は、先生ご自身のご尽力・ご功績によるものですが、それが達成できたのは、先生の強健な身体、努力を重ねる

ことのできる精神力・忍耐力及び人間性の上に、奥様始めご家族・ご親族、支持者の方々のご支援等が実を結んでの栄えあるご受章であろうと拝察致しております。

先生ご自身の強健な身体・精神力・人間性は、剣道の修練を通して培われたところが大であったのではないかと思っています。また、先生のお人柄・人間性とともに剣道を通しての人間的な繋がり（人脈）も、議員としての遠藤先生を支援する輪をさらに大きいものにしたという側面もあったのではないかと思います。

私は、祝賀会の席で多くの方々の祝辞を拝聴する中で、何時しか遠藤先生の人柄・生き様と、全日本剣道連盟の「剣道の理念」・「剣道修練の心構え」とを、オーバーラップさせていました。剣道の理念「剣の理法の修練による人間形成の道である」。剣道修練の心構え「剣道を正しく学び、心身を錬磨して旺盛なる気力を養い、剣道の特性を通じて礼節を尊び、信義を重んじ誠を尽くして、常に自己の修養に努め、以って国家社会を愛して、広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである」。遠藤先生の「剣道に取り組む心構え」、そして、遠藤先生が「議員として取り組む心構え」の多くが一致していることに気づきました。（傍線部）

そして、私が今、一番見習わなければいけないと感じていることは、八十八歳のご高齢になっても、自らの目標を持たれて日々の稽古を熱心に続けておられるという剣道に取り組む姿勢です。先生は、これまでに、全日本高齢者武道大会で四回の優勝を成し遂げておられます。次は、寿A組、寿B組を合わせての優勝、即ち内閣総理大臣賞の獲得です。その意味で、遠藤先生の剣道に取り組む姿勢は、生涯剣道を目指す者の鑑です。

私は遠藤先生の叙勲祝賀会に参加させていただくことにより、剣道の修練と人間としての生き様を再考させていただく機会となりました。そのことを申し添えさせていただき、叙勲祝賀の粗辞とさせていただきます。

遠藤先生！本当におめでとうございました。今後益々のご盛武を祈念して止みません。

旭日中綬章叙勲を祝って

阿南支部　西岡　侃

先ずは、名誉会長遠藤一美先生、旭日中授賞叙勲、誠におめでとうございます。心から謹んでお慶び申し上げます。

大変長い間、地方自治の発展と国民の福祉向上のために、ご努力下さり誠にありがとうございます。心から厚くお礼申し上げます。これからは、お身体を労りながら余生を楽しんで下さい。

地元、大野武道同志会からお祝いの文章を贈ればとの依頼があり、粗文ですが、書かせて戴きました。

先生は、戦後、剣道復活と同時に、今は亡き、範士七段、清原栄先生と共に剣道の発展向上に努力されました。その傍ら、剣道で鍛えた精神力を、国民の生活向上の為に、政治への道へと進まれ、昭和四十年に阿南市議会議員に立候補され、初当選されました。その後五期連続、十七年間、議長にも就任され、市民の福祉向上、橘湾の火力発電所誘致に伴う埋め立て工事、国道五十五号線バイパスの着工等、阿南市発展を目指して、剣道で鍛えた先見の目で真面目に務められました。

政治のために役職の巾も広く行動範囲が広がっても、先生は自動車に、剣道防具を乗せており、行く先々の道場で剣道の稽古をさせておられます。

昭和四十年には、教士を、昭和五十一年には、七段を修得されています。各種団体の役職にも多くつかれ、学校関係では体育後援会活動に力を注がれました。一日二～三ヶ所の学校で稽古する時もあられたようです。

遠藤先生は何処の道場へ行っても、面を着ける時は何時も一番に着けて稽古し、最後まで元立ちをされています。特に若い人（高校生）と好んで稽古されています。若い人は打ちも、動きも早いからでしょう。そして稽古ではいつも、初太刀を大切にしています。だから試合等では常に好成績を収めておられるのでしょう。稽古の量は県内で最高と言っても過言ではないでしょう。その証明書は先生の素足の足の裏です。私はそれを拝見した事があり「なるほど」と感心しました。

先生は若い時には国民体育大会、都道府県対抗剣道大会に、県代表チームの監督や大将で数多く出場されています。

高齢者になられてからの主な成績は次の通りです。

全国高齢者武道大会　個人戦　優　勝　四回
　　準優勝　二回
　　三　位　四回

全国健康福祉ネンリンピック　県代表チーム大将　五回

前記の様に好成績を収め、県内の高齢者剣道大会では、個人戦では常に優勝されています。それでも先生は謙虚な姿勢で私達に「皆さんのお陰です」と言って、私達に接して下さいます。

その他にも阿南支部主催の清原杯争奪剣道大会の優勝旗（七本）、阿南市体育祭剣道大会の優勝旗（五本）等が古くなり、更新しなければならない時、支部のお金で支出出来ない時があります。そんなとき、遠藤先生が黙って代わりの優勝旗を作って下さり、これも公表したりはしません。「何と心の広い人だなあ」と感謝しています。

昭和五十八年六十四歳で県議会議員に当選され、二十年間徳島県の自治発展及び県民の福祉向上のために活躍され、議長にも就任されました。先生が携わったお仕事は、橘湾の埋立地に火力発電所の誘致、国道五十五号線バイパス、新那賀川橋の着工、鳴門淡路明石大橋高速道路の完成等数多くあります。これらも、あまり公表せず、後日、自然に「『遠藤が県議の時に頑張ったのだな』と解ってもらえる時が来る」と言っておられます。

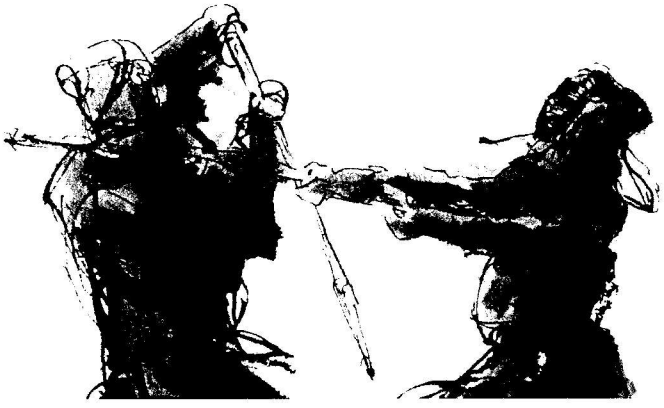
私も先生の選挙のお手伝いをしたことがありますが、民家を訪ねても「遠藤先生は偉そうに言わんと、気安いお人じゃのう」とおっしゃる方が大勢いました。これも先生が政治の道でいろいろな人と交際され、勉強され、苦労もされ、心が広く、思いやりのあるお人であるからです。

我々住民の良きお手本（人の道の範士）です。お齢も今年の五月二日で米寿になられますが、くれぐれもご自愛下さり、いつまでも長生きされて、後輩のご指導をお願い致します。

後になりましたが、遠藤家のご家族の皆様方の、ご健勝とご清栄を心からご祈念致しお慶びの言葉に変えさせて戴きます。

〈誕生日お祝い句〉

米寿剣士勲章懐いて五月晴　侃



特集Ⅲ　西日本勤労者剣道大会優勝

十六年ぶりの優勝に思う

警察支部　監督　平野誠司

平成二十四年六月十日、高知市において開催されました「第五十一回西日本勤労者剣道大会」において、徳島県警Aチームは十六年ぶり二度目の優勝に輝きました。これも剣道連盟の先生方はじめ、皆様方のご指導ご支援の賜であり心より感謝申し上げます。

過去を振り返ってみますと、昭和五十七年（第二十一回大会）に教員チーム「富西」（西谷先生・河田先生・福多先生）が初優勝して以来、平成八年（第三十五回大会）に「徳島県警A」（吉田博・平野・吉田茂）、そして今年（第五十一回大会）の「徳島県警A」（山名・六條洋・六條勝）で徳島県勢三度目の優勝ということになります。

その他には準優勝が四回、三位が五回となっていますが、いずれにしましても他県と比べ本県が劣勢であることは否めないところであります。

また、この勤労者大会を職業別に見てみますと、以前は県警対教員という構図で優勝が争われて来ましたが、最近では実業団の実力が伯仲してきており、近畿・北九州の実業団対県警の様相が強まっています。

今年の大会も三五〇チームを超える参加数があり、序盤から接戦に継ぐ接戦で緊張感あふれる試合の連続でありました。その中で徳島県警Aチームは、決勝までの八試合を先鋒・中堅の六條兄弟が堅実に試合を進め、大将山名が勝負を決していくというスタイルを最後まで貫き通しました。まさに混戦の中を勝ち抜いた優勝であり、待ちに待ったこの瞬間は本当に心地のよいものでありました。

ところで、現代の剣道といえば近代スポーツの枠組みの中、天下ご免の勝利至上主義にかまけて、「競技」と「勝負」という狭間でさまよい続けているといっても過言ではありません。

「勝つ」という目標に向かうには、「如何にして勝つか」という中身ある方法論が必要であり、修することに意味のある過程でなければなりません。単に「剣の理法」が技術向上のためだけでなく、「人作りの理法」として生かされなければ「勝つ」ことにも意味が無くなってしまうのではないかとつくづく思います。

「真剣勝負」……、切るか切られるかという先人が極め続けてきたこの空間は、剣道（対人競技）での謂わば真骨頂であり、一番の醍醐味であることは皆さんもご理解するところでありましょう。

武の歴史として脈々と受け継がれてきた剣道というこの伝統も、一つの価値観でありますから、現代においてそれが現代的な価値

を得てこそ、その伝統がその時代に展開したものと言えるのであります。

竹刀という剣で共に打ち合い共に傷つけ合いながら、自他共々向上させていくという世界。お互いに習い、学び、導かれ、そして育まれていくことの大切さを後世に伝えていきたいものです。

どうか十六年ぶりの快挙に、この「想い入れ」を寄せながら、一人一人の描くよりよい剣道観をめざし、奮起をもって徳島の剣道を進めていこうではありませんか。

準々決勝

チーム名	先鋒	中堅	大将	得点
徳島県警A	六條勝	六條洋	山名	1(3)
	メメ	ド		
高知県警B		ド	ツ	1(2)
	山本	尾崎	宇賀	

準決勝

チーム名	先鋒	中堅	大将	得点
徳島県警A	六條勝	六條洋	山名	1(1)
			メ	
西日本銀行本店				0(0)
	内野	渡辺	小野	

決勝

チーム名	先鋒	中堅	大将	代表戦	得点
徳島県警A	六條勝	六條洋	山名	山名	1(1)代
			コ	コ	
岐阜剣友会(国体)	メ				1(1)
	川畑	中川	野田	野田	

高知新聞

徳島県警A 代表戦制す

【決勝　徳島県警A－岐阜剣道会】代表戦、徳島県警Aの山名＝右＝が小手を奪い、優勝を決める（いずれも県民体育館＝反田浩昭撮影）

西日本勤労者剣道大会

警察支部　山名信行

西日本勤労者剣道大会において徳島県勢として十六年振りに優勝することができました。本当に嬉しく思います。また、物心両面にわたりご支援していただいております関係各位の皆様方に対し、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

この大会は、今回で五十一回を重ね、非常に歴史のある大会です。試合は三人制で行われ、一人の勝敗がチームに大きな影響を与えます。言い換えればどのチームにも優勝のチャンスが有ると言えます。参加チーム数も毎年三〇〇を超え、四県の県警察はもちろん、全国実業団大会でも上位に食い込むチームも参加します。

一・二回戦あたりは試合までの間隔も非常に長く数時間かかり、集中力とコンディションを持続することが難しく、また、決勝トーナメントに入ると、連続して試合が続き、集中力だけでなくスタミナと粘り強さが要求されます。

私は平成十一年からこの大会に参加し、これまで、準優勝、三位入賞といった経験はありますが、特に悔しい思いをしたのは五年前の決勝戦です。まったく五分の大将戦において開始数十秒で引き胴を奪われ優勝を逃してしまいました。

今回私は、徳島県警Aチームとして出場しました。メンバーは先鋒に六條勝選手、中堅に六條洋選手、大将に私という布陣で臨みました。

予選トーナメントでは、先行したポイントを大将の私が引き継ぎ、優位に試合を進めるといった展開で予選トーナメントを勝ち上がりました。

決勝トーナメントでは、一進一退の攻防が続き、そのほとんどが五分の大将戦となりましたが、持ち前の粘りを発揮し、決勝戦まで勝ち上がりました。

決勝戦の相手は、岐阜剣友会でした。

このチームは地元開催の岐阜国体を控え、強化のため国体候補選手で構成されたチームです。

決勝戦の前、四国の仲間からは

「絶対に東日本に優勝をもって帰らせるなよ。」

と発破を掛けられました。

先鋒戦、相手はインターハイ個人優勝経験を持つ上段の川畑選手です。六條勝選手は、左コテや片手突きで果敢に攻め崩そうとしますが、コテに攻め入ったところ出頭面をもらい一本負け。

続く中堅戦、昨年の全日本選手権岐阜県代表の中川選手と六條洋選手。弟の取られた分は自分が取り返すとばかりに攻め、旗が一本あがる惜しい場面もありましたが引き分け。

そして、一勝一本のビハインドで迎えた大将戦。岐阜は上段の野田選手。相手が二刀の間合いをつかむ前に勝負を掛けた右コテが一本となり、星の上ではイーブンに追いつきました。その後、次の一本が勝負の明暗を大きく左右することから、互いに慎重に

なり決め手なく、代表戦となりました。

代表戦では、互いに譲らず非常に長い試合になりました。

お互いにフラフラになりながらも、最後に捨て身で飛び込んだ右コテが一本となり優勝をつかむことができました。

正直、試合が終わった瞬間、大将としての役割が果せたことにほっとしました。

この試合を終え感じたことは、稽古を続ければ、いつか結果に結びつくということです。

今後もこの結果に満足することなく、稽古を重ねていきたいと思います。

平成二十四年度　顕彰一覧

旭日中綬章（内閣府）

○遠藤　一　美（大正十四年五月生れ）

昭和四十年より阿南市議会議員を五期十七年、昭和五十八年より徳島県議会議員を六期二十四年務めている。その間、阿南市議会議長・徳島県議会議長も歴任している。また、平成九年より十四年間、徳島県剣道連盟会長として連盟運営に携わった。公私にわたり、社会に対して多大なる貢献をなしている。

全剣感謝状受賞（全日本剣道連盟）

○吉田　祖（大正十一年四月生れ）

全日本剣道連盟が創立六〇周年を迎えるにあたり、長年にわたり、剣道普及発展に貢献のあった七段以上で年齢九〇歳以上である全国九十五名に送られている。

剣道有功賞（全日本剣道連盟）

○中山　啓　男（昭和五年二月生れ）

徳島県内南部の公立学校の教諭・管理職を歴任し、退職後、私設道場「徳島至誠館」を開設した。団体優勝は県外二十四回を含め、百八十五回となり、各種全国大会にも道場生が徳島県代表として数多く出場している。剣道発展に多大なる貢献をしている。

少年剣道教育奨励賞（全日本剣道連盟）

○那賀川少年剣道教室

昭和四十六年に設立され、現在まで四十一年間にわたって、少年剣道の育成に精力的に取り組んでいる。少年剣道教室を卒業した多くの生徒が、中学・高校においても選手として活躍している。本年度は那賀川中学校が県中学総体で男女そろって優勝している。

○阿波少年剣道教室

昭和四十九年に設立され、現在まで三十八年間にわたり、青少年育成の活動に尽力している。特に、春分・秋分の日には地域をあげて、子供から大人が一緒になって錬成会を実施し、生涯剣道の実践に力を注いでいる。

体育功労者表彰（徳島県体育協会）

○西谷　肇　一（昭和二十六年十一月生れ）

教員在職中は、徳島県高体連剣道専門部長および全国高体連剣道専門部副部長として、高校剣道の隆盛に貢献している。また、徳島県剣道連盟においても常任理事・理事として青少年育成に努力し、現在も審議員として剣道発展のため、尽力している。

全剣感謝状受賞

師よ友よ

吉田　祖

去年の秋、珍しく全日本剣道連盟より封書を頂いた。早速開いてみると卒寿の祝辞と紅白のお菓子に、一本の手拭いが入っていた。写真はその手拭いである。私は驚きと感謝の思いで胸一杯に溢れた。老いて尚剣から離れない山里暮らしの私の手を握り取って「友だよ」「剣道連盟の一員だよ」と言ってくれたように思い、心の底から嬉しさがこみ上げてきた。さっそく県剣道連盟に報告し、知らぬ間に内申してくださったであろう御礼を申し上げた。

『剣窓』十月号で七段以上で平成二十四年に九十歳を迎えた九十五名に送られた事を知った。剣道連盟という立派な団体に属している幸せをしみじみ思った。

顧みれば七十五年前の昭和十一年、旧制富岡中学校へ入学した。武道が正課で私は剣道部へ入部し、剣道修行の第一歩を踏み出した。武専出身の「大畑兼三郎」先生、大潟の「小浜重徳」先生に五年間習い、大日本武徳会に入会した。軍隊では短剣術を習った。

終戦後の六年間は剣道が出来ず、講和条約が発効した昭和二十七年から「山家雪蔵」先生に師事して稽古を始めた。昭和二十八年度を丹生谷剣道大会の第一回として翌年三月に開催した。昭和三十二年、弟子達が協力して広く募金を行い、「振武館道場」を建設し、山家雪蔵先生に贈呈した。丹生谷十ヵ町村の小中学校の生徒を集めて合宿し、暑中稽古・寒稽古を毎年実施し、阿波の柳生谷とまで言われるようになった。

先生御在世中にと、昭和四十九年七月、「武市恭信」徳島県知事には染筆、「高島永吉」範士には讃辞のご協力を頂き、弟子一同で「山家雪蔵」翁の碑を建立した。

山家雪蔵先生没後は範士八段「堀江幸夫」先生に師事し、その他「松本一城」先生ほか数多くの先生方・友人・後輩達との切磋琢磨を続け、剣道の奥義を追い求める毎日である。

十一月、東京芸術大学教授「たほりつこ」先生の来訪を受けた。「イスア国民文化祭二〇一二」の一環として丹生谷の各神社にある舞台で現代アート展を開催したい、また会場である舞台もアートの一部として催し、山村にも現代の芸術を普及したい、さらにその展示の感想も数多く知りたいので協力を頼みたい、ということだった。私は快く了承した。現代アートに無知な私は、先生にアートの説明を求めた。先生は熱っぽく熱心に私が判るように話して下さった。究極は「心と心のふれあい」ということだった。私が「剣道の極意に相通じるものがありますね」と言うと、先生はそのことの説明を求められた。私が日本剣道形の三本目につい

て説明した。

打太刀の者、仕太刀の者二人で行う。互いに突術で攻防を尽くして戦い、仕太刀は「位詰」で攻め詰め、打太刀を正し、殺傷せず終わる。まことに武士道の粋である。両者とも突かれも切られもしていないのに仕太刀の勝ちとなる。勝点ないのに勝ちとするのはおかしいが、打太刀が仕太刀の気剣体の気迫と品格に参りましたと心で言うから仕太刀は打突を収める。これを「心と心の勝負」と見れば、現代アートの一心と心のふれあい一と相通じませんかと話した。秋の日は知らぬ間に落ち、既に夜となっていた。先生を送り出した後、剣道人の温かさ、情の深さをしみじみ思った。勝敗ばかり追う現代社会にあって、芸術と相通じ、高いものを追い求める剣道のすばらしさをつくづく想うとともに、これを守り伝えることが全剣連へのお返しになるぞと、腹に力を入れた。

剣道有功賞

剣道有功賞を戴いて

中山啓男

この度、剣道有功賞という過分なる賞をいただき、身に余る光栄に存じます。このことは、本県剣道連盟によりますご推挙の賜物と拝察し、厚くお礼申し上げます。

私と剣道の出会いは、三十八才にして日和佐中学校の剣道部顧問になったことを機会に、竹刀を握ったことからそもそも始まります。以来、剣道の奥深さに魅せられて四十余年を数えます。

当時を振り返りますと、初段の素人指導者ではありましたが、「毎日、防具を着けて部員たちと共に汗を流すこと」・「切り返し・掛かり稽古をしっかり行うこと」を心掛けて指導に励みました。このことは私の指導者としての信条でもありました。

その後、部員もめきめきと腕を上げ、昭和四十九年度の全国大会県予選を制し、日本武道館で行われた第四回全国中学校剣道大会男子団体に出場しました。選手たちは力を出し切り、見事ベスト八に進出することができました。日和佐町の森町長さんも会場に応援に駆けつけてくださり、殊の外喜んで頂いたことを懐かしく思い出します。

この陰には、福井軍二・影山美雄両先生を中心とする多数の先生方のご指導とご協力を忘れることはできません。

また、日和佐中校長時代には喜田町長さんや魚住教育長さんからは剣道部に対してご理解とご配慮をいただきました。そして学校敷地内に単独の剣道場を建設頂いたことは今も忘れることができません。

また、転勤により日和佐中を離れ、宮浜中・平谷中・櫛渕小の各学校に赴任しましたが、剣道をしていたお陰で多数の先生方と出会い、親交を深めることができました。

中でも木頭の松本英雄、雄西義春両先生他、多数の丹生谷の先生方との出会いがありました。少年剣道から一般に至るまで、長い歴史の中で培われてきた、剣道熱とレベルの高さを痛切に感じ、数多くのことを学ぶことができました。

また、櫛渕小校長時代には小松島支部の早川先生、阿南支部の遠藤、浜田、尾崎各先生をはじめ多数の先生方にご指導を頂き、早朝稽古会では、楽しく稽古をさせていただきました。

やがて剣道と生徒の教育に熱く燃えるうちに教職を去るときがきました。六十才は心身共にまだ若く、家内と二人で京都の同志社大学に聴講生として学ぶことを決めました。知識の充電に十分でした。家内は数多い神社仏閣を訪ねて満悦の様子でした。

さて、その年の秋、羽ノ浦町に「剣道場の適地が見つかった」と副館長から連絡が入り急遽引き上げることにしました。

いよいよ父と子の約束が実現するときがやってきました。予定

通りに羽ノ浦町宮倉に、居宅に併設した剣道場の完成を見ました。

平成三年十二月には、当時の県剣道連盟名誉会長の三木只雄先生、顧問の清原栄・中川虎雄両先生、会長の堀江幸夫先生他、百余名の先生方に徳島至誠館開館記念行事の稽古会並びに祝賀会にご臨席を頂きました。また、副館長の居合道の師である平尾勝美先生には居合道の「四方祓」で道場開きを祝っていただきました。

私は、道場生と高齢剣友会の稽古を生き甲斐とし、また、全日本高齢者武道大会や高知、愛媛などの交流大会にも積極的に参加しました。

平成十五年十月には、徳島で「ねんりんピック徳島大会」が開催され、地元の皆様の温かいご支援とご声援を受けて、幸運にも日本一の栄冠を手にすることができました。

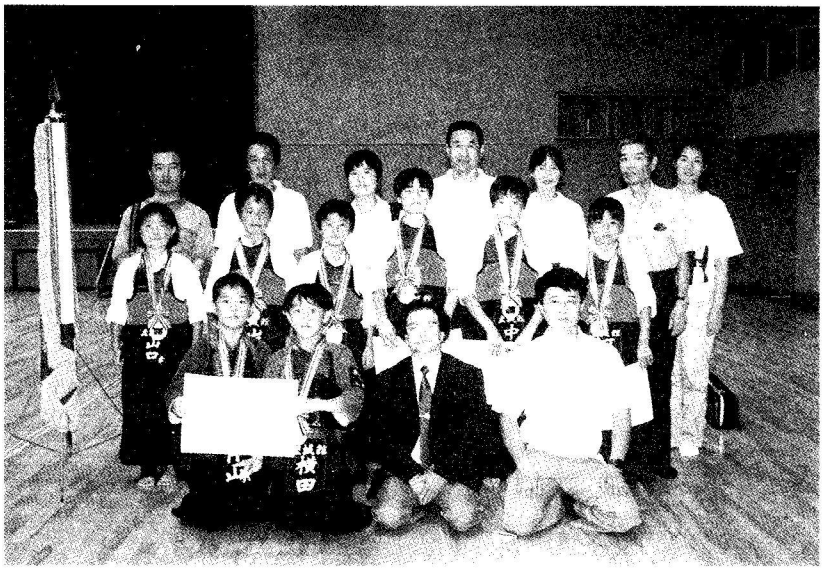
先鋒から中尾・高島・松村・坂下の各先生、大将中山、監督高下先生でありました。大会では全て副将までの四人の先生方の活躍で優勝することができました。大会まで稽古も良くしましたし、時間とエネルギーを掛けた分素晴らしい成果が出て、最高の喜びを感じることができました。

徳島至誠館も、昨年の十二月で開館二十一年を迎えました。初心者十一名に私と副館長、現徳島市教育長の石井博先生の三人で指導をスタートしました。その後、河田清実先生・村井正志先生をはじめ多数の先生方が子供さんを連れて参加して頂きました。この先生方のご指導なしでは現在の徳島至誠館は存在していないと思っています。先生方には感謝の気持ちで一杯です。

開館当時、優勝を目指して一生懸命稽古をしましたが、現在では優勝回数も県外二十四回を含む計一八五回となり、全日本都道府県対抗少年大会や全国スポーツ少年団大会などの全国大会に徳島県代表として五十名の道場生が出場していると副館長から報告を受けています。

また、この道場を入門した卒業生は百余名を数えます。早い者はもう社会人としてて各地で活躍中との便りを手にしています。「私たち父子の選択は間違っていなかった。私は剣道と出会い幸せな人生を送ることができました。ありがとうございました。」

最後になりましたが、県剣道連盟の益々のご発展を心よりお祈り申し上げ、お礼のご挨拶と致します。



第24回徳島眉山ライオンズ大会　平成６年９月23日

第24回徳島県社会人大会　平成７年10月１日

少年剣道教育奨励賞

少年剣道教育奨励賞をいただき

那賀川少年剣道クラブ　二反田　和　則

この度は全日本剣道連盟より「少年剣道教育奨励賞」を頂き、身に余る光栄です。

那賀川少年剣道クラブは、昭和四十六年四月七日、那賀郡（現阿南市）那賀川町敷地今津小学校体育館を道場として、故磯部茂治先生を中心として青少年の健全育成目的として発足いたしました。当初は、町内初の剣道部でしたので町民にはなかなか受け入れにくく、山田正博前会長と二人三脚で部員勧誘にご苦労されていたと伺いました。私が入門時には、四十名近い部員が中学生、高校生を元立ちとして日々汗を流していました。現在まで三百十名の門下生が剣道を学んでいます

先生は「基本をしっかり学べ……」と何時も言われていました。また「礼儀正しい生活をしなさい」挨拶にも厳しく。防具の整理整頓、着衣の乱れもよく注意されていました。

「着衣の乱れは、心の乱れ、心乱れていれば剣も乱れる。」とその後学びました。

先生は、小学校校長退職後、道場を開かれました。的確な指導が魅力で、頭に残るまで粘り強く教えいただき、師弟同行の信念を持ち、本気で稽古取り組んでいました。気を抜いた稽古、試合すると鬼のように叱られ、褒める時は、笑顔を浮かべながら我が子のようにしていただきました。私が防具付け始めた頃、よそ見した時に「剣道は目が大事なんじゃ……！」と叱られた思い出が未だに忘れることができません。昭和六十三年四月健康上の都合で指導を退き、教え子の山田浩司・磯部恭司先輩と私の三人が受け継ぎました。現在は、山田浩司会長を中心として指導に励んでいます。しかし、時代の流れには逆らえず部員は年々減少傾向であり、現在は十一名の部員です。

今回の受賞を機会に、部員増加に繋がるように願っております。これからも先代の指導方針を貫き、選手達の成長楽しみに賞に恥じないように、精進したいと考えています、今後ともご指導、ご鞭撻頂けるようよろしくお願い申し上げます。また、最後に、ご推薦頂いた徳島県剣道連盟に感謝いたします。ありがとうございました。

駐在さんが師範代

豆剣士の腕メキメキ

那賀川少年剣道クラブ

元教員からバトンタッチ

「オメン、コテ」体育館に豆剣士の鋭い気合が響く。指導するのは高段者の元教員と駐在さん。元教員が結成した那賀川少年剣道クラブの師範代を、さる九月から駐在さんが引き受けており、剣道で青少年の健全育成をはかる一人の息はぴったり。父兄や学校の先生から感謝されている。

同クラブは、七年前、同町島尻、元教員（機部度治さん六七）＝剣道七段・教士＝が青少年の不良化を防止して健全育成をはかるため組織した。今津小学校一年、島田信喜君ら女子二人を含む小、中学生約四十人が毎週火、土曜日の午後七時から同九時過ぎまで今津小学校体育館で熱心に頑んでいる。時には町内の高段者が機部さんの手助けで豆剣士を指導していたが、九月からはその河南芳敏地駐在所の巡査部長（三二）＝剣道四段＝も指導に加わった。

おかげで豆剣士たちの腕はメキメキ上達。現在、有段者は初段五人で、この中には女性剣士の那賀川中二年、田上みゆきさん（一三）もいる。これまで県下剣道大会で優勝したこともあり、四国大会に出場したこともあるが、それよりも父兄たちは「剣道のおかげで姿勢が良くなったし、言わなくても目上の人にきちんとあいさつするなど礼儀正しくなった」と喜んでおり、最近は豆剣士たちに交じって竹刀を振る父親の姿もみられる。

豆剣士を指導する出葉巡査部長ら

昭和53年当時の徳島新聞記事

少年剣道教育奨励賞を受賞して

阿波少年剣道教室　桑原啓治

この度、阿波少年剣道教室が全日本剣道連盟から少年剣道教育奨励賞を受賞することとなりました。大変名誉ある賞であり、身に余る光栄と指導者および関係者、部員一同心より感謝申し上げております。これも徳島県剣道連盟の先生方をはじめ、たくさんの剣道関係者の方々のご厚情、ご指導によるものであると心よりお礼申し上げます。

阿波少年剣道教室は一九七四（昭和四九）年六月、笠井選先生、細川昭典先生が中心となり発足しました。初代室長は笠井選先生であり、その後藤井利一先生、そして現在私が室長となり今年で三十九年目を迎えます。笠井選先生は阿波町で整形外科医をされており、剣道を通じて、子どもたちの体力増進、健全育成を図ろうとなさいました。また礼節を重んじ、挨拶や基本的な生活習慣なども子どもたちにご指導くださりました。当時は教室に通う子どもが大勢いて、阿波町林小学校体育館では入りきらず、低学年や初心者は近くの林公民館で細川昭典先生が稽古をし、防具を付けた子どもは林小学校体育館で笠井選先生が稽古をつけていました。私も高校一年の時、当時剣道部顧問であった塩田善治先生に連れられ、阿波少年剣道教室に通い、笠井先生に稽古をつけてもらっていました。

現在の阿波少年剣道教室は男女合わせて十八名在籍しており、毎週火曜日・木曜日を稽古日としております。子どもたちも暑さ、寒さをものともせず、大きな声を出し、元気に稽古に励んでいます。私も創立者の笠井先生、前室長の藤井先生の教えのとおり、子どもたちには、剣道を通じて健康な体を作り、礼儀、相手を思いやる心を忘れることなく日々の生活を送ってもらいたいと思っています。

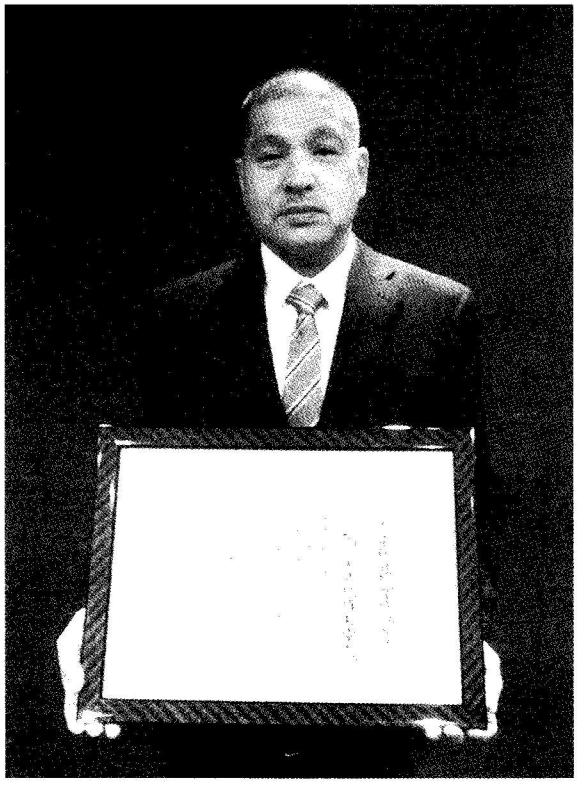
現在剣道人口の激減が課題となっております。平成二十四年度からは中学校の体育の授業で武道が必修となりました。武道は、武技、武術などから発生した我が国固有の文化であり、相手の動きに応じて、基本動作や基本となる技を身につけ、相手を攻撃したり相手の技を防御したりすることによって、勝敗を競い合う楽しさや喜びを味わうことができます。また武道に積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合ができるようにすることを重視します。剣道の良さを多くの子どもたちに理解してもらい、これをきっかけに剣道人口の増加を期待したいものです。

阿波少年剣道教室も部員が数名という時期がありました。子どもたちよりも指導者が多い時もありました。しかし、故中尾誠先生や塩田善治先生がご尽力くださり、また徳島県剣道連盟阿波支部の先生方のご協力もあって、今では十八人となり、稽古場には稽古前から元気に走り回る子どもたちの声であふれています。

今の子どもたちはいじめや不登校など様々な問題を抱えていま

す。学校や家庭で悩むことも多くあると思います。しかし剣道をすることによって心を鍛え、仲間の大切さや思いやり、いのちの大切さを学んでほしいと思っています。そうして長く剣道を続け、後輩たちを指導する立場になってもらいたいと考えております。私自身も阿波少年剣道教室を守り、発展させていくために、多くの先生方の指導を受け、努力していきたいと思っております。

最後になりましたが、この度の受賞に当たり、ご推薦いただいた徳島県剣道連盟の方々をはじめご指導をいただいた諸先生方には心より感謝の意を表すとともに、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げまして、受賞の挨拶とさせていただきます。



平成24年度　徳島県中学校剣道優秀選手

No.	男子	学校名
1	坪井貴裕	那賀川
2	庄野智	那賀川
3	松本高史	那賀川
4	濱田諒	那賀川
5	斎尚孝	那賀川
6	南谷飛鳥	徳島
7	熊橋和真	徳島
8	織野将寛	徳島
9	岩佐壱誠	木頭
10	要遼太郎	木頭
11	田中皓己	阿南一
12	走川海秀	阿南一
13	玉川貴文	鳴門一
14	玉川博文	鳴門一
15	福田崚斗	羽ノ浦
16	古川秀也	八万
17	荒瀬友佑	板野
18	美馬悠一	北井上
19	早岡凜太郎	北島
20	住友海斗	坂野
21	吉田和晃	阿波

No.	女子	学校名
1	清水真優	那賀川
2	野村愛里	那賀川
3	竹原桃香	那賀川
4	玉田真子	徳島文理
5	平島かれん	徳島文理
6	吉岡真子	徳島文理
7	山下瑞稀	石井
8	森永佑奈	石井
9	深見桃子	鳴門一
10	上田真奈	県立川島
11	新宅美佳	池田
12	谷美緒	木頭
13	大西真央	板野
14	津田実穂	鷲敷
15	阿部美優	八万
16	赤井葉月	阿南一
17	岡田悠里亜	阿波
18	豊成春子	大麻
19	永野友香	城東
20	竹島紘奈	牟岐

平成24年度　徳島県高等学校剣道優秀選手

No.	男子	学校名
1	竹内　直生	城北
2	黒木　景太	城北
3	西田　純也	城北
4	芦山　佳郁	阿南工
5	久保　達也	阿南工
6	湯浅　鼓太郎	阿南工
7	宇井　友隆	鳴門
8	平野　智将	鳴門
9	岩木　佑都	鳴門
10	久保　孝緒	徳島文理
11	久保　公緒	徳島文理
12	安部　晋太朗	富岡西
13	寺井　惇	富岡西
14	福崎　泰樹	富岡西
15	濱田　洸太	富岡西
16	喜多　耕平	川島
17	松原　弘明	川島
18	堀　椋一	川島
19	福井　純	川島
20	新居　航平	城ノ内
21	石村　元義	城ノ内
22	杉山　佳之	徳北
23	角尾　保孝	城東
24	西岡　昌哉	高専
25	小川　翔	徳島科技
26	三木　奏人	脇町

No.	女子	学校名
1	田中　理称	富東
2	湯浅　絵里加	富東
3	山本　悠	富東
4	住友　裕奈	富東
5	中村　亜梨沙	富東
6	藤井　理央	富西
7	猪岡　稜子	川島
8	川人　わかな	城内
9	谷　美聡	城内
10	佐藤　真央	城内
11	佐藤　涼香	城内
12	片岡　茉莉	城北
13	中川　由美子	城北

先生を偲ぶ

高下正義先生を偲んで

名西支部　久保隆司

高下正義先生は私にとって剣道の育ての親であります。

昭和四十七年四月、県立徳島農業高等学校神山分校へ私が入学して以来四十一年間、私の剣道人生の方向性を導いて頂き、「そうか！そうか！」と言葉少なく優しく見守って支えて頂いた剣の父です。

私が高校に入学した昭和四十七年五月に先生は四十八歳で剣道七段位を取得されました。その頃より石井町石井小学校体育館で、高下先生・（故）乾先生・（故）重井先生・（故）美馬先生が中心になり、石井少年剣道教室を開設しておりました。毎週土曜日午後三時から少年指導を一時間して、後一時間先生方と高校生が稽古しました。先生方は第二道場（酒道）の稽古、先生曰く「二道を極めないと一人前の剣士にあらず」第二道場でも一人一升と豪快な飲みっぷりでした。

毎週土曜日は、部活を終えてから高下先生の車に同乗させて頂き、同級生の一宮君と一時間かけて石井小学校まで出稽古でした。車内で「井の中の蛙大海を知らずに成るなよ！時間を作って出稽古を、たいそがらずにせな強くなれないぞ」と言いながら出稽古の大切さ、一期一会、人との出会いと信頼関係の大切さ、人としてどう歩むべきか、今思うと語りきれない教えを、毎週一時間の車内の中で頂きました。

昭和四十九年から神山少年剣道教室を、神山分校の新しく新築された武道館で開設されました。神山分校に通う地元の生徒は、休日は家事、農作業の手伝いやいろんなアルバイトをして、家計を援助し、学費、小遣いを稼ぐのが常識でありました。現代のように部活の合宿、遠征、練習試合など行けるはずもなく、年に数回の近辺の大会に出場するしか他校との稽古も無く、毎週の石井通いは、大変有意義な出稽古でした。

高下先生と私（右）

また、部活の稽古前に風邪をひいて体調が悪いので、休み依頼に職員室に行くと先生は「剣道の稽古したら治る！」の一言で教員机の下から、蝮酒を出し大きな湯飲みになみなみと注いで、一気に飲み干し「さあ稽古じゃ！道場に行け！」と言いながら、蝮の生臭い息を嗅ぐわせながら、体調不良の私たちは容赦なく六〇〇グラム以上もある太い竹刀で、ガンガン打ちのめされたものです。しかし、翌日には、風邪は治っていましたから、不思議なものです。先生の口癖に「時間あれば、稽古せえよ！しっかり稽古して強う成るんじゃ！そうせな人は認めてくれんけんのう～！」っておっしゃっていました。

昭和五十九年十月二十八日の私の結婚に際して、仲人を先生ご夫妻にして頂きました。私が昭和五十六年から神山錬成会を立ち上げ、少年指導を若手でやっていることを喜び、また平成八年に家を新築し、徳島清風館道場を開館した時も大変喜んでいただきました。「酒も一升、一生！剣道も一勝一生！」と、豪快で愉快な優しい先生でありました。

一昨年、徳農城西神山分校剣道部の創立四十五周年を先輩達が発案し、神山温泉四季の里で開催し、創始者の高下先生に記念品を贈りしました。

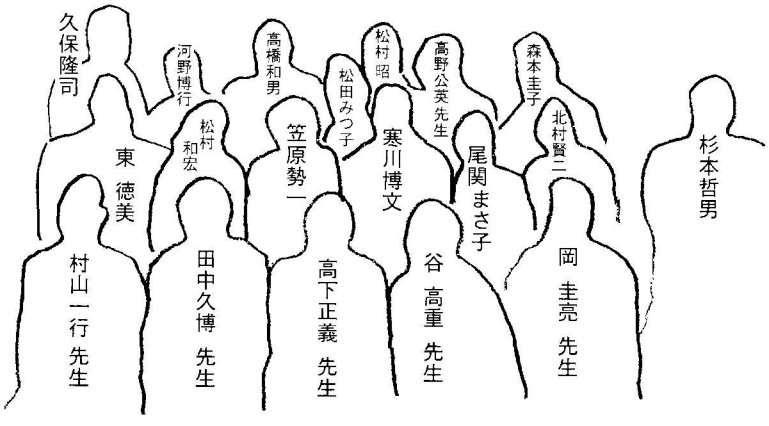
教え子が社会で活躍し、町議会議員、会社社長、自営業者、役所の管理職に、社会の中心的存在に成長し、また現役で剣道を継続する先輩、後輩と私の五名の活躍を喜んで頂きました。しかし、平成二十四年突然帰らぬ人となりました。

非常に悲しく寂しい思いではありますが、生前私達にしていただいたご恩は、数多く大きくございますが、全てそれぞれの思い出や教えは私達教え子に受け継がれ、いつまでも心に残っています。また、後進の弟子達、子供達に伝承されるものと信じております。

高下正義先生のご冥福をお祈り致します。

徳島県社会人大会で優勝（名西支部）筆者（前列中央）

徳農
城西
神山剣道部45周年
高下正義先生と共に


久保隆司
河野博行
高橋和男
松村昭
高野公英先生
森本圭子
松田みつ子
北村賢二
杉本哲男
東徳美
松村和宏
笠原勢一
寒川博文
尾関まさ子
村山一行先生
田中久博先生
高下正義先生
谷高重先生
岡圭亮先生

師と出会えて

松田　みつ子
（旧姓　山岡）

私は、昭和四十一年県立徳島農業高校神山分校に入学し、高下先生と出会いました。その当時ですから、女子が剣道をすることに戸惑いを感じ、なかなか入部の勇気が出ずに校舎の隅から眺めていました。

しかし、先輩達が大きな声を発し、激しく竹刀を振る姿はすごく格好よくて、ドンドン私の心は引きつけられて、入部を決意致しました。そして、二年数ヶ月、高下先生の指導の下、すばらしい先輩、同級生、後輩に支えられて稽古に励みました。その結果、昭和四十三年八月、第十五回全国高等学校剣道選手権大会（広島県三好市開催）に、徳島県代表として神山分校剣道部から初出場することができました。

しかも、私だけではなく、同級生の高橋和夫君（現在、神山町議会議員）とともに、個人戦男女アベック出場を果たしました。私にとって青春時代の最高の思い出であり、後々まで先生はお会いする度、昨日のことのように、思い出を満面の笑顔で語り懐かしんで頂きました。

高校を卒業後就職、結婚、出産、子育てをして十四年の月日が経ち先生に再会した頃、高下先生は徳島県高等学校剣道連盟理事長として徳島県剣道連盟の中心的立場で活躍しており、家庭婦人の剣道がこれから注目されているので、剣道を復活してはと、お誘いを頂き、再び竹刀を手にすることとなりました。

私の心は青春時代に逆戻りして楽しく、名西支部の先生方・懐かしい後輩達と稽古を重ね、昭和五十九年第一回全国家庭婦人剣道大会（東京都開催）の徳島県代表として出場することになりました。

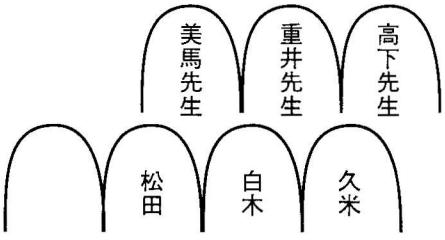
十七年ぶりの全国大会出場で、師弟関係の充実した日々を積み上げ、剣道五段も取得しました。

その後、仕事の関係で稽古できない状態ですが、師とともに楽しく稽古した思いを、趣味の音楽で師・高下先生を心でイメージ

しながら、作詞作曲して「メン一本」をCDにしました。地域や仲間に高下先生の若き日の豪快なメン！をいつまでも心に抱いて語り続けて頂きたいと思います。

この歌で、先生の旅立ち（御出棺）をお見送りできましたことが、私にとって最高の思い出となりました。

先生のご冥福をお祈り致します。



岡内和生先生を偲ぶ

徳島支部　鎌田　恵

私と岡内和生先生との出会いは、昭和四十九年四月彼が徳島県立阿南工業高等学校入学以来のことであり、彼は昭和三十四年徳島県那賀郡那賀町木頭和無田に生れ、お父様はその頃木頭村議会議員を務め、ご両親ともに教育熱心な家庭で育まれた。

そうして、彼の中学時代の剣道競技歴からすれば当然剣道部に入部を予定していたところ、入学式後、保護者同伴で剣道場に見えまして、実は陸上競技部へ入部し短距離をやりたい希望が強くあるとのことでした。その説得に時間を要し、彼の入部は二日程遅れ、そんなことがあって、剣道部での活動が始まった。

剣道部では昭和四十四年四月に剣道部師範として故清原栄先生を小学校校長を退職した年の春にお迎えし、ご指導をお願したところ部員達は「魚が水を得た如く」稽古に励んだ。

彼も入部後、清原先生よりご指導を受け、持ち前の優れた身体能力と強い精神力で厳しい稽古に耐え力を付け、部内予選で先輩たちより先に高校一年生で夏の高校総体で七名のメンバー入りしました。彼は大会では主として先鋒として活躍し、次のような数々の全国大会に出場した。

＊昭和四十九年第二十一回全国高等学校剣道大会（福岡県久留米市）七人のメンバー入

＊昭和五十年第二十二回全国高等学校剣道大会（東京都）個人戦に出場

＊同年第三十回国民体育大会（三重県尾鷲市）四国代表阿南工高単独チーム先鋒で出場

＊昭和五十一年第三十一回国民体育大会（佐賀県武雄市）徳島県選抜チーム先鋒出場

＊同年第二十二回四国高校総体剣道競技（高知大会）阿南工高初の第三位に入賞、彼は殆ど先鋒で出場しチームの勝利の流れを作り貢献した。

以上剣道部活動三年間の歩みをたどって見ると多くの実績を残して、卒業後は国士舘大学へ進学し、学を修め、その後徳島県公立中学校で教職に就き、多くの生徒達の教育に尽くされた。これから教員として充実できる時であったと思う頃、元気であった彼が中学校剣道大会場で会った折、あの元気さを感じられなかった。そのやさきに、「あこう剣志会」会員から聞いた話ではよくない内容であった。

昨年初めに友人の病気見舞いに徳島市民病院へ行った折、病室の前で偶然彼と出会った時の話では、三日ほどの検査入院で心配ないですと、心配かけてすみませんと言って、見受けたところ穏やかそうであった。

そんなことがあって、その年の夏に自宅へ彼を見舞うことがで

きた。

その時の様子として少し疲れているかなと思ったが、二十分ほどの会話は十分できていたので、今この病気に勝って彼の元気さを取り戻してもらいたい思いで、そのときは、お互い笑顔で次回は元気で再会を誓って自宅を後にした。

平成二十四年十一月十五日午前十時三十分に木頭の岡内和生先生が逝去されたとの訃報が「あこう剣志会」会員から入った。

その時、私は自分の耳を疑い、聞き直した。その訃報に一瞬残念で放心状態となり、人生のはかなさを強く感じた。教え子に先に逝かれることの悲しみと寂しい思いに駆られ、彼の五十四年の人生で、阿南工業高校在学三年間を中心に思いつくまま、彼を偲びつつ、安らかなご冥福を祈る。

合掌

久留米市にて（一番左側が岡内和生選手）

昭和51年度全国高等学校剣道大会（会場：福井県武雄市体育館）
下村、清原先生と選手と共に　　昭和51年８月２日
（後列左から２番目が岡内和生選手）

三重県国体尾鷲市
徳島県選手団（中列右から２番目が岡内和生選手）

岡内和生君を偲ぶ
遺し託されたもの

村井正志

私が阿南工業高校二年生に進級と同時に、同校剣道部に県内で優秀な新入生が数名入部してきました。その一人が岡内和生君でした。彼は身体は小柄でしたが、剣の技の切れ、足さばきといい剣道センス抜群の選手でした。私は同校剣道部では一年先輩でしたが、彼から学ぶべき点が多くあり、自身の剣道に多くの刺激を与えてくれました。

彼と出場した一番の思い出の大会は何といっても、国体剣道少年男子四国予選です。彼はどの大会においても元気よく、また動きが俊敏で先鋒にうってつけの選手でした。この大会においても、全ての試合で先鋒の役目を立派に果たし三戦三勝。チームは、香川県代表琴平高校と同率の二勝一敗。勝ち人数差で惜しくも二位。しかしこの時、国体剣道少年男子の部において、徳島県勢にとって、なんと十三年ぶりの出場となりました。勿論彼が、チームに勢いをつけ国体出場への大きな力になったことは言うまでもありません。

その後、私が国士舘大学へ進学し、彼も一年後同じ道を選んでくれました。その時は、後輩が同じ大学に進学してくれたということで非常に嬉しかったのですが、大学卒業後も私同様、教職への道へと進んでくれたことが、私にとってそれ以上に大きな喜びとなりました。

彼が教職に就いてからは、小中学生の剣道の指導は勿論、体育

昭和50年10月30日　三重国体（尾鷲市）千畳敷にて

教師としても、常に子どもたちの指導に全力で当たる飾り気のない熱血教師でした。そして教職生活もあと数年と言う時に、まさかこんなに早く逝ってしまうなんて、無念としかいいようがありません。退職後は、苦楽を共にした時代を振り返りながらまたゆっくりと酒を酌み交わし、教え子のことや懐かしい剣道談義に花を咲かせたのですが、今となっては叶わぬものとなってしまいました。

今後、彼が私たち仲間に遺し託したものは何か、と考えた時、それは彼が子どもたちに純粋に教え導いてきた『人としての生きる道』の教えではないかと考えています。

最後になりましたが、岡内和生君、今後は君の一番大切な家族の幸せを天国から末永く見守り続けてください。私も後から必ず逝くから、その時にまたゆっくり話をしましょう。

合掌

全国講習会報告

第十回剣道講師要員（指導法）研修会に参加して

近藤　亘

平成二十四年十月十三日（土）から十四日（日）の二日間、東京スポーツ文化館において、全日本剣道連盟主催による「第十回剣道講師要員（指導法）研修会が開催されました。

この度、本研修会の講師要員に委嘱され参加して参りました。

★研修会の目的

剣道を正しく国内外各層へ普及および浸透を図るために指導法の講師要員を養成する。

★役員

全日本剣道連盟　会長　武安義光
〃　副会長　松永政美
〃　専務理事　福本修二
〃　指導委員会委員長　網代忠宏

★講師

講話講師　松永政美
講　師　遠藤勝雄、西出　功、網代忠宏、梯　正治、作道正夫、大矢　稔、姫野純二

講師要員として私を含め全国から二十八名が研修を受けました。

十月十三日（土）

★開講式

網代委員長から本研修会の目的、及び講師にあたる場合の留意点として「本研修で受けた指導の基本的内容を基に、皆さんのこれまで培ってきた修錬の内容を指導いただきたい。」というお話があった。

★講話　松永副会長

剣道の話は経験則だから難しい。私が皆さんに勝っているのは年齢だけ。今から皆さんが知らないことを話します。と前置きされた上で、戦後剣道の歩みの中で、全日本剣道連盟初代会長木村篤太郎先生の「武の三徳（知・仁・勇）」をはじめとする剣道に対する考え方。また、第二代会長石田和外先生の「剣道の理念」のお話等、先生ならではのお話が次から次へと出てきた後、剣道とは如何なるものか「社会に出てびくともしない心を養うことにある。」と、締めくくられた。

★剣道の技術実習一　西出範士、網代範士

姿勢、礼法（立礼・座礼）、基本動作（竹刀の構え方・足さばき・素振り）と細部に渡り実技指導をいただく。

★木刀による剣道基本技稽古法　遠藤範士、作道範士

基本一から基本九まで納得のいく解説と実技指導をいただく。

★剣道の技術実習二　網代範士、遠藤範士

剣道具を装着し切り返し、体当たり等初心者が実施できるように段階を追って解りやすく実技指導をいただく。

★剣道の技術実習三　作道範士

いろいろな稽古法を先人が作ってきた。

指導法は、対象が見えて初めて稽古法がある。対象に応じた稽古法（稽古法の中にあるねらいを見つけ）を有功に使って指導していく必要がある。として、先生自身の指導経験を元に高度なお話をいただく。

続いて受講生全員が面を着け、「掛かり稽古―打ち込み稽古―切り返し」をワンセット指導の効用として実践し、汗を流した。

十月十四日（日）

★日本剣道形の指導　梯範士、西出範士

剣道形指導上の留意点を指導の後、五行の構えから始まり、太刀の形、小太刀の形を実技を交えながら丁寧にご指導いただく。

★木刀による剣道基本技稽古法を活用した指導

指導法講習を想定して、あらかじめ指定された講師要員二名二組が、他の受講生に基本技稽古法の中の三本を活用し、剣道具を着装し指導を行うもので、一組、四十五分間の演習を行った。

以上が二日間の研修のあらましですが、この研修を通じてあらためて自分自身の勉強不足を思い知らされました。

「剣道の理念」に基づいた剣道を、正しく継承していくために、自分自身が一層の修錬を積み重ねていかなければならないと痛切に感じた次第です。

第三十九回居合道中央講習会に参加して

居合道部長　岸田光博

日時　平成二十四年九月八日・九日
場所　京都武道センター
講師　全日本剣道連盟　居合道講師七名
受講生　全国各都道府県より一〇二名

居合道中央講習会は、全日本剣道連盟居合（昭和四十四年五月制定）における作法・術技・居合道試合・審判規則及び細則を統一する事を目的とし、さらに、全国各指導者の技術の向上、適正な審判を講習するために毎年行われます。今回は徳島県より原田勝（範士）先生と私が参加しました。

第一日目は、安武会長より「居合道のより一層の発展願います。」との挨拶と、新旧居合道委員長の岸本範士と武田範士より挨拶がありました。講師の紹介（武田・山崎・河口・安永・山崎誉・小倉・村主範士）後、武田委員長の連盟居合解説（全剣連居合道講習会「指導要点」配布済み）により山崎誉範士が実技を示範し、作法、術技一本目より十二本目までを行いました。特に各技の指導要点を重点的に解説指導を受けました。実技練習の為の班分けが有り、八段の参加者はサブ道場へ、私達七段以下は四班に分かれて講習を受けました。私の二班は安永範士が細部丁寧に説明して実技指導して頂き、大変良い講習でありました。

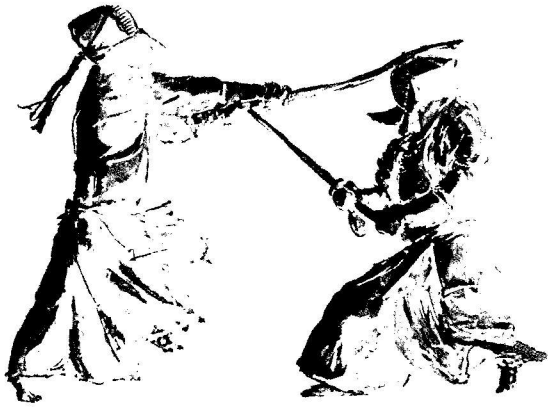
第二日目は、審判講習で八段（全国大会の審判予定）先生が、私達七段の受講生を判定する実技講習で山崎正博範士の指導説明で、河口・安永範士が補助指導する方式で講習が始まりました。掲示板に七段講習生の対戦相手が表示され、指定技は、作法と四本目（時間の都合上）です。審判の判定後、「勝負有り」後判定の理由を審判（三名）に、山崎先生がマイクを渡し、それぞれ発表する方式です。指導が有り、審判も主審と副審を毎回交代する為、会場内は、非常に緊迫した講習で、大変勉強になりました。

昼食事前、講師、受講生全員の記念撮影がありました。

午後は各流派に別れ、古流研究でした。私は、無双直伝英信流で、本館道場で仕切られた場所において、武田範士の指導のもと山崎範士の号令で、八段の先生と七段以下の者が向かい合う方式の交互抜きで行われました。「同じ流派ではあるが、先輩指導者から受け継ぐ間に変化して、理合に個性が出てきて居るが、それもみな正しい。諸先輩先生の、理合等を正確に引き継ぐ様にして下さい。」と武田範士より指導をいただきました。最後に全員集合して、閉校式後解散と成りました。

私は徳島県剣道連盟居合道の代表の一人として全国講習会に参加させて頂き、感謝と伝達する義務に緊張と責任を感じました。毎年参加した先輩方の伝達が正確に伝わっている事も感じ、大変ありがたく感謝します。全国都道府県の先生の交流もでき大変意義があったことを、報告申し上げます。

平成24年度（第39回）居合道中央講習会　主催（財）全日本剣道連盟
平成24年９月８日　於：京都市武道センター



第五十回中堅剣士講習会に参加して

警察支部　岩木一功

大和路の山々の緑が生い茂り一年で最も良い気候の皐月、ここ柳生の里、鴻ノ池道場（中央武道館）において、五月十六日から二十日までの五日間、全国各地から総勢六十一名が集い中堅剣士の講習会が行われました。

今年は五十回目となる節目で、先輩方がこれまでの半世紀に亘りこの講習会が伝統的に継承されてきた意義を肌身で感じることが出来ました。

私は、この講習会に参加させて頂くにあたり、『きつく厳しい強化合宿』とお聞きしており、五十歳を目前にしてこれまでの自己の剣道観を今後どのように展開していくかを自問するために、「ヨシ、この五日間、剣道にどっぷり浸かってやろう」という志をもって参加させていただきました。

さっそく、開講式では、福本修二専務理事より、「全国から集った剣士が道場で寝食を共にしながら自らの剣道の修練とその指導法を修得する厳しい場であります。また、あわせて八段昇段を目指すための中堅剣士の強化合宿です。安易な気持で参加している人は帰ってもらって結構です。」との脅しとも取れる（笑）激励を頂きました。改めて受講生の気持ちが引き締まったのを記憶しています。

講習会に先立ち、松永政美副会長から、剣道理念に基づき高い水準の剣道人の育成（日本人としての心を教える）に心がけ、剣道の普及と我が国社会の健全な発展に貢献してほしい。最後に「智・仁・勇」の三徳をもって剣道を標榜され、講話とされました。

講師の先生方は、

剣道範士　太田　忠徳　先生
　　島野　泰山　先生
　　濱崎　満　先生
　　高橋　俊昭　先生
　　石塚　美文　先生
　　亀井　徹　先生
剣道教士　神崎　浩　先生
地元講師　上垣　功　先生
　　松田　勇人　先生
スポーツ医学講師
剣道六段　佐本　憲宏　先生

です。

講習内容は恒例のように行われましたが簡単に説明しますと次のとおりです。

●指導法

『高橋俊昭先生』

初日の午後さっそく、竹刀の正しい操作と刃筋、打突に必要

な手の内を意識して、一本一本丁寧に股割素振りを含めた千本素振りから始まり、本受講生としての洗礼を受けました。（笑）

この素振りは、毎日午前・午後と行われ、素振りの重要性（準備運動でない）を叩き込まれました。

『濱崎満先生・亀井徹先生』

打ち込み稽古、掛り稽古、相掛り稽古、区分稽古等、足さばき（体さばき）と連動する打突と縁を切らない稽古を指導して頂きました。

『島野泰山先生』

面打ちと小手打ちに対しての応じ技を中心に指導していただきました。間合いと一足一刀一拍子から展開する技を指導して頂きました。

『石塚美文先生・神崎浩先生』

攻め、崩し（触れる・押さえる・払う・巻く）等の仕掛け技について、常に左拳を中心から外さない。また、剣先を柔らかくし一本を打ち切る打突を徹底的に指導してくださいました。

●審判法

『島野泰山先生・高橋俊昭先生』

有効打突の見極めと審判員の位置取りについて実際に試合を通して細かく指導して頂き、常に競技者（選手）と審判員が一体となった試合展開をするようにとお話がありました。

●日本剣道形

『太田忠徳先生・石塚美文先生』

所作や構え方についての説明と合わせ、太刀一本目から模範を示しながら詳細にわたり熱のこもった指導を受けました。

●木刀による剣道基本技稽古法

『上垣功先生・松田勇人先生』

受講生の中には、あまり熟練していない方もいましたので、解説を交えながら、刃筋正しく打突することで日本剣道形につながる指導を受けました。

●スポーツ医学

『佐本憲宏先生』

「剣道と足の障害」についての講義がありました。先生は今年の名古屋審査会で六段に昇段され、剣道競技者として特に「アキレス腱の障害の予防法」について詳しく説明して頂きました。

以上、稽古に明け暮れた五日間でありましたが、峻烈な稽古を成し遂げた充実感と爽快感に満たされたと同時に、ご指導を頂いた講師先生方の鍛え抜かれた技術と精神力に自分の未熟さを痛感しながら帰県しました。

この貴重な経験から今後の生涯剣道の方向性（自己をどのように高めるか）を見いだせたような気がしています。また、徳島の剣道に微力ではありますが貢献できればと思っております。

末筆となりましたが、このような貴重な場を与えていただいた剣道連盟の先生方にお礼申し上げます。ありがとうございました。

平成二十四年度 全剣連後援剣道秋季講習会報告

事務局長　藤本雅史

日　時　平成二十四年十月二十一日（日）十時～十六時十五分
会　場　鳴門ソイジョイ武道館
参加者　七十名（八段三名、七段十六名、六段十四名、五段八名、四段八名　三段以下三十九名）
講　師　範士八段　加藤浩二　全日本剣道連盟普及委員
　　皇宮警察本部剣道名誉師範
　　第十四回世界選手権大会全日本チーム監督

一．開講式

（一）坂下会長あいさつ

「平成二十四年度剣道秋季講習会を開催しましたところ、休日にも拘わりませず、多数の皆さんが参加していただき、ありがとうございます。本日は加藤先生より指導法を講習していただきます。受講生の皆さんは真剣に受講していただき、何か一つでも掴んで帰っていただきたい。

加藤先生には遠路お忙しいところ、お越しいただき、今日一日温かいご指導をよろしくお願いします。」とのあいさつがありました。

（二）近藤理事長より講師紹介

（三）加藤講師よりあいさつ

「ただいまご紹介いただきました加藤です。ここにいられる米倉、近藤さんとは皇宮警察で組み討ちありの厳しい稽古をした懐かしいご縁があり、交剣知愛の温かさを感じています。今日は七十歳代三名、六十歳代二十名、二十・三十歳代十二名、女性が五名が受講されていますが、この老若男女が一緒になってできるスポーツは他にない。ここが剣道の良いところです。今日はこの剣道のとらえ方、伝承してきた剣道を今後にどう伝えていくか、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。今日一日よろしくお願いします」とのあいさつがありました。

二．講義

歴代の高名な先生の稽古やお話、現代の剣道の弊害、世界選手権大会の現状、監督として強化に取り組んだ体験談を交えて、剣道の本質、人間としての超越した精神力、心、肚等、これから剣道をどのように伝承していくのか、理と事の結びついた見識の深さに基づき詳しいお話があった。資料は後で目を通しておいて下さいと立て板に水を流す如く、理路整然と玉手箱からいろいろなお話が出てきた。

資料には無いその一端を紹介します。

・剣道をどういう風に考えていくのか、何を指導したら良いのか、生涯剣道にどう結びつけていくのか、剣の理法を自分の人生においてどのように修行していくのか。

自分でできる事は自分でする。できなくなれば人に迷惑をか

ける。「お〜い、お茶」「お〜い飯」ではだめ、熟年離婚になります。歳入ってただ死を待つのでは寂しい。そのためには体力を付ける。修行と思って階段を利用する。「剣道即生活」

小川忠太郎先生はあの日本武道館への九段坂を生涯防具を担いで歩いた。「自分の防具が担げなくなったら稽古は終わりです。」と言われている。

・竹刀という剣

刀あるいは木刀は死ぬか生きるか、竹刀を円筒形だけのものとして、叩く当てるのでは競技性になる。剣先、刃筋、鎬をどう使い、生かしていくか。剣先が自分に向けられている、中心に向けられている、それを防御したら駄目である。攻め込み、しのぐ、そこが良いところである。そこから勇気、決断が生まれるのである。

剣先の練り合いが大切である。怖いから先に飛び込み、鍔競りで休む今の剣道は弊害である。そこをどう指導していくか。

日本剣道形の九歩から打ち間までが重要です。有効打突の一本の中に込められた味（気品、気位）、侍、武士の風格が今の京都大会の演舞には無い。

・国際剣道連盟

二〇一一年現在の剣道人口は、ＦＩＫ加盟国五十二ヵ国、非加盟国一〇八ヵ国以上、二三〇万人その内日本一六六万人。老若男女ができる対人技能の中に何があるのか、競技文化と伝統文化（作法、礼法）ヨーロッパは伝統文化を求めている、韓国剣道はテコンドーと一緒で格闘技、競技文化である。世界選手権大会は審判の問題もあるが、残心がない、礼節がない。規則第十二条に有効打突は残心あるものと規定されている。韓国は次から次と打ってくるか即、防御に入る。一本に取れない。

文化はその国に入ればルールが変わってくる。柔道がその一例である。剣道は変わらないようにしなければならない。

・世界選手権大会について

台湾で行われた大会で日本は負けた。監督としてブラジル大会で勝利するためには、基本を徹底してやった。千本素振りから打ちこみ、区分稽古。

救急車で運ばれた者も出た。柳生の極意である受けない攻撃のみ、退がらない、恐れない、前に出るのみの稽古。高鍋選手は受けに廻ったら駄目、攻撃になれば良い。

内村選手は誰でもできる事を誰でもできないほど真剣にやった。平常心、不動心なんて色々な言葉があるが、追い込まれたらそんな生易しいものではない。それに打ち勝ったら眞、本物ができる。人事を尽くして天命を待った。

基本に忠実に、事理一致（理は三年、事は十年）、阿波踊りを見せていただいたが、女踊りの手が崩れない、腰から中心が崩れない、男踊りの静と動、静かな動きの呼吸、基本が大切です。

持田盛治先生は未だ足りない、未だ足りないと云って基本の習得に五十年かかった。

三. 講習一（実技一）

道場を一周歩行、早く、スキップしたりして身体をほぐし、二人組、五人グループ、十人グループ等を作って、趣向をこらし興味を持って基礎体力を図る指導法を学んだ。

受講生も楽しくリラックスしながら剣道よりもキツイと汗を流していた。

講習二（実技二）

防具を着けて3人組になり、送り足で面、踏み込み足で面、触刃の間合いからヅ～面

ヅ～払い面（二拍子にならない）、ヅ～（どうする）で入り元立ちがけ剣先を下げた瞬間を払い落し面（一拍子でパン、パン～）、元立ちがヅ～面のところを出端面、抜き面

講師先生の長年に亘り修錬されてきた柔らかい冴えのある打突を示範されながら、如何に柔らかく打突の瞬間の手の内、足の送りと一致させるか、マンネリ、習慣化した指導から工夫して如何に真剣にやらすか、ポイントを押さえての指導であった。

休憩を挟んで、世界選手権の強化の一端を習得した。

六人組になり面の応じ技、小手の応じ技、面体当たり、打ちこみ稽古の後、区分稽古（地稽古一分三十秒、打ちこみ十秒、体当たり十秒、切り返しを交互）を二回行った。

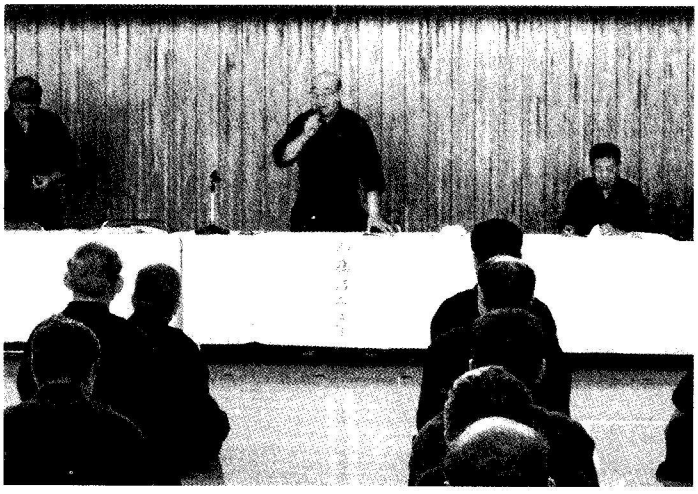
講習三（指導稽古）

今までの理の指導をまさに事で指導いただいた。前さばきでの厳しさ、剣先の厳しさ、そして柔らかく手の内の効いた打突の鋭さ等厳しい永年の修練の稽古でもって秋の審査を受審する受講生を中心に三十分間ご指導いただいた。

四. 閉講式

受講生を代表して芝原功一（阿南支部）先生が真心のこもった丁寧な謝辞を述べて、十四年度の秋季講習会を終了しました。

受講生の多数の方々がポイントポイントに的確に示範されながらの指導に、近年にない良い講習会であったとの声をお伝えして報告とします。



平成24年度 剣道（指導法）講習会日程表

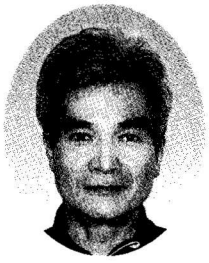
平成24年10月21日（日）　　於 鳴門ソイジョイ武道館

講師　範士 八段　加藤 浩二 先生

内 容	時 間	備 考
開　講　式	9:30 ～ 9:40	
剣道指導法講義	9:40 ～ 10:10	
剣道指導法実技	10:20 ～ 12:00	
昼　食	12:00 ～ 12:45	
剣道指導法実技	12:45 ～ 15:00	
指導法質疑応答	15:00 ～ 15:20	
合 同 稽 古	15:30 ～ 16:00	
閉　講　式	16:00 ～ 16:10	

第三十六回全国高等学校・中学校剣道（部活動）指導者研修会

高体連　加藤哲裕



平成二十五年一月四日から六日まで、千葉県勝浦市で行われた研修会に参加した。

開講式の後、教養講座として伊藤元明氏（全日本医師剣道連盟会長、東京理医学研究所所長）による「剣道医学からみる生の表現と刺激」と題した講義があった。講義の主な内容は、

①教育剣道に携わる指導者は剣道の理念を体して、人間形成を目的とする責務を課せられた知的専門職であると考える。

②剣道は、正中線上の攻防を通しての尋常の勝負であり、心・精神・霊性を求めていくなかで自らを生涯にわたり高め続けていく武道であると思考する。

③加齢による身体の特徴と傷病―その対策として、「体調がよい」ということは「合目的行動に際し、違和感なく身体が円滑に動くこと」である。剣道障害の発生を予防するために、自分しかわからない微妙な体調の違和感を観察しましょう。

④剣道の運動強度―有酸素運動の強度は最大酸素摂取量あるいは最大心拍数を、筋力・筋持久力トレーニングでは、最大挙上重量を基準とする。その人がどの程度を「きつい」と感じるかを尺度とする自覚的運動強度という方法もある。

⑤突然死（病気の発症から二十四時間以内の死）―運動選手を含め常時スポーツをする者の運動中の突然死は三十歳以下では先天性冠動脈奇形（三五％）、肥大型心筋症（二二％）、三十歳以上では冠動脈硬化症（九七％）と、中高年層では虚血性冠動脈疾患が圧倒的に多い。

⑥熱中症―屋内競技では、剣道がもっとも発生率高い。屋内の温度・湿度・換気に十分な配慮が必要。予防として、運動強度の設定、こまめに休憩、水分（濃度〇・二％の食塩水やスポーツドリンク）の補給、稽古の時間帯、違和感の訴えに傾聴することが肝要。

⑦かけがえのないものを見つめ直す―剣道を学習する師弟は、きらめく個性に裏付けられたエネルギーを持っている。それは一人ひとりが持つアイデンティティという宝物である。かけがえのないアイデンティティを醸成していただきたい。

その後は、木刀による剣道基本技稽古法、実技指導法、実技研修、夜の中・高に分かれての研修会で一日目は終了。

二日目。午前中は、朝稽古に始まり、日本剣道形の実技ではいつも日頃の稽古不足を痛感する。午後は審判法、木刀による基本技稽古法、実技研修、夜の研修会で終了。

三日目。朝稽古、教養講座「私と剣道」村上済先生。主な内容は、

①昭和の剣豪・戦後の剣道
②剣道との出会い－村上先生は中学校では九人制バレーボールをされていた。中三より剣道の道場へ。大学・教職員時代のお話も少しされた。
③八段への挑戦
④全剣連常任理事を経験して
⑤海外での指導等
のお話をされた。最後に「継続は力なり」で締めくくられた。

そして最後の実技研修、閉講式で終了した。

この研修会に二年連続参加して思うことを少々。まず、たくさんの先生に稽古をつけていただいたり、旧友との語らいがあったりと、苦しくも楽しい充実した三日間だった。終了後、筋肉痛が三日は続き、日頃の稽古不足を感じるとともに、本研修は内容が濃いと思った。また、約三十年前に参加したときとは状況が大きく変わったと感じた。受講生の中に、八段の先生が五名（中学校一名・高校四名）いた。また、講師陣も大学の先生に頼らずに開催できる状況にあり、それだけ剣道の指導に携わる教員の質が向上し、量も増えた。それは、この研修会の成果でもあると思う。

次に、平成二十四年度全国高体連剣道専門部の都道府県別高校生人口調査において、徳島県は二五五名で、鳥取県の二〇〇名に次いで下から二番目であることを知った。徳島県の剣道人口は減少傾向にある。特に、少子化により、剣道をする子供たち、小・中・高校生の数が減っている。県剣道連盟の総力をあげて、これ以上の減少をくい止める努力をしなければならない。

最後に、この研修会に参加させてくださった県高体連剣道専門部に感謝するとともに、来年もできれば参加させてくださるようお願いして終わりとします。

社会体育指導員上級と日本体育協会公認スポーツ指導員

米倉　滋

剣道を志す者は、自ら研修を重ね剣技を磨くと共に、指導を併せ実践することが必要であり、そのための技術知識を身に付けることが大切なことです。初心者や青少年への適切な指導が行われなければ、剣道離れや後輩が育たず、剣道の衰退へとつながることになりかねません。そして、これは一握りの高段者の仕事でなく、それぞれの地域で指導にあたる先生方の指導力の向上が極めて大事なこととなります。

このようなことから、全剣連は地域で剣道の指導にあたる「中堅クラスの指導者」の指導力の向上のため、文部省がスタートさせた「社会体育指導員制度」に同省の認可を得て剣道専門コースを設け、平成七年度より社会体育指導員剣道要請講習会を開始しました。

全剣連社会体育指導員制度は全剣連独自の資格となるもので、初級・中級・上級の各級に分かれ、それぞれ段階的に受講しなければなりません。私自身、平成十四年度に初級、平成十八年に中級を取得しました。このたび、平成二十四年三月九日（金）から同月十一日（日）までの三日間、滋賀県大津市の県立武道館で行われた「第十六回社会体育指導員剣道上級養成講習会」に臨みました。

上級は初・中級とは違い最高位となることからより高い指導力が求められます。具体的には指導法、審判法、日本剣道形の実技において、自ら示範を行い、それを理論により指導できる指導者を養成することが上級の目的であることから、受講生全員が合格するわけではなく、今回は受講生三十八名中　私を含む三十二名が合格しました。

平成二十四年四月一日現在、徳島県下で全剣連社会体育指導員の資格を有する者の内訳は、上級三名・中級六名・初級六名の計十五名で、他府県と比較すると非常に少なくなっています。

平成二十四年度から始まった中学校における武道必修化に伴う派遣講師の要件として、東京都などは全剣連社会体育指導員の資格をあげています。又、平成二十五年九月に開催される東京国体から監督の条件に全剣連社会体育指導員及び日本体育協会公認スポーツ指導員の両資格が必要となります。

近年、武道やスポーツを取り巻く環境が変化しつつあります。こうした中にあって、剣道は段位、称号のみならず、指導者としての指導力の向上や体育協会に所属する他の競技団体との関係協調が重要となります。徳島県剣道連盟のみなさまは、これらのことを踏まえ一人でも多く全剣連社会体育指導者の資格を取得してほしいと思います。

徳島の剣道史

鴻山の宍戸神社

剣道史担当理事　坂本裕二

はじめに

貫心流剣術は、藩政時代阿波で最も盛んに行われた剣術である。剣儀の遠祖を源九郎義経とし、流祖は、宍戸家俊司箭で芸州広島で栄えた。阿波には、元禄年間に芸州から阿波にきた溝口仁五右衛門（鉄柱無端）によって広められ、道統は県内各地に広がり、幕末期には最大流派となった。明治・大正・昭和初期にかけても当流は古武道として本県の主流をなした。ここでは、徳島における貫心流剣術の道統を紐解く上で貴重な碑文を中心に述べる。

向麻山（鴻山）山上の宍戸神社と石造物

吉野川市鴨島町牛島の鴻山（こうのやま、現在は向麻山と書く）頂上の龍眼神社（御嶽教系神社）から、尾根沿いに西方へ約百メートル下ると、そこには二〇平方メートル位の広場がある。この広場には、かつて「天狗の腰掛け松」と呼ばれた老松があったが、近年松喰い虫に浸されて枯死し今は跡形もない。その場所の近くに現在は廃社同然の荒れ果てた小さな社殿がある。これが宍戸神社である。

社殿は間口一間、奥行き一間半、拝殿の床は土間で一間四方、神殿は半間四方、共に木造で、現在基礎部分はブロックとなり、屋根は神殿拝殿共にトタン葺に替えられている。神殿の内部は、御神体が祀られているとは思えないほど荒れ果てており、神殿前には、垂れ幕（神幕）があり、幕には、「亀甲に剣カタバミ」の定紋と、「昭和五十六年一月吉日　徳島市浜田薫一　四宮生重郎」と年紀名・寄進者名が染め抜かれている。

社殿前には、石造（撫養石）の基礎石欠損の狛犬一対がある。狛犬の横には石灯籠一基があるが、一基は、火袋が欠失しており、他の一基は笠のみで支柱や土台石はない。火袋のない一基には次のような文字が刻まれている。

正面の支柱に、「世話人佐藤清右衛門」、土台石には「佐藤定蔵　佐藤虎五郎　佐藤良太郎　佐藤源太郎　佐藤清蔵　佐藤廣之助　佐藤藤右衛門　後藤宇蔵　鈴木寿之助　岡田斧弥　藤井甚九郎」と十一人の人名。裏面には、「佐藤孫三郎　岡田為蔵　佐藤熊太　藤井利三郎　堀北龍蔵　藤野堅太　工藤卯三郎　今倉佐次右衛門　温田堆助　岡田治左衛門　佐藤民助」と十一人の人名が刻まれている。左側面には、「獻呈河野氏門人　文化八辛未歳三月四日」

と有り　台石には「竹内與蔵　藤井猪三郎　野口猪之助　吉田恵市助　藤井三千蔵　藤井初蔵　藤井藤左衛門　藤井與三郎　佐藤房蔵　板東嘉兵衛　河野文治　藤井佐五郎　日野利之助」と十二人の人名。右側面には、「小笠圓左衛門　小笠與三郎　堀北嘉蔵　藤井猪平　川端泰助　松尾善左衛門　武岡政治郎　武岡喜代治　松尾半兵衛　堀北官兵衛　松尾廣太　渡辺弥太郎　野口佐蔵」と、十二人の人名が刻まれ、これらの人は、河野・佐藤両家の門人帳に名を連ねる人物である。

灯籠の横には高さ一メートル程の石塔があるが、元は小さな灯籠の支柱であったと思われる。この石塔には「河野次良右衛門々人山根大蔵取立」と刻まれており、この石柱からは宍戸神社建立の際の取立（差配役）を河野次郎右衛門の門人山根大蔵が務めたことが分かる。

消えた河野次郎右衛門の碑文

当所には、宍戸神社を建立した河野次郎右衛門の事績を伝える鐵煥（鐵復堂）撰文の碑文があったことが大正八年刊行の『麻植郡郷土誌』（久保忠男著）から窺えるが、現在この碑文は神社境内、周辺のどこにも見あたらない。幸いなことに同郷土誌には「宍戸次郎右衛門之碑文」と題して全文が紹介されており、その全容を知ることができる。しかし、碑文の内容からすると標題の宍戸次郎右衛門は河野次郎右衛門とするのが妥当で、河野次郎右衛門が敢えて貫心流流祖の宍戸司箭の姓「宍戸」を名乗ったとも考えられず、表題の誤記は郷土誌の編纂時に生じたものと考えるのが自然である。

ともあれ碑文の内容は、貫心流流祖宍戸家に学んだ阿波の剣術家河野次郎右衛門が、剣術の流祖である宍戸司箭の霊を祀るため一門と相集いて宍戸神社を建てたこと、神社近くに道場を建て多くの門人を指導したこと、河野次郎右衛門が文政五年十月十三日に死亡した時、次郎右衛門の遺言どおりに遺骸を演武場の傍らに埋葬し墓を建てたことなどの事績が記されている。

要するに宍戸神社は、河野次郎右衛門の高弟山根大蔵が取立役となり、同じく高弟の佐藤清右衛門が世話人を務め、河野次郎右衛門・山根大蔵・佐藤清右衛門の三者につながる門人たちの浄財寄進によって、社殿、狛犬、灯籠、演武場が文化八年五月に完成したと推察され、現在の社殿は終戦後に建て替えられたもので粗末な建物となっているが、文化八年時の社殿は規模も大きく立派であったことは想像に難くない。神社近くにあったと思われる河野次郎右衛門の墓と碑文は、縁者によって他に移されたものか。碑文と墓の確認は阿波における武道史（貫心流の道統）を究明する上では不可欠な課題である。

宍戸（河野）次郎右衛門之碑文（原文）

（注）麻植郡郷土誌記載のまま記す

宍戸氏刀云謂貫心流與干藝而盛子我○阿其汎濫城中者勿論而己其派入村野滚々○取不滚為麻植塚河野氏二世相傳至次郎右衛門先生人豪壯尚氣気自幼至老帷武是○講凡百世□粉華斷然不經予心性又

嗜酒痛○飲□醉尚能演法無異平日擊刺開合不小亂○其煉熱可想也文政五年壬午十月十三日疾○歿于客年七十二 先生諱道時稱次郎右衛門考諱延房號寨翁村上先生銘其墓碣妣山井氏先生之壯也或請簡聘先生不肯使弟貞則代理家道而專心此技逐子無性貞則奉之如嚴父既而葬之其居東南鴻山先是先生嘗與○諸弟子謀起山祠於鴻山祀司箭宍戸氏靈兼築演武場其側常謂人曰吾亦瘁骨於此耳至○是從其言云嗚呼奇哉盖所謂烈丈夫者非耶

徳島　鐵煥謹識

宍戸（河野）次郎右衛門之碑文（現代語訳）

宍戸氏の剣術は貫心流という。この流派は安芸の国で盛んに行われ、我が阿波国でも城下の徳島は勿論、郷分に於いても盛んに行われ絶えることがなかった。麻植郡の麻植塚村（現鴨島町）の河野家も二代に渡り同流派を相伝え、次郎右衛門に至った。次郎右衛門の人となりは、豪壮の気風を尊び、幼少期から老年に至るまで、道場で剣術の修練を通じ弟子の指導に当たり、凡そ百年の間、道場は隆盛で、少しも衰えることはなかった。また、先生は、酒を好み、痛飲してもなお能く剣術を教えたが、平常心は変わらず、竹刀さばきは少しも乱れることなく、その練熟ぶりが窺われた。

文政五年壬午の十月十三日、病のため亡くなった。数え年は七十二歳であった。先生の諱は道時といい、俗名を次郎右衛門と称した。亡父の名は延房、寨翁と号し、その墓にもそのように記されている。亡母の生家は山井氏である。先生の壮年時代には、剣術の古い書物を読み、礼を尽くして師を招き、また、土産を携え先生や先輩を訪ねて教えを請うて研究に励んだ。その間は、不肖の弟、貞則が代理として専心、道場の弟子たちを教えた。先生には子は無かったが、弟の貞則は親を慕うが如く先生に仕えた。先生が亡くなって、家の東南の鴻山に葬った。そこは、かつて先生が弟子たちと相談して流祖宍戸司箭先生の霊を祀り、兼ねて剣術の道場を建てて稽古をしたところである。その側で常々先生は、人々に「私の骨は此処に埋めてもらいたい」と言っていたので、遺言どおりそこに墓を建てた。が、これも奇しき縁である。嗚呼、先生こそは烈丈夫というべきか。

徳島　鐵煥謹識

碑文撰文の鐵煥（安永六年～天保十四年＝一七七七～一八四三）

鐵復堂と称する。姓は鐵、名は煥または顕考、字は予文、号は渭州、高亭、復堂と称す。父の代に佐那河内村から城下徳島に移る。八木巽所、那波綱川に学び後江戸に出て古賀精里の門に入る。学成って加賀藩の儒者に招かれたが、父の病のため辞退して帰り、下助任村（現吉野町）に住み私塾を開く。弟子に岩本贅庵、新居水竹、若山勿堂ら多くの人材を出す。文政十二年、名字帯刀を許される。

晩年姫路藩より招かれ藩校で約一年教授したが仕官せず帰郷、藩主斉昌は司読に登用しようとしたが柴野碧海の下風に立つのを好まず、頑固辞退して町儒のまま貧困の中に没した。余儀として水墨の山水画を能くした。阿波の文教は藩儒柴野碧海、町儒の鉄復堂によって振興したと言われる。享年六十七歳、墓は徳島市寺

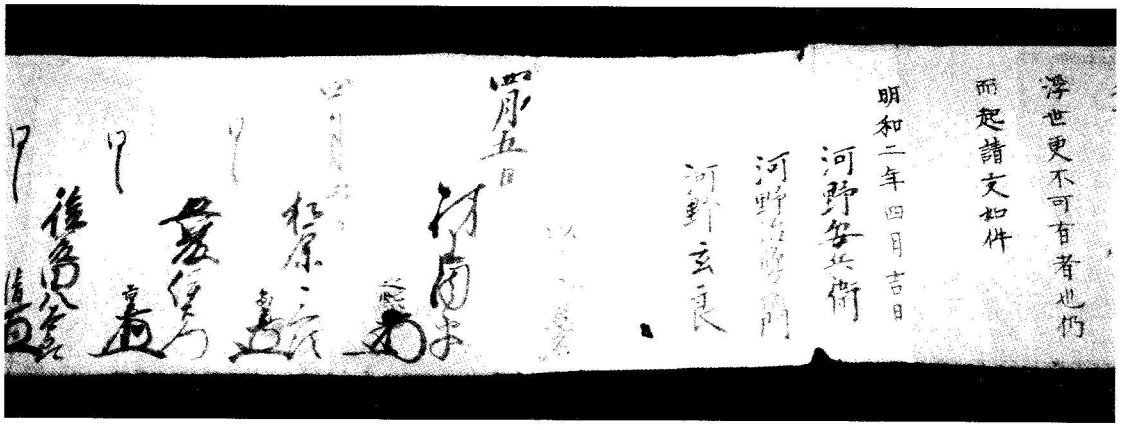
町の敬台寺にある。

おわりに

『麻植郡郷土誌』は碑文の全文の他に次の一行を語る。「世俗鴻山に柴天狗住めりと傳ふ前記宍戸氏門弟山根、佐藤其他の人々山上に於て武道修練せしより此説出でしならん」と。宍戸神社は、寄進されている神幕（昭和五十六年紀・浜田薫一・四宮生重郎の銘有り）から昭和後半までは、縁者や武道家などにより参拝されていたことが窺えるが、今は、人々の耳目から忘れ去られ、訪れる人は誰もいない。稽古袴に身を固めた門人たちが参拝の傍ら先生を偲び、立ち稽古をしたであろう広場は、竹笹や樹木が生い茂り今や荒涼として、まさに「兵どもが夢の跡」である。

本稿は、筆者が平成二十年一月六日に脱稿寸前に延髄梗塞で倒れたため、徳島の剣道史への寄稿を断念、その後発病二年目の回復の兆しの中で少しずつ仕上げたものである。その間、無理を押して一度だけ愚息に手を引かれ鴻山に登ったが、宍戸神社の更なる荒廃ぶりには驚きを禁じえなかった。

本稿を読み返してみると内容に調査不足は否めず心中忸怩たるものがある。元気になり碑文などに刻まれている事象を一つ一つ紐解きたかったが、もうそれも果たせまい。九十四歳となり、思考能力は衰え、手足が不自由の極みとなった今、愚息に推敲の労を執らせて本稿を完成させた。そのことを最後に申し述べて筆を置く。



河野家起請文

宍戸神社関係資料及び写真

宍戸神社前の灯籠

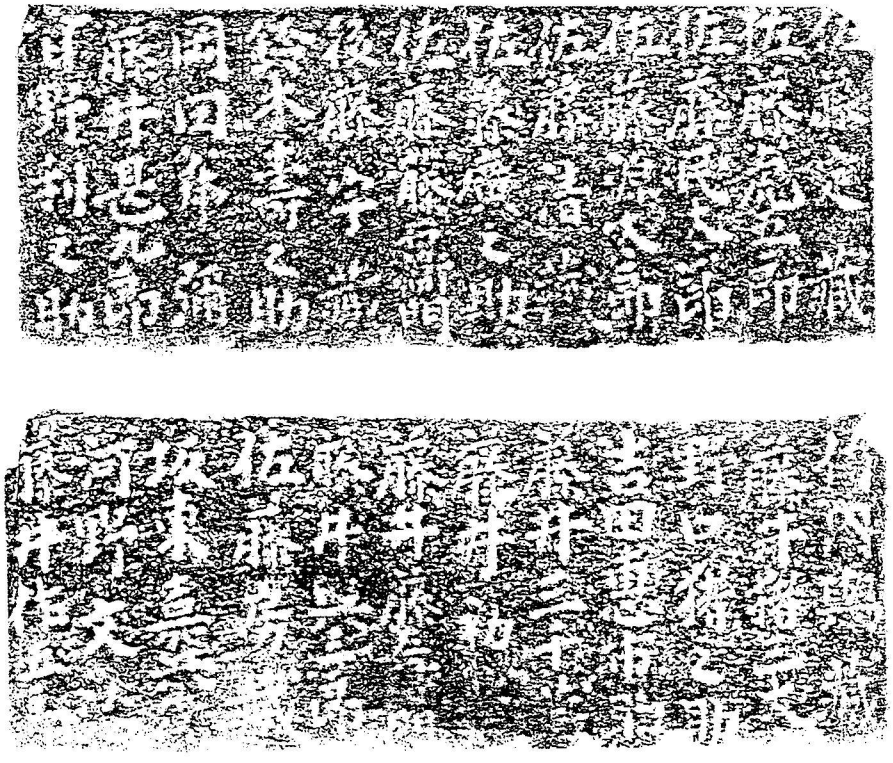
宍戸神社全景

宍戸神社神幕

宍戸神社前の狛犬

「河野次良右衛門門人山根大蔵取次」刻銘の石柱

宍戸神社前の石造物刻銘の拓本



灯籠下段に刻まれた門弟衆の刻銘

大会・行事所感

徳島眉山ライオンズクラブ 第四十二回小学校・中学校 剣道大会

徳島眉山ライオンズクラブ会長
米倉　滋

「人間形成」を目的とする剣道は、心身を錬磨することにより技術や体力の向上のみならず、人間性を総合的に高めるものであり、剣道の錬成や試合を通じて、人間として人間らしい行動の規範を学ぶものです。私達徳島眉山ライオンズクラブは、こうした剣道の特性を生かし、次代を担う青少年の健全育成を図ると共に剣士相互の交流を深めることを目的として剣道大会を実施し、本大会で四十二回目を迎えました。

ライオンズクラブは一九一七年アメリカ合衆国シカゴ市で誕生し、約一〇〇年の歴史と伝統を誇り、会員数約一三〇万人を有する世界最大の奉仕団体です。その活動は、奉仕活動を通して世界の人々の生活・文化・福祉の向上をはかり人類の平和・発展に寄与することを目的として行っています。こうした奉仕活動の中で私達徳島眉山ライオンズクラブは、剣道大会の開催や徳島子ども俳句の会の支援などをさせていただき、青少年の健全育成と日本伝統文化の継承を図ろうとしています。

さて、大会は平成二十四年十月十四日(日)、徳島市立体育館において県下の小・中学生精鋭剣士が出場し、徳島県剣道連盟の協賛及び関係者の協力を得て中学生男子・中学生女子・小学生高学年（五～六年生）小学生低学年（四年生以下）の四部門で団体戦を実施し、熱戦が展開されました。結果は、中学生男子は阿南第一中学校、中学生女子は那賀川中学校、小学生高学年は徳島至誠館、小学生低学年も同じく徳島至誠館がそれぞれ優勝を果たしました。

相手を敬い、思いやりの気持ちをもった試合態度、礼に始まり礼に終わるという剣道精神の実践、きびきびとした動作、凛とした姿勢から出される技などが随所に見られ有意義な大会となりました。

最終になりましたが、本大会の開催にあたり協賛していただいた徳島県剣道連盟及び会場設営や大会運営に協力していただいた関係者の皆様方に厚くお礼申し上げます。

第四十回記念磯部旗争奪
那賀川剣道大会を終えて

那賀川少年剣道クラブ
二反田　和　則

平成二十四年十一月二十三日をもちまして今大会も四十回の大きな節目を迎えることができました。この偉業も徳島県剣道連盟はじめ、剣道連盟阿南支部、大会関係者、選手のおかげであり、皆様に深く感謝しております。日程は発足当時から変更無く開催してまいりました。

さて、この大会は故磯部茂治先生中心に発足し、第一回は那賀川中学校体育館を会場に、県南中心の小学生・中学生約四百名の選手を招き行われました。大会を重ねるに従い参加校は増え、参加人数に対処するため、会場を阿南市那賀川B&G海洋センターへ、その後、阿南市那賀川スポーツセンターへと移してまいりました。また以前は大会も年二回開催しており、十一月には那賀川少年剣道錬成大会（小学生・中学生対象県南中心）と、二月には県下選抜磯部旗争奪剣道大会（小学校・中学生・高校生対象県下選抜）とありました。名勝負も多数有り記憶に残る大会でした。

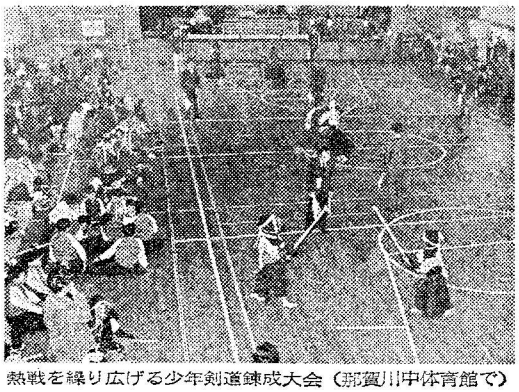
現在は二大会を合併させて大会名も現在名に変更になりました。参加人数も当初の倍近く成り盛大になりました。

改めて磯部先生の偉大さを感じています。

現在の運営は〈主催〉那賀川少年剣道クラブ、〈主管〉徳島県剣道連盟、〈共催〉那賀川剣道教室わかあゆ会・阿南市教育委員会、〈後援〉阿南市体育協会・那賀川体育協会・那賀川中剣道部OB・OGの方で運営しております。

発足当時は町内で剣道大会が行われるのも珍しく、お祭り騒ぎと言っては大袈裟ですが、普段は剣道に縁が無い近所の方、親

那賀川町で錬成大会
豆剣士が熱戦



熱戦を繰り広げる少年剣道錬成大会（那賀川中体育館で）

第四回少年剣道錬成大会（那賀川町体育協会など主催）が二十三日、那賀郡那賀川中学校体育館で開かれた。

地元那賀川町をはじめ郡内町村、阿南、小松島市などから二十四団体、約四百人が参加。磯部茂司君（今津小六年）の選手宣誓などのあと、小、中学校の部に分かれて熱戦を展開、駆けつけた父兄らは手に汗にぎって応援していた。

成績は次の通り。

【小学校の部】◆団体＝優勝　那賀川少年剣道ク（秦地雅貴、鈴江敏宏、竹内進、太田晋義、磯部恭司、山田耕司）▽準優勝　新開誠志館▽三位　津乃峰剣道教室、芝田剣道ク◆個人＝一年　沢本雅昭（大野小）▽二年　田村聡（芝田剣道ク）▽三年　吉田茂生（木頭小学館）▽四年　中野誠司（和田島少年剣道ク）▽五、六年　久保真治（阿南剣道教室）【中学校の部】◆団体＝優勝　木頭中（栗林春彦、岡内隆樹、小野恭輔、中山昭、吉田博文、岡脇正樹）▽準優勝　小松島中▽三位　那賀川中、宮浜中◆個人＝一年　関口裕史（木頭中）▽二年　小川敏樹（坂野中）

戚の方が応援に駆けつけて頂き、監督をはじめ、選手共に一層稽古、試合に気合いが入りました。また部員増加にも繋がり、沢山の思い出も出来ました。

ところで、数年前から掲示方法も、時間短縮とペーパーレス化を図りマグネット方式に変更しました。開門時の入場方法など、色々とアイデアを出し合い運営し易い様に試行錯誤しながら行っております。しかし、悲しいことに、年々主催者側のスタッフが減少傾向でありまして、運営面でも以前から比べると負担度が大きくなりつつあります。

最後に、我々剣道部は先代の意志を引き継ぎ大会が一回でも多く続けて開催出来るように、色々な問題を解消しながら前向きに考えて行きたいと思います。これからも諸先生方のご指導　ご鞭撻、また皆様ご意見の程よろしくお願いいたします。

閉校「鳴門市立鳴門工業高校」
～母校と共に歩んだ　四四・五年間～

事務局長　藤本雅史

人生も終盤の還暦を迎える歳になると、将来の夢を語るより懐旧の念が強くなってくる。歩んだ人生六十二年、その内学生時代を含め四十四年と半年を過ごした勤務校「鳴門工業高校」は私の人生そのものであった。広大な学舎に抱かれ、先輩同輩の先生方、数多くの生徒達に教えられ、鍛えられ、人生の喜怒哀楽を味わい、成長させてもらった。そんな鳴門工業高校も平成二十三年度末で閉校となった。時代の変遷とは云え寂しい限りである。その鳴門工業高校を平成二十三年度末で退職した。四十四・五年間の日々を回顧してみたいと思う。

一、輝いていた？学生時代

昭和三十八年四月、高度成長期の工業立国を標榜する我が国の有為な中堅技術者の育成を目指して鳴門市立の工業高校として開校された。「至誠をもってことにあたり、真剣に努力する」校訓のもと、教員、生徒共に開拓精神に溢れ、早朝補習から七時間の授業、放課後には伝統校に立ち向かう各部の活気に満ちた部活動、無人購買や小さな親切運動の推進、就職先への献石など、文武両道に励んでいた。そんな新設校に昭

和四十一年四月八日、第四回生として機械科に入学した。三月に第一回生を送り出したばかりの真新しい体育館、真新しい正門が迎えてくれた。とは云え前の道路は砂ぼこりが舞い（現在のソイジョイ武道館へ向かう道路）、雨が降れば泥んこの悪路に様変わり、玄関前も砂利敷きであった。今でこそ敷地に高々とそびえるワシントンヤシはまだまだうぶな高校生同様、一メートル足らずの育ち盛りであった。でも、先生と生徒が一丸となって伝統樹立に邁進し、開拓精神に溢れていた。生徒は全員丸坊主、詰襟学生服、学生帽が制服であった。

授業も個性と情熱溢れる先生方に引き込まれ、今思えば一般教科、専門科目とも難解な内容であったが、一日八時間、週四十四時間（土曜日も午前中授業有り）も良く耐え、良く頑張ったものだと感心する。当時は全国的にも珍しい航空工学という自衛隊から将校を招いての授業も受け、坂田道太文部大臣、小原國吉玉川大学学長など高名な人の講演も聞くことができた。

そして放課後は剣道の稽古に汗を流した。中学時代の経験者は私を含め三人位、初心者四～五名の同期生と一緒に体育館西側の茅が生えていた田んぼの夕陽に向かってメン、コテ、ドウの発声練習、そして学校東側の塩田縁（当時は未だ総合運動公園などが開発されていなかった）を走って妙見山までランニング、妙見山では三百段の階段登りや腹筋などの体力トレーニング、日替わりで行われる体育館では、バスケット、バレー、卓球、柔道が所狭しと芋こぎ状態で練習、良くピンポン玉やボールが飛んできた。

忘れられない出来事があった。二月の新人大会前に、私は機械の実習で指を負傷してしまい、試合に出れなくなった。みんなに迷惑を掛けてしまい、申し訳ない気持ちと試合に出れない悔しい気持ちとで一杯だった。試合前の健康管理は自己責任であることを思い知った出来事であった。

帰りは汽車通学だったので剣道仲間や他の部活仲間と一緒に撫養駅前のお店でパンやジュースを買って空腹を満たし、他校の可愛い女子学生に目を奪われながら、胸をときめかせて帰途に着く毎日であった。

今振り返ると、毎日毎日朝六時過ぎの列車に乗るため、早朝から弁当を作ってくれた母には感謝感謝である。

朝の補習から始まり、一日七時間の授業、そして部活動、夜はレポート作成、そんな充実した高校生活もあっという間に過ぎ、昭和四十四年三月、石徳五訓の意志で磨き上げられた銘石で飾られた体育館において、やっと長髪が生え揃い、紅潮した仲間と共

に厳粛な卒業式を終えて社会に巣立った。

あっという間の三年間で、現代の高校生には考えられないような生活だったが振り返れば楽しい充実した高校生活であった。

二、勤労学生の想い出

昭和四十五年九月三十日、勤めていた会社を退職して翌日十月一日から機械科実習助手としてのスタートを切った。いきなりの教師、教えるどころか右も左も解らないまま、先輩の先生に指導して頂きながら、一を教えるには十のことを識らなければ務まらないと痛感する。トラブルの処理、機械の異常の発見には経験を重ねなければならなかった。

そして、昭和四十六年徳島大学工業短期大学部機械工学科に通い始めた。学校の勤務を終え、今度は教えられる身分に変身し、夕刻六時から九時まで専門的な講義を受けた。色々な会社で働いている級友はみんな向学心に燃え、又悩みも抱えており、酒を友にして徹夜の語り合いは仲間の絆を深め、充実した勤労学生生活となった。余程楽しかったのか、一年間延長して五年間も在籍していた。

三、部活動の想い出

（一）勝負に拘った前期

赴任すると新しく武道館が建立されていたが、剣道部は遊び半分の休部状態であった。翌年四月、新入生の勧誘をしたところ多数の希望者が集まり、再スタートを切った。丁度この頃、格技の授業が展開されるようになって鳴門高校をご退職された教士七段山田武雄先生が指導に来られ、放課後の剣道部も指導して頂けるようになった。練習も熱を帯び活発な活動が再開された。

そして三年後に個人の部で四国選手権大会に出場、翌年には県総体個人優勝、インターハイ出場と大活躍であった。その当時のメンバーがOB会の創設に寄与され、物心両面に渡って援助し、支えてもらった。感謝の一言です。当時は他の部活動も盛んで県総合体育大会で男子総合優勝、野球部が甲子園春夏出場し、春にはベスト四まで進出する活躍振りで本校の第一期黄金時代

であった。

剣道部はその後も四国選手権大会、インターハイにも出場する者も出てきたが、団体での出場が後一歩で叶わず、ロッカーには長く片目の空いたままのダルマが置かれていた。若い頃は試合の勝ち負けに一喜一憂し、試合当日、大麻比古神社に必勝祈願をして会場入りをした。試合前には選手以上に緊張していた。監督がこれでは勝てる

はずもない。ある年には、元気を付けるため良く効くという評判の高価なドリンクを購入して、試合前に飲ませたところ、効き過ぎて腹痛を起こし、試合にならなかった事があった。負ければ自分の指導力の無さを棚上げして、罵声を浴びせたり、時には手を挙げた事もあったかな？（今では体罰により懲戒免職になっていたかも）、卒業して「あの時の先生の一言はきつかった。」と言われることも度々である。（反省しています）強いメンバーが揃い今年こそはと思ってもくじ運が悪く後一歩で上位進出が果たせなかったり、途中リタイヤ組が出て戦力ダウンになったり、と後一歩の壁が破れなかった。

（二）武道に目覚めた後期

時代の変遷と共に普通科志望が高まり、工業高校の活性化と市工の運動部の活性化の為推薦入試が導入された。剣道部も小人数ではあったが推薦枠をもらい剣道部の活動に力を入れてきた。私自身も力を付けるために一般の稽古会に参加をしたり、少年剣道から育てようと少年剣道教室に通うようになった。そして勝ち負けだけが剣道じゃない、基礎、基本の大切さ、将来伸びる剣道、毎日こつこつ努力することの大切さ、今日の自分に負けない克己心、そんな事の方が大切なのではないかと考えるようになってきた。

高校から剣道を始めた生徒、中学時代無名だったけれども一生懸命努力してめきめき上達する生徒を目の当たりにして、日々の稽古が充実していた。道場に足を運ぶのが楽しかった。強い相手にも臆することなく真正面から向かっていく頼もしさがあった。試合に負けても次の日から課題克服に取り組む生徒に何度も教えられてきた。稽古もいたずらに勝負に走るのでなく、真っ直ぐな剣道、剣の強い相手に正面から向かっていく剣道、思無邪（よこしまな考えを無くす）な剣風を求めるようになってきた。そして世の中に出ても困難から逃げるのでなく、壁を乗り越える人間になって貰いたいと強く望むようになった。

強豪高校にはなり得なかったけれど、社会人になって剣道を続けてくれているOB、稽古はしていないが剣道で学んだ事を糧に企業や会社で活躍しているOB、そんな卒業生は私の宝であり、鳴門工業高校剣道部の誇りである。

（三）合宿、遠征の思い出

最初の合宿は私の地元大麻比古神社で宿泊をし、板東小学校講堂で稽古をした。その後、OB達の参加がし易いお盆時期に母校柔道場に蚊帳を吊って寝泊まりをするようになった。誰かが起きると柔道場の床が振動し、蚊が進入して寝不足のまま朝のトレーニングを迎えることもあり、部員の人数よりOBが多かったり、飲み物の差し入れでお店が開けるくらい山積みになったり、OB、現役部員一緒になって合宿をした。

昭和五十八年冷暖房完備の生徒会館が建設されると冬休みや県総体前にも良く合宿

をするようになった。全国強豪チームのビデオを見て研究し、チームの志気を高めるはずが夜遅くまで起きていて寝不足になったり、慣れない早朝の起床で調整不足になったりした。

その後、指導者仲間からも夏合宿のお誘いを受け、木頭の山奥で阿南工業高校、東工業高校、那賀高校とも合宿をさせて頂いた。平地と五度くらいの温度差があり、食事も良く咽を通り、厳しい稽古にも歯を食いしばってよく頑張っていた。夜の余興では昼の負け試合の敵討ちにせめてもの意地で頑張る本校の部員達は頼もしかった。また保護者が焼いてくれた鮎料理は美味しく、忘れられない楽しい思い出である。

遠征も、最初の頃はお願いする学校も数少なく新野高校が最初であった。しかも列車での移動で一日掛かりであった。駅に着けばリヤカーで迎えにきてくれた。今思えば何と風流で心温まる遠征であったことか。次第にマイカーでの移動になり、私もワンボックスカーを購入して春、夏、冬休みには香川、愛媛、高知はもとより滋賀県まで足を伸ばすようになった。そして全国の有名強豪高校とも剣を交えることができ、貴重な経験を積むことができるようになったが、いつしか我が家は他の部の指導者と同じ母子家庭と呼ばれるようになった。世間では楽しいゴールデンウィークは県高校総体が終わるまでお預けである。子供達の運動会、参観日などの行事は参加できず、駄目親父であった。

四、思い出の先生

（一）山田武雄先生

教士七段、法政大学ご出身で鳴門高校をご退職され、本校格技の授業が実施されるようになり、放課後の部活動も指導して頂くようになった。大きな身体で眼孔鋭く（若いときに片方の目を失明された）得意は右片手上段の名手であった。最後、一本勝負といって上段を執られ、良いところを打つと一参った一と右手を挙げられ、生徒をその気にさせるのが上手だった。

一度授業を参観させていただいのだが、生徒の足捌きが悪ければ竹刀が飛んでいき、手が悪ければ腕に噛みつき、生徒は戦々恐々であった。授業を逃げ出す生徒もいた程で、悪ガキからも「剣爺」と恐れられていた。しかし指導者の私には生徒の前で指摘しないで帰りの車中「ここを気を付けたら良くなりますよ」と気配りの優しい先生であった。お家までお送りした帰りには、私の車が見えなくなるまで深々と頭を下げられ見送っていただいた姿に、また、お宅で何度か食事をご馳走になった折り、孫同然の私を客人として上座に座らせ、礼を尽くしていただいた姿に剣道家としていろんな事を学ばせてもらった。ほんとに矍鑠としていてサムライであった。

（二）川人芳正先生

柔道部の顧問であり、生徒指導のスペシャリストであり、母校の今なお語り継がれて

いる名物先生である。生徒指導では厳しかったけれど、熱血漢であり、心の温かい生徒思いの先生である。多くの卒業生が今なお慕っている。

生徒指導でいくら遅くなっても柔道着に着替えられ、道場に姿を見せていた。そして生徒と一緒になって汗をかき、情熱をもって指導する姿に指導者として、武道家として実に多くの事を学んだ。同じ武道家として酒席にも良く誘っていただき、可愛がって頂いた。

今も片や柔道連盟の副会長として、私は剣道連盟の事務局長としてご厚誼を願い、旧交を深めている。

（三）堀江幸夫先生

範士八段、県警名誉師範、剣道連盟名誉会長であり全日本剣道連盟の重鎮であった。

本校武道館が建立された時に一度ご指導頂いている。私とすれ違いであった。その後私が剣道連盟の理事、事務局長として仕えてご指導頂くようになり、また稽古も頂戴するようになって親しくご縁をいただき、末席の弟子に加えて頂いた（自分勝手にそう思っている。）

稽古はもちろん、剣理について、心の有り様について、剣道家としてどうあるべきか、人間性に至るまで大変大きく影響を受けた。また、本校にお孫さんが二人入学して剣道をされたのを機に良く来校され、生徒にもご指導を頂いた。大変慈悲深く、剣技は柔らかく、引き立てるのが非常に上手で「此処だ」と思い切り打ち込むとポッとコテを押さえられ、或いは見事に切り落とされるのであった。仏様みたいに「さあ、どこからでもいらっしゃい。」と構えられ、大きく包み込まれるのである。

そんなご縁で今なお全国の高名な先生とお稽古を頂ける幸運に恵まれ、私の剣道修行をさせていただいている。

五、生徒に教えられたことの想い出

授業でたくさんの生徒を教えてきたが生き方については随分と教えてもらった。特に印象に残っている生徒の一人は「鳴門工業高校で甲子園に出場するんだ」との強い目標を持って入学してきた。その当時の野球部は甲子園から遠ざかり低迷していた。夢はいつしかあきらめ、立志は揺らいでくるのが現実だが彼は遂に選抜大会に出場を果たした。実に十六年振りであった。「夢をあきらめず、努力を継続する」彼の夢を実現させた決意と努力に多くのことを学んだ。

もう一人はソフトボール部員であった。彼は高校に入学してから投手を始め、全体練習が終わった後、体育館の横で体育館の明かりの下で黙々と投げ込みをしていた。雨の日も休まず夜遅くまで練習をしていた。そして見事に国体出場を果たし、その後社会人になっても徳島県の第一人者として活躍をした。当時の彼の努力の継続を観て「努力、練習は嘘をつかない」と改めて実

感した。

六、退職にあたり在校生の前で あいさつをしたこと

人生の「三カン王」について

（一）関心を持つこと

一流の人の話や音楽などを耳で聞き、一流の人の技や絵画などを目で見、一流の料理人が作った食事を食べる。何事も積極的に！折角の一流の人、本物が傍に居ても無関心では何も得られない。

（二）感動を覚えること

一流、本物に触れると感動を覚える。

ウワァ～すごい、ウワァ～うめえ。

五臓六腑が震えるくらい、涙する位感動して下さい。

（三）感謝をすること

一流、本物に出会えたことに感謝をして下さい。機会を作ってくれた人、支えてくれた人々に感謝をして下さい。この世に生を受けたことに感謝をして下さい。

折角生まれてきた自分の人生、たった一つの命を大切に、人生の三カン王を目指して下さいと締めくくった。

これは故堀江先生から教わった言葉を頂戴した訳だが教員、生徒ともよく聴いてくれ、反響があったようだ。堀江先生に感謝である。

以上、思いつくままに筆を走らせてみたが、書き尽くせない想い出が走馬燈の如く、つい昨日のように甦ってくる。「光陰矢の如し」の四十四・五年間であった。

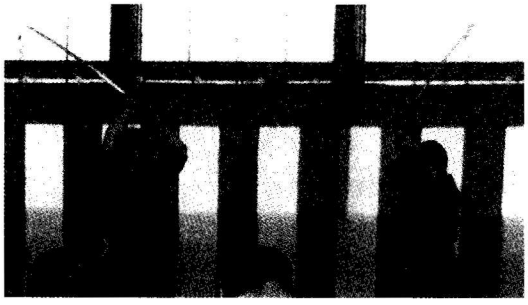
これからは折角授けてもらった我が命、出会えた人々、生きる道標を教えてくれた剣道に感謝し、神様が与えてくれている人生を燃え尽きるまで歩んでいきたいと思う。

感謝

鳴門工業高等学校閉校
剣道部記念式典に臨んで

十七回生　正木幸弘

母校鳴門工業高校が、平成二十四年三月末で閉校されることになり、剣道部OB会剣誠会の平成二十二年総会（毎年一月二日開催）で記念式典を実施することが決定された。その後、県内在住OBで実行委員会を結成し、鳴門工業高等学校閉校剣道部記念式典を平成二十四年二月十一日実施（案）を立て平成二十三年総会で承認された。実行委員会で、大会までのスケジュールを決定し、役割分担等を決めていった。その中で、式典での日本剣道形に私と後輩の三十二回生明口氏が恩師藤本先生、剣誠会叶井会長、同会員方より指名された。私は、一度は「太刀を握って、剣道形をしてみたい。」と軽い気持ちで受けたが、後で事の重大さに気づくこととなった。まずは、太刀の抜き差し太刀帯など初めての経験であり所属支部の先生方より助言・応援していただいた。その後、明口氏と共に式典まで練習に励んだ。



鳴門工業高等学校剣道部OB会剣誠会叶井会長の挨拶で記念式典が始まった。緊迫した中で式典が進行し、出番が来た。明口氏と緊張しながら、式典の日本剣道形が始まった。打ち太刀として、先輩としてリードしなければとの思いを抱きながら、挨拶、一本目と進んでいった。自分では、練習のようにできていると少し安心していた時、五本目の仕太刀の掛け声と同時に唾が飛んできた。その瞬間、母校この道場の思い出、お世話になった人達、また、みんなで雑談しながらこの会場設営をした鳴工剣道部OBの方々への思いがこみ上げてきた。そして、目が潤んで太刀筋が見えず、後の立ち会いをどのようにしたか覚えていない始末であった。式典も終わり、ホテルでの記念パーティーでは、参加者一人一人の剣道部時代の思い出が順に語られ、その時々の事が思い出された。また、酒席が進むと先輩方より式典での日本剣道形についてや稽古会での「間合い」「打突部、物打ち」のことで指摘頂いた。それは、これからの私の剣道稽古として、ただ思い出深いこの母校道場で、「最後の最後、この場で日本剣道形ができた。」ことで私自身、恥じらいと喜びを感じ得たのでした。

この記念式典にご尽力頂いた皆さまと私に日本剣道形をさせて頂いた方々に紙面をお借りして感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。

徳島市立高校
創立五十周年記念稽古会

徳島錬心館　中尾幸雄

この度母校、徳島市立高校が創立五十周年を迎え、平成二十四年十一月二十三日に同校体育館で盛大に五十周年記念式典及び、記念講演会が挙行されました。市高剣道部OBにおいても翌日に、記念稽古会を盛大に開催いたしました。

また、平成二十四年十二月二十三日の県下社会人剣道大会にも、記念事業として、(市高OB葦芽剣友会)と称し、OB単体で二チーム出場しました。

葦芽とは、〝あしかび〟と読み、校歌にも出てくる市高のシンボル名です。

文字ごとく葦の芽であります。市高周辺の水際などに、寒い冬の日でも根強く竹の子のように勇ましく伸びています。日本最古の歴史書である、古事記にも登場した、国土の成長力を神格化する象徴的植物であります。

この葦芽のごとく、強い大和(たいわ)の精神で活動できるよう願いを込めて結成しました。

今回の剣道部OB記念事業の目的は、半世紀にわたる市高の伝統・名声を受け継ぐと共に、次世代に繋ぎ、さらなる発展への礎となるのを願って開催いたしました。

記念稽古会では、県内外より剣道部OB及び市高剣道部員、恩師、ご父兄の方々が多数参加されました。恩師の中西知先生に、稽古会開式の辞にて、市高の歴史、思い出話などをして頂きました。先生の話に続き、鈴江俊和先生が打太刀、私(中尾)仕太刀による日本剣道形の演武を披露しました。半世紀前の旧武道館落成式においては、恩師の大澤善二郎先生と大澤孝彰先生が日本剣道形を盛大に披露され、三年前の旧武道館閉館式においても、山田浩史先輩と吉田茂生先輩による演武が披露されました。この偉大な恩師、大先輩が披露された剣道部伝統の演武を鈴江先輩と披露することができ、感謝いたします。

この後、記念稽古らしい気迫のこもった稽古会を実施し、稽古後は顧問の先生にお願いし、新校舎見学会を記念事業の一つとして実施しました。

どの教室からも雄大な眉山や吉野川、しらさぎ大橋も見られ素晴らしい景色でありました。新教室で、恩師の中西知先生に、世代の違う各OB・OG多数が久しぶりに先生の人生授業受けるというサプライズもありました。私も、卒業して二十五年以上経ちますが、卒業してもなお、恩師の授業が受けられたことに感動しました。最後は「起立!礼!」の号令をかけ、あの椅子の音が懐かしかったです。中西先生、本当にありがとうございました。

夜の記念懇親会においても、恩師の本田敦彦先生はじめ、他多数のOBにも参加していただき市高談義に盛り上がりました。

第四十一回県下社会人剣道大会にも、記念事業として二チーム初出場し、会場の二階観覧席に、校旗も掲げ多くのOB・OG

にも応援に来ていただけました。

優勝することは出来ませんでしたが、楽しく一致団結したのが何よりで、今後の人生の励みにもなった最高の思い出となった一日でした。高校時代のあの頃のように、いい緊張感を持って戦うことが出来ました。次は五年後に出場予定です。このように市高五十年の重みを背負い白熱した試合を展開することができたのも、市高同窓会、顧問の先生方、徳島県剣道連盟のおかげであります。この場をおかりし、感謝いたします。

今後、市高五十周年事業が追い風となり、市高人気は益々高まり、これと同時に市高OB葦芽剣友会が更に、市高発展及び県内剣道普及に貢献出来ればと思います。

剣道とは目先の勝負だけでなく、本体の重要どころを外さないように修行していかなくてはなりません。平成二十四年度から中学での武道必修化が実施され、人を育てる力を武道で進められています。

現代社会は、高度経済成長期を経て豊かになった反面、人間性はどうか？いじめ、体罰、自殺、東日本大震災による経済の深刻さ、その他暗いニュースが耐えません。

今回の市高創立記念事業の活動は、母校の発展だけでなく、子供たちにも剣道の良さを伝え、世の中にも少しずつ貢献できるのではないかと信じています。

私の人生の恩師である大澤孝彰先生（範士八段、徳島錬心館長で市高在職三十年）の大切にしている【大和（たいわ）】という言葉があります。大きな平和という意味で、誰とでも仲良くする。ただ、仲良くではなくて切磋琢磨して仲良くする、剣道なら一生懸命稽古してお互いに励ましながらという意味です。

まさにこの教えがあったからこそ、今回の記念事業を企画しました。

葦芽剣友会は、今後月一回の予定で同校武道館で稽古予定です。同校OBや剣道部員だけでなく、近隣の中高剣道部員や私の所属する日亜化学剣道部、またはその他剣友仲間などで幅広く、大和精神で県下剣道普及に努めたいと思います。

そして、定期的に徳島錬心館にも、市高剣道部OBで出稽古に行き、恩師の大澤先生・道場先生方に御指導受けたいと思います。

皆様、今後とも、市高葦芽剣友会宜しくお願いいたします。

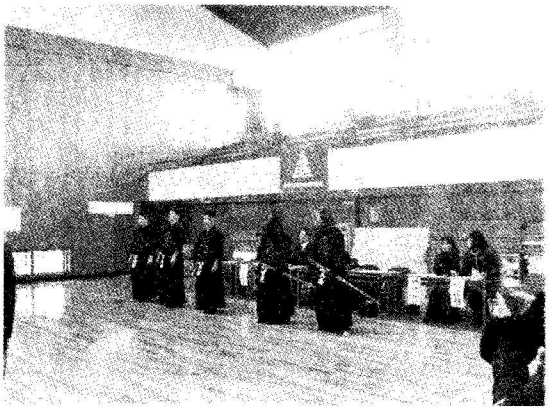
【後記】

徳島市立高校五十周年を機会に、この度市高剣道部OB葦芽剣友会のホームページを作成しております。このホームページで剣友各位と県下剣道普及にも繋げていきたいので是非宜しくお願いいたします。

検索先は、徳島市立高校HPの市高同窓会内にリンクさせています。

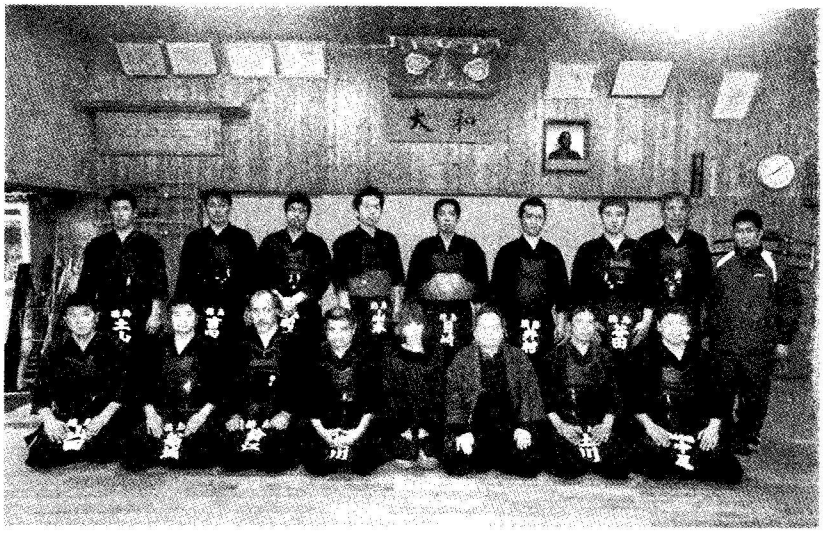
宜しくお願いいたします。

第41回徳島県社会人剣道大会にて



社会人剣道大会、試合前挨拶

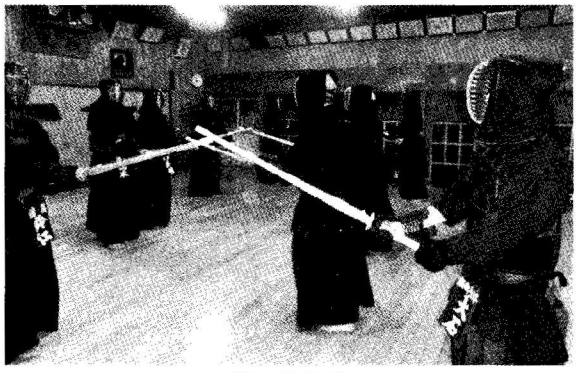
記念稽古会終了後①



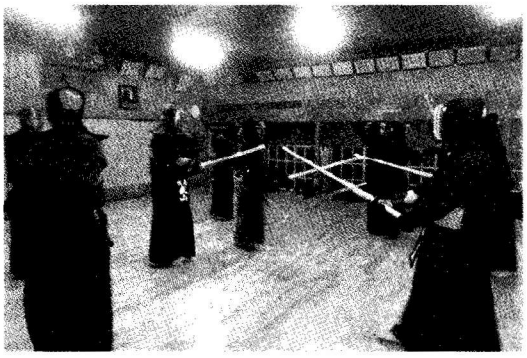
錬心館長道場で恩師大澤先生囲んで、市高OB・道場門下生で合同稽古①（2013/2/23）
・葦芽、大和の精神で充実した稽古であった。（前列、右から３人目が大澤孝彰先生）

徳島錬心館・市高OB葦芽剣友会稽古

時：2013/2/23（土）　場所：徳島錬心館

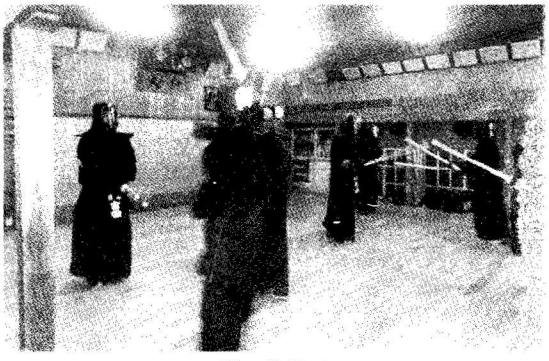


稽古風景①
☆大澤先生の指導で皆気合が最高潮に。



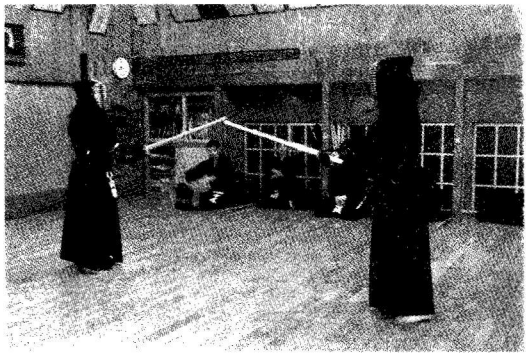
稽古風景②

稽古風景③
☆やはり、大澤先生が真横で指導していただけると、
気合が最高になり不思議な力が出てきます。



稽古風景④

稽古後、皆で剣道談義
☆大和の源がここに。



稽古の一番最後に、
山田浩史先輩と吉田茂生先輩の模範稽古
大澤先生の見守る中、気迫最高潮に。

稽古後、大澤先生を囲んで

各種大会に参加して

第十一回宮本武蔵顕彰 女子剣道大会（お通杯）に参加して

徳島支部　岩木淳子

剣聖・宮本武蔵の生誕地で、武蔵の精神を伝承すべく、女性剣士が集う大会「お通杯」がここ「武蔵の里」岡山県美作市で今年も第十一回を迎え、「宮本武蔵顕彰女子剣道大会」が開催されました。

試合機会の少ない多くの女性剣士が各地から集い、日頃の鍛錬の成果を思う存分に発揮（ストレス解消の人いるかも？）し、剣友との親交を深める大会でもあるのです。

私も、楽しみにしている大会で、毎年本大会に向けての稽古やスケジュール等のお世話を頂いています女子部の竹内佳代子先生をはじめ、各先生方には感謝しております。今年は三チーム、九名の参加となり、前日の二十日から稽古を兼ねて岡山入りしました。この大会は、前日に全日本剣道連盟から役員、審判員として派遣された八段の先生方や参加選手（女性剣士）との稽古会があるのも魅力の一つです。ですから、試合だけでなく参加された選手と竹刀を交えて親交を深めることは、今後の剣道人生で私自身、貴重な宝物になっています。

稽古中、会場を見渡しますと所狭しと稽古に汗を流している同志の姿を目のあたりにしますと一わたしも頑張ろう！」と毎年元気をもらっています。

さて、本題に入らせていただきますと、本年度の試合結果はなんと……今年もやってくれました。

個人五十歳代の部で前年に引き続き竹内佳代子先生が優勝!!なんと二連覇を成し遂げられました。佳代子先生の試合は持ち前の「気迫・粘り・力強さ」の三拍子で、あれよあれよという具合に勝ち進み、気がつけば決勝。決勝戦も危なげなく貫録の勝利でした。

また、個人四十歳代の部では平野悦子先生が準優勝!!と、これまた快挙を成し遂げられました。悦子先生は初戦から常に冷静で、慌てることなくじっくり攻め合い、無駄のない試合運びで勝ち進んでいきました。決勝戦では惜しくも敗れたものの一試合ごとに気迫が増し、横で応援している徳島の選手にも熱いものが伝わってきたのを思い出します。その他の戦績は、個人四十歳代の部で北村環先生がベスト八、団体戦では川高剣友会チーム（前田奈々枝、熊橋史、北村環）がベスト八に入りました。優勝した岡山県活人会チームに敗れたものの大健闘、白熱したすばらしい試合を見せて頂き、今年も参加させてもらった感謝の気持ちと剣友と共に汗を流せた満足感に浸りながら帰路につきました。

私は平成二十一年からこの「お通杯」に参加させていただいていますが、徳島女性剣士、戦績だけでなく年々パワーを増し、活気が出てきているように感じます。前日の合同稽古、夜の懇親会、そして試合、どんな時も明るく楽しく、そして清楚にをモットーにチーム一丸となっています。

お通杯や県内の各大会に参加できない方もいますが、毎月第一日曜日の女子部稽古会の参加者も増え、稽古日を楽しみにしている方が多数います。私もその中の一人で、稽古は短い時間ではありますが充実し、いい汗を流した後のガールズ（？）トークに花が咲き、心身共に癒されています。剣道を続けていたからこそ癒しの場があるのだと、いまさらながらこの空間に感謝しています。

生涯剣道という目的を持っている仲間がここにいます。女性剣士の皆さん、そして女子稽古会に足を踏み入れたことがない方、限られた時間ではありますが竹刀を交えて充実した時間を共にご一緒してみませんか？ぜひ参加をお待ちしています。

最後になりましたが、日頃からご尽力いただき、女子部を暖かくご指導して頂いています藤本雅史先生、平野誠司先生等各先生方に紙面をお借りしてお礼申し上げます。

〝女子部今年も頑張ります！〟

第三十四回全国スポーツ少年団剣道交流大会

徳島県監督　中西　実

◎期日　平成二十四年三月二十五日（日）～二十七日（火）

◎場所　山梨県甲府市
小瀬スポーツ公園武道館

◎徳島県チーム（阿南市A）

監督　中西　実（阿南剣道教室）

選手　先鋒　飯田翔太　四年（至誠館）
次鋒　西岡彩芽　六年（阿南剣道）
中堅　田上雄大　六年（錬武館）
副将　山﨑　舞　六年（阿南剣道）
大将　朝田智輝　六年（至誠館）

中学男子　南谷飛鳥　二年（小松島小剣）

中学女子　川原眞実　三年（小松島少剣）

平成二十四年三月二十五日～二十七日、山梨県甲府市小瀬スポーツ公園武道館にて、全国スポーツ少年団剣道交流大会が開催されました。

昨年十二月に行なわれた徳島県予選会から約三カ月間、初めて代表の監督を任され、とても光栄な事である反面、小学校・中学校の代表選手を指導することが、こんな私に徳島県の監督として務まるか、責任と不安という重圧に苛まれました。しかし、阿南の支部長でもある須藤先生から、「子供が主役やから監督は子供がのびのび試合に臨めるよう努めるだけでいいよ」と言われ、すこし気が楽になりました。それといろいろな先生から声をかけていただき、特に、至誠館の中山先生、錬武館の茂﨑先生、小松島少剣の青木先生から、「いつでも何かあったら手伝ってあげるよ」といわれ、大変ありがたいことだと感謝の気持ちでいっぱいでした。この気持ちを忘れず、監督としてできる限りのことをしようと決意し、大会へ臨みました。ところが、経験の少ない私にとっては、何から手をつければよいかさえ分からず、ただ気持ちだけが焦っていました。大会への手続き、合同稽古や練習試合の日程調整、試合会場までの移動手段の手配、多方面への表敬訪問など、まだまだ先のことと思っていると、あっという

間に月日が過ぎていきました。事務的な内容は、三年前に代表監督でもあり、私の同級生でもある、谷本先生からいろいろ教えていただき、合同稽古については、高知県の代表監督でもあり、今までたいへんお世話になっている宇賀先生に相談して、そのおかげで高知との試合稽古を何回かすることができました。また高知県まで小松島少剣の青木先生が引率していただきたいへんありがたく思いました。また高知県をはじめ愛媛県、香川県、ほか、つねに、全国大会では優勝、準優勝になる広島県、京都府、岡山県などとも練習試合をすることができました。この繋がりは今の私の剣道ならぬ人生の宝になりました。

さていよいよ本番にむけて前日の朝七時に山梨県甲府市に出発しました。バスの中では、この大会で監督として私の役割を考えたところ、技術的には、徳島県のトップである選手に指導はほとんど不要であり、如何にリラックスして本領を発揮してくれるようにするか、この大会に来てよかったと思えるように子供たちが楽しくのびのびできるよう、自分は徹しようと思いました。そして夕方山梨県のビジネスホテルに着き、そこで子供達全員保護者方全員が集合し、いよいよ明日にむけて気持ちが一つにまとまっていきました。中学校の代表の南谷君、川原さんが小学校の選手たちをよくお世話してくれてみんななごやかにホテルで過ごせました。朝五時に起き、会場に向かう準

備をしていたところ、ベランダから外を見ると富士山が見え、これは朝からすばらしい三日間のスタートになると思いました。大会初日は開会式、入場行進ではさすがに全国大会ということもあり、選手同様に私も胸の鼓動が高まり、感無量の感激を覚えました。この日から選手と私は、大会で準備をしていただいているホテル花石和に宿泊することになり、保護者の方々は前日から宿泊しているホテルと別れました。夜にみんなとミーティングをして明日の試合に臨みました。

いよいよ大会二日目、予選リーグが始まりました。予選リーグの初戦の相手は東京都。緊張の中、先鋒の飯田君がいつもどおりの試合ができ、二本勝ちしてチームの勢いをつけ、相手の東京都チームに一本も取らせず快勝しました。二戦目も相手の富山県に一本も取らせず快勝し、予選を突破して決勝トーナメントに進む事ができ、大変嬉しかったことを昨日のように思い出されます。そして何より四国では、徳島県チームだけが残れたので、高知の宇賀先生から

明口も声援しているからと激励を受け、たいへんありがたく思いました。

中学校の個人の試合では、惜しくも南谷君、川原さんが決勝トーナメントに進める事ができませんでした。川原さんの二戦目の相手の岐阜の川村さんとの試合は私からの位置では川原さんのとびこみ面が先にあたったと思いましたが、相手の抜き胴のほうに旗が二本、面に一本と判定が別れて敗れました。その相手の川村さんがこの大会女子の全国優勝になっており私の中では一番悔しく思いました。

別れた判定がその夜、南谷君はみんなをお風呂に入れて一番はしゃいでいたのを見てすごく気配りのできる子だなと思いました。私だったらその夜こんな風に出来ないと思い、素晴らしくこの数ヶ月間南谷君と一つの夢を見れたことに感謝したいと思いました。それにホテルの人に一時間だけ外出許可をいただき、みんなでコンビニに夜あるいて行ったことも、本当に時間がこのまま止まればいいと思い、こんな素晴らしい選手たちと出会えて私の財産になりました。この夜、川原さんが天然だった事もわかりました。（笑）

いよいよ大会最終日、宮崎県との試合、惜しくも代表戦で敗れベスト十六で団体戦を終了しました。

最後に、今後も目標を高く持ち、それぞれの夢を叶えられるよう、選手だけでなく私も精進していきたいと思っています。

本大会参加に当たり、たくさんの方々からご支援ご協力いただき、心より深く感謝しております。今後ともご指導いただけますようお願い申し上げ、お礼の言葉に代えさせていただきます。そして何より、この山梨の大会にむけて選手の保護者の方々の力強いサポートを頂き感謝いたしております。本当にありがとうございました。

◎試合結果

団体予選リーグ一試合目

徳島4（7）0（0）東京都

先　飯田　㊦㊦　下野

次　西岡　㊋㊋　藤原

中　田上　㊋　増田

副　山﨑　㊐㊦　佐野

大　朝田　引き分け　小川

団体予選リーグ　二試合目

徳島4（7）0（0）富山県

先　飯田　引き分け　荒谷

次　西岡　㊦一本勝　室林

中　田上　㊋㊋　森

副　山﨑　㊋㊐　寺部

大　朝田　㊦㊦　山本

団体決勝トーナメント　一回戦

徳島2（3）2（3）宮崎県

先　飯田　㊋㊋　松下

次　西岡　引き分け　白石

中　田上　㊋一本勝　谷口

副　山﨑　㊐一本勝　山﨑

大　朝田　㊋㊋　古澤

代表（副将）

山﨑　㊐　山﨑

小学校団体ベスト十六（敢闘賞）

男子個人予選リーグ（〇勝二敗）

南谷　㊐　大石（静岡）

南谷　㊋　廣本（茨城A）

女子個人予選リーグ（一勝一敗）

川原　㊋㊋　佐藤（岩手）

川原　㊋　㊦㊦　川村（岐阜）

第六十回全日本都道府県対抗剣道優勝大会に参加して

監督　近藤　亘

全日本剣道連盟設立六十周年記念、第六十回全日本都道府県対抗剣道優勝大会が、四月二十九日（祝）、大阪市中央体育館において開催されました。

この大会は、戦後全日本剣道連盟が発足した翌年の昭和二十八年に始まり、今年で六十回目を迎える歴史ある大会です。

選手構成も時代とともに変わり、第五七回大会から男子高校生・大学生を一名ずつ加え職業・段位・年齢の区分毎に選ばれた七名の男子のみの大会となりました。

今年の徳島県の選手は、予選の結果、次のとおり決まりました。

先鋒　宇井　友隆（鳴門高校）
次鋒　白木恒二郎（国士舘大学）
五将　山本　義征（鳴門支部）
中堅　林　義真（木頭中学校）
三将　六條　勝仁（県警機動隊）
副将　北村　仁志（刑務官）
大将　福多　雅英（城北高校）

今年もベストエイト入りを目標に、週二回（水曜・土曜）の連盟稽古会を中心とした強化を行いました。

しかし、大将の福多選手以外は全員昨年の選手と入れ替わっており、しかもメンバーは、高校生・大学生・県外勤務と様々であり、全員揃っての稽古はできませんでした。

そうした折、京都で近畿地区の都道府県出場チームの合同練習に参加することができました。この時に初めてチーム全員が揃い、どうにかチームの結束を固めることができたように思います。

こうして大会本番を迎えました。

一回戦、長崎県との対戦は、次のような結果となりました。

徳島　2―5　長崎

先鋒　宇井　―　メ　藤野
次鋒　白木　―メメ　浅井
五将　山本　―　コ　荒川
中堅　林　―メメ　福田
三将　六條　―　メ　小野田
副将　北村　ド　―　前田
大将　福多　コ　―　岩松

試合は、一人一人善戦はするものの、自分の持てる力を発揮できたとはいえず、先鋒・宇井選手が惜敗すると、次鋒・白木選手、五将・山本選手、中堅・林選手、三将・六條選手と流れを自軍に引き寄せることができないまま連敗を喫してしまい、団体戦の難しさをつくづく味わう結果となりました。

しかし、勝敗はついても副将・北村選手、大将・福多選手は諦めることなく存分に戦ってくれました。残念ではありますが、今回も初期の目的を達成することができませんでした。

この大会は、年齢、職業、段位等の区分毎に選ばれた選手により構成されており、いわば各都道府県の総合力を試される試合といっても過言ではありません。短期ではなく、長い目で地道な強化を図っていく必要があるように感じます。幸いにも本県では、平成十九年度から選抜した小学生・中学生・高校生の競技力向上を図るため長期

育成強化訓練を実施しています。この施策の充実を図ると共に、一般の強化をいかにしていくかが今後の課題だと思います。

いずれにしても、剣道は稽古しかありません。今回の試合を通じ得た貴重な経験を、今後の自分の稽古の糧として活かしていっていただきたいと思います。

終わりになりましたが、ご支援していただきました剣道連盟会長を始め会員の皆様にお礼を申し上げご報告と致します。

全日本都道府県女子剣道大会に参加して

竹内　佳代子

平成二十四年七月十六日、東京・日本武道館で本大会が開催されました。徳島県チームは三回戦、長野県に一―一の本数負けをし、もう一歩のところで八強入りを逃してしまいました。去年に続き二年連続ベスト十六止まりという結果になってしまいましたが、入賞まであと一歩のところまで迫っているこの成果は大きく、このことを今後の自信につなげていき、来年度こそは上位入賞を目指し頑張りたいと思っています。

以下、各選手の大会に臨んでの感想です。

先鋒　田中理称選手（富岡東高校）

本大会に私は先鋒として参加させていただきました。私にとっては、日本武道館でする初めての試合であり、開会式の時の大太鼓の響きに驚いたのを今でも覚えています。

私の結果は一勝一敗一分けで、チームは長野県に負けてベスト十六という結果に終わりました。とても悔しかったですが、大将の竹内先生の試合を全員が気持を一つにして最後まで応援できたことや、私自身、高校入学時からのあこがれの日本武道館で試合がしたいという夢が叶えられたこと、そして最高のみなさんと三回戦まで試合に臨めたこと、一生忘れられない思い出となりました。

監督の先生をはじめ、チームの皆様には温かくしていただき、本当に楽しい経験でした。とても感謝しています。もう一度この日本武道館で試合がしたいという気持ちが強くなり、高校卒業後私は社会人になりますが、剣道を続け、さらに努力したいと思っています。そして、今回の経験をこれからの剣道人生に繋げていきたいと思います。

次鋒　栗野文那選手（日本産業大学）

日本武道館で開催されたこの大会は、私の予想よりも濃いものだった。緊張や不安、たくさんのものが自分の中で葛藤していた。

第一戦は群馬県。緊張のせいか思うよう

に体が動かなかった。二戦目は三重県。初戦に比べて体は軽かった。惜しい技もいくつかあったが、一本に決めることができなかった。詰めが甘かったと実感。三戦目は長野県。自分の剣道を思うようにさせてもらえなかった。

今回この大会への出場を決めた時、嬉しさ反面、徳島県代表が自分でいいのだろうか、チームの足を引っ張らないのだろうかという不安の方が正直大きかった。しかし大会を終えて、その不安はいつの間にか自信に変わっていた。代表として日本武道館という大舞台で戦えたこと、これは私の剣道人生の中ですごく貴重な体験となった。この大会を通して今まで見えなかった発見や課題が山ほどみつかり、自分自身を見つめなおすとても有意義な経験のできた二日間となった。監督の平野先生、選手の方々、応援してくださったたくさんの方々、本当にありがとうございました。

中堅　平野千尋選手（鳴門支部）

私は今回二度目の出場でした。この大会の特徴は、各年齢層によって選手構成がされていることです。私のポジションは大学生を除く十八歳以上三十五歳未満の年代であり、全日本選手権大会を含め各種大会で活躍されている選手が揃うところです。

試合は昨年同様、なかなか一本を奪うことができず、引き分けばかりの試合となりました。チームに貢献しなければと思うほど、焦りが生じて自分の試合展開となりません。団体戦でポイントゲッターになるため、いかに試合を運ぶのか、先をかけて前へ前へ行くだけでは機会は生まれてこないことを実感しました。実践で頂いた大切な課題を次に繋げていきたいと思っています。

副将　近藤夏子選手（名西支部）

前日から当日まで気持もまとまっており、今日の自分のテーマもはっきりとしていた。あとは集中して自分の今までやってきたことを出すのみ！そう思い試合に臨んだ。チームや監督、応援団にも恵まれ、心は常に穏やかで安心して試合に臨むことができた。

先鋒田中さんの見事な二本勝ちで始まった一回戦。続く二人の試合運びに勇気をもらい、いよいよ私の番。チームや監督、二階から聞こえる声援が力になり、引き分けではあったが自分のペースで試合が運べた。さらに二回戦。私に勇気と感動を与えてくれた前三人の選手の方々や、「私に同しなさい！」とばかりにいつも安心させてくれる竹内先生のために何とかできないものか、その思いがいつのまにか「よし一本！」という強い思いにつながり、自分の持ち味を生かしたメンで一本を取ることができた。それまでの大会や練習試合でなかなか一本を取れずにいただけに、本当にうれしい、心に残る一本となった。

三回戦では敗れてしまい、おしい結果となってしまったが、チームワークも良く、周りの方々の支えがとてもありがたかった。大会に向けて稽古場を貸していただいた名西支部の先生方、たくさん稽古をつけてくださった連盟の先生方、チームの皆さん、遠征にもつれていただき、食事の面でもかなりのご配慮をしていただいた平野監督、応援してくださったすべての皆様、ありがとうございました。

大将　竹内佳代子選手（鳴門支部）

私にとっては三回目の出場となる。日本武道館で試合ができること、あこがれの選手の方と対戦できたり試合を拝見できること、そして五十代になってもまだ頑張れるという刺激をいただけること。この大会にはたくさんの魅力がある。また、徳島県のさまざまな世代の選手とチームを組んで試合に臨めるのも楽しい。今年も出場することができたことに、本当に感謝している。

試合は、今年も三回戦まで進むことができ、二年連続ベスト十六までいくことができた。しかし、あと一本が取れずに今年も大将戦で敗れてしまい、そのことがとても悔しい。私が二本とって代表戦になる場面。試合開始早々コテが決まったにもかかわらず、あと一本がどうしても取れなかった。落ち着いて試合には臨めていたと思うが、一本の重さを身にしみて感じる。それとともに、監督や選手のみなさんの応援に答えることができなかったことをとても残念に思う。

来年度も出場するチャンスをいただけたので、この悔しさを忘れずに、一本のチャンスを確実にものにできるよう、自分にできることを頑張っていくつもりだ。

今後ともご指導よろしくお願いします。

剣道

徳島がベスト16

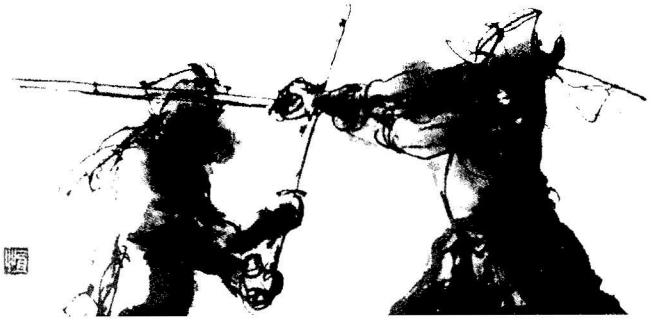
全日本都道府県女子大会

剣道の全日本都道府県対抗女子優勝大会は16日、東京・日本武道館で行われた。徳島は1回戦で群馬、2回戦で三重をいずれも1―0で下したが、3回戦で長野に1―1で本数負けし、8強入りを逃した。茨城が決勝で岐阜に3―2で競り勝ち、初優勝を果たした。

▽1回戦
徳島 1―0 群馬
○田中 メン 櫻井
栗野 引き分け 岡本
平野 引き分け 菊池
近藤 引き分け 高橋
竹内 引き分け 根岸

▽2回戦
徳島 1―0 三重
田中 引き分け 伊藤
栗野 引き分け 坂口
平野 引き分け 西村
○近藤 メン 安達
竹内 引き分け 井上

▽3回戦
長野 1―1 徳島
（本数勝ち）
○坂本 メン 田中
南島 引き分け 栗野
滝浪 引き分け 平野
須坂 引き分け 近藤
臼井 一コテ 竹内○



管内矯正職員武道大会

前田秀一

平成二十四年四月二十七日、管内矯正職員武道大会が、愛媛県立武道館において開催されました。本大会は、毎年六月に東京拘置所において行われる全国大会の予選会であり、我々矯正職員は、本大会出場を目指し、日々武道訓練に励んでおります。

試合結果

第一試合

徳島刑　高松刑
玉井　×　松永
金野　×　寺尾
住友　|　コ　峰本
高橋　ド　×　メ　吉田
前田　×　小野
0（1）（2）1

第二試合

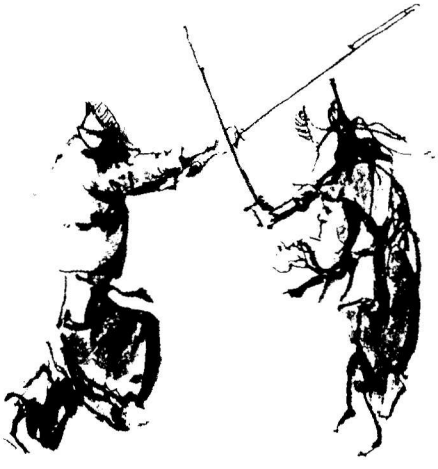
徳島刑　高知刑
玉井　×　森岡
金野　×　高橋
住友　ドド　|　岡部
高橋　|　メメ　吉田
前田　×　川島
1（2）（2）1

第三試合

徳島刑　松山刑
玉井　メ　×　ド　白石
金野　|　メ　山本
住友　|　メコ　岡部
高橋　|　コ　川上
前田　|　メ　片上
0（1）（6）4

結果は一分二敗で四位でした。なかなか優勝には手が届かず、悔しい思いをしております。

近年若い職員も入ってきているものの現状の稽古だけで満足しており実力のなさを痛感する試合結果でありました。今後は、選手一人一人が本大会で優勝するんだという強い意志を持ち取り組んでいかなければならないと思います。今後とも、先生方のご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願い致します。



選抜大会に出場して

富岡東高校三年
山本　悠

平成二十三年二十七日から二日間、愛知県春日井市で第二十一回全国選抜剣道大会が開催されました。県予選で優勝し、選抜大会出場が決まると「全国制覇」を目標に、毎日の厳しい練習はもちろんのこと、数々の県外遠征にも参加し、技術の向上とともに選抜大会へとチーム全員で意識を高めていきました。

そして、迎えた選抜大会。やはり全国大会独特の雰囲気に緊張しましたが、皆で声を掛け合うことでリラックスし、円陣を組み気合いを入れると、とてもいい状態で試合に臨むことができました。予選リーグ一回戦は、三重県津西高校。先鋒、次鋒と二本勝ちすると、続く中堅、副将、大将も勝利し五―〇と快勝でいいスタートを切ることができました。二回戦は、熊本県八代百合高校。力強さと勢いがあり、やはり九州の強豪といえるチームだと思いました。先鋒の私は、勝ってチームの流れを掴みたいと思いましたが、相手の粘り強さにおされ、引き分けでした。次鋒の松本も懸命に攻めるが引き分け。続く中堅の湯浅が見事な一本勝ちで勝利し、私たちが一歩リードしました。しかし、副将の藤本で返されてしまい一―一の本数負けで大将戦となりました。「思い切って勝負！」と声を掛ける私たち。それに応えるように果敢に攻める田中。激しい打ち合いが続きましたが、終了間際に二本目を取られて負けてしまいました。予選リーグ敗退という悔しい結果に皆涙を流しました。しかし、全国で勝つことの難しさ、チームとして戦うことの必要性、学んだ事がたくさんありました。今振り返ってみると、この選抜大会での負けがその後のチームの教訓となり、夏のインターハイ入賞へとつながったと思います。

高校生活は、本当にあっという間でしたが、仲間と共に「全国制覇」という一つの目標に向かって剣道に励み続けた三年間は一生の思い出です。うれしさも悔しさも共にし、支え励まし合ってきた仲間は、これからもずっと大切な存在です。目標には届きませんでしたが、チーム一丸となって戦うことや勝つために努力してきたことは、私の今後の生きる糧になっていくはずです。また、剣道を通して多くの事を学び、たくさんの剣友もできました。剣道がとても楽しく、剣道をしてよかったなと改めて感じることのできた三年間でした。伊藤先生はじめ、熱心にご指導してくださった先生方。いつも支えてくれた両親、そして仲間には本当に心から感謝しています。これからも感謝の気持ちを胸に剣道を続け、更なる高みを目指して努力をしようと思います。

第21回 選 抜 大 会 予選リーグ成績表

2012. 3. 27 春日井市総合体育館

女子 Pブロック

学校名	八代白百合高	津西高	富岡東高	勝数	勝者数	勝本数	順位
八代白百合高		4／4	4／2	2	6	8	1
津西高	0／0		0／0	0	0	0	3
富岡東高	1／1	8／5		1	6	9	2

■6－5

校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	結果
津西高	秋田	小西	矢賀	中村	伊藤	△
0／0			▲			
8／5	㊙メ	㊐メ	㊙	㊙ド	㊙	
富岡東高	山本	中村	湯浅	松本	田中	○
試合時間	4′55″	2′27″	5′00″	2′07″	5′00″	

■6－10

校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	結果
八代白百合高	塩野(仁)	福屋	丸山	福川	田山	○
4／2	▲	×	▲	㊙コ▲	㊐コ	
1／1	×	×	㊙	▲		
富岡東高	山本	松本	湯浅	藤本	田中	△
試合時間	5′00″	5′00″	5′00″	4′42″	4′55″	

■6－15

校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	結果
八代白百合高	塩野(仁)	塩野(あ)	丸山	福川	田山	○
4／4	㊙	㊙	㊙	㊙▲	×	
0／0						
津西高	秋田	松下	矢賀	中村	伊藤	△
試合時間	5′00″	5′00″	5′00″	5′00″	5′00″	

平成二十四年度 全国高校総体剣道競技に出場して

城北高校三年
黒木景太

私たち剣道部男子は、七月に新潟市で開催されました第五十九回全国高等学校総合体育大会に出場することができました。

県総体では、選手一人一人が普段練習してきた事を全て出し切り、部員・保護者・先生の思いが一つにまとまり優勝することができました。

また、二週間後に開催された四国高校剣道選手権大会においても、チームの持ち味である粘り強さを発揮して三位に入賞することができ、インターハイに向けて大きな自信となりました。

本校剣道部男子が全国大会に出場するのは、インターハイと全国選抜大会併せて四回目となりますが、過去の大会において未だ勝ったことがなく、全国大会での初勝利を目指して、日々の厳しい稽古や県外遠征に取り組みました。

試合当日、初戦は福島県代表の白河旭高校と試合をしました。選手一人一人がプレッシャーに押しつぶされることなく自分たちのペースで試合をすることができ、三対一で、全国大会での初勝利をあげることができました。続く二試合目では、本年度の全国選抜大会三位で全国玉龍旗大会の優勝校でもある長崎県の島原高校と対戦しました。強豪校だけあって自分たちのペースで試合をすることが出来ず四対一で負けてしまいましたが、試合内容としては、今まで稽古してきたことを生かすことができ、悔いはありません。

この度のインターハイ出場を通して、改めて先生や保護者、部員達に対する感謝の気持ちを持つことができました。インターハイという大舞台で試合をすることが出来、高校生活最高の思い出をつくることができました。

このような思い出を作れたのも、前監督の西谷先生をはじめ福多先生・川原先生の熱心なご指導や温かく支援していただいた保護者の皆さんのお陰であり、厳しい稽古を励まし合いながら乗り越え、勝ったときの喜びや負けたときの悔しさを共有してきた仲間達のお陰だと思います。本当にありがとうございました。心から感謝いたします。試合結果の詳細につきましては次のとおりです。

男子団体戦　予選リーグ

第一試合

城北（徳島）	佐賀	西田	竹内	杉本	黒木	3
	メ		メ		コ	3
白河旭（福島）		メ				1
	大原	吉田	五十嵐	真田	安西	1

第二試合

城北（徳島）	佐賀	西田	竹内	杉本	黒木	1
					メ	1
島原（長崎）	コ	メ	ココ	メメ		6
	上村	本多	山田	藤野	渡部	4

男子個人戦

第一回戦

竹内直生　メメ　宮本（水戸葵陵）

第二回戦

竹内直生　メ　近重（市立沼田）

第三回戦

竹内直生　メ　菊山（阿蘇）

（ベスト二十）

インターハイに出場して

富岡東高校三年
湯浅　絵里加

平成二十四年八月六日から四日間、新潟市総合スポーツセンターで第五十九回全国高等学校総合体育大会が行われました。春の選抜大会では予選リーグを上がることができずに悔しい思いをしましたが、それをバネにしてインターハイまでの毎日の稽古に一生懸命励んできました。途中、自分の思うような剣道ができなかったり、チームがなかなかまとまらなかったりと悩み苦しんだ時期もありました。

迎えた全国大会。私たちの目標は「予選リーグ突破」でした。私たち三年生にとっては最後の大会でもあり、今まで一緒に頑張ってきた仲間と共に戦える最後の大会でもありました。予選リーグの相手は福井県代表の敦賀高校と神奈川県代表の東海大相模高校でした。初戦の敦賀高校戦は先鋒から大将まで落ち着いて自分たちの剣道ができ五―〇で勝ちました。続く二回戦は東海大相模高校。先鋒引き分け。次鋒の二年生の山本がメンを決めて一本勝ち。大将引き分け。予選リーグは二勝し、目標を達成することができました。次は決勝トーナメント一回戦。大阪府代表の桜宮高校でした。会場にも慣れてきて、気付いた頃には緊張することなくみんな落ち着いてリラックスしていました。先鋒の松本が二本勝ちし良い流れで試合をすることができました。次鋒・中堅が引き分け。副将が一本勝ちし大将引き分けて二―〇で勝利しました。そして決勝トーナメント二回戦は、茨城県代表の守谷高校でした。前回優勝している強豪校でした。スピードや攻めの強さなど手強い相手でした。先鋒・次鋒と負け、中堅・副将引き分け、大将負けと三―〇で負けてしまいました。やはり強豪校ということで、技術面だけでなく精神面も強かったです。

結果は目標の予選リーグ突破を越え、ベスト八でした。私たちの最後の夏が終わりました。昨年八月の先輩達の引退後、私は、初めてキャプテンを任されました。どうやってチームをまとめればいいのか分からず、苦しみ泣いたこともありました。チームワークがとれず、バラバラな時もありました。でも、十六人の仲間に助けられながら苦しさを乗り越え、インターハイという最高の舞台で戦うことができました。三年間、たくさんの人に見守られ、支えられながら仲間と共に流した汗や涙は一生大事にしたいです。三年間支えてくださった先生、両親、仲間。本当にありがとうございました。

◆女子　団体　　【新潟市東総合スポーツセンター】

予選リーグAブロック　　08 月 07 日

富岡東(徳島)					5	―	0			敦賀(福井)		
○	松本	②	ツ		―――					河瀬	②	
○	山本（響）	②	メ		―――					鈴木	②	
○	田中	③	メ		―――					番場	②	
○	山本（悠）	③	ド	コ	―――					土手	②	
○	湯浅	③	メ	メ	―――					橋本	②	

富岡東(徳島)					2	―	0			東海大相模(神奈川)		
△	松本	②			―――					佐々木	③	△
○	山本（響）	②	メ		―――					豊川	③	
△	田中	③			―――					石黒	③	△
○	山本（悠）	③	メ		―――					山口	③	
△	湯浅	③			―――					棚本	③	△

◆女子　団体　　【新潟市東総合スポーツセンター】

決勝トーナメント1回戦　　08 月 09 日

富岡東(徳島)					2	―	0			桜宮(大阪)		
○	松本	②	メ	メ	―――					山上	③	
△	山本（響）	②			―――					斉藤	②	△
△	田中	③			―――					田中	③	△
○	山本（悠）	③	コ		―――					今	②	
△	湯浅	③	メ		―――		メ			北山	③	△

◆女子　団体　　【新潟市東総合スポーツセンター】

準々決勝　　08 月 09 日

守谷(茨城)					3	―	0	富岡東(徳島)		
○	後藤	②	メ		―――			松本	②	
○	比佐	②	メ		―――			山本（響）	②	
△	吉村	②			―――			田中	③	△
△	高橋	②	メ		―――	メ		山本（悠）	③	△
○	大亀	②	メ	メ	―――			湯浅	③	

◆女子　個人　　【新潟市東総合スポーツセンター】

1回戦　　08 月 08 日

図末　杏菜	②	メ		―			松本　美紗樹	②
左沢(山形)							富岡東(徳島)	

◆女子　個人　　【新潟市東総合スポーツセンター】

2回戦　　08 月 08 日

山本　愛	②	メ		―			田中　理称	③
磐田西(静岡)							富岡東(徳島)	

第四十二回全国中学剣道大会に参加して

那賀川中学校
監督　宮　武　美　穂

那賀川中学校に赴任して以来、四年間剣道部の顧問をさせていただき、一年目は熊本へ、二年目は島根へ、三年目は兵庫へ、そして今年は男女そろって埼玉全中へ行かせていただきました。剣道を求めて集まった生徒たちは夢に向かって日々練習に取り組み、多くの方に支えられ全国出場への歩みを進めていくのを一喜一憂しながら感じあえたのは、監督妙利につきる思いです。

同郷の仲間たちの気持ちと感謝を胸に、平成二十四年八月十八日～二十日、埼玉県越谷市立総合体育館においての第四十二回全国中学校剣道大会に臨みました。

「感動　躍動　ここにあり　関東平野の大舞台」の大会スローガンのもと、全国各地から集まってきた剣士たちが、自分の持てる最大限の力を発揮し、白熱した戦いを繰り広げました。

全中での戦績をたどると、女子予選リーグ一試合目は宮城県代表の塩竈第一中学校。先鋒が先手を取られるも、中堅が二本取り返し、大将までつないで、勝利を収めることができました。

二試合目は新潟県代表の燕中学校。数年来交流があり、練習試合の相手をしていただき、県外遠征でもいつもお世話になっている学校です。きびきびとした態度、大きな返事、試合に臨む心構え、迫力ある攻撃的な試合展開、すべてが中学生とは思えない立ち振る舞いで、私自身、身が引き締まる思いになり、毎回刺激をいただいていました。謙虚でひたむきに剣道に向かう彼女たちは、生徒たちにとっても憧れの存在であり目標でした。試合の組み合わせが発表になったとき、その燕中学校と同じリーグであることが分かり、正直驚きました。ついこの前に練習試合をしたばかり、私も生徒もドキドキ、ワクワクでした。胸を借りる思いで、臨ませていただきました。何度もビデオを見て研究し、あれやこれやと対策を考え、いろんなパターンを予想しながら練習を繰り返しました。そのような練習の中でさらにチームの団結力が強まったような気がします。

「常に強気で、気持ちで負けない。先を取ろう。絶対下がらない。足を動かして積極的に攻める剣道をしよう。」など声を掛け合い試合に臨みました。結果は、先鋒から大将まで引き分け。勝者数で、予選リーグ二位となり、決勝トーナメントへは進出できませんでしたが、主将を中心に精一杯戦った生徒たちを誇りに思います。

縁深き燕中学校と練習試合ではなく、本戦で戦い合えたことは結果云々より清々しい気持ちがしました。全国の舞台に立つことにより、技術面だけではなく、精神や生活を律することが勝負につながることを他校の生徒との交流や姿からから学べたことは、生徒たちにとって何より良き体験になったと思います。

まだまだ指導者として未熟ではありますが、奥深い剣道を通じて生徒と共に汗を流し、日々精進していきたいと思っています。

今後とも、ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

男子予選結果

N 組	那賀川中（徳島）	上宮中（大阪）	北茂安中（佐賀）	得点	勝者数	勝本数	順位
那賀川中（徳島）		0/0	△ 1/0	0.5	0	1	3
上宮中（大阪）	0/0		○ 4/3	1.5	3	4	1
北茂安中（佐賀）	○ 5/4	△ 1/1		1	5	6	2

予選リーグ　N組　第1試合

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	対戦結果	代表
那賀川中（徳島）	坪井	湯淺	庄野	濱田	松本	0/0	
上宮中（大阪）	小田	大西	酒本	堀内	藤嶋	0/0	

予選リーグ　N組　第2試合

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	対戦結果	代表
上宮中（大阪）	小田	大西	酒本	堀内	藤嶋	○ 4/3	
	メ	メ メ		メ			
北茂安中（佐賀）	田中	柿原	青柳	草田	田原	△ 1/1	
					メ		

予選リーグ　N組　第3試合

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	対戦結果	代表
北茂安中（佐賀）	田中	柿原	青柳	草田	田原	○ 5/4	
	ド	メ コ		メ	ド		
那賀川中（徳島）	坪井	湯淺	庄野	濱田	松本	△ 1/0	
		メ					

女子予選結果

P 組	那賀川中（徳島）	塩竈一中（宮城）	燕中（新潟）	得点	勝者数	勝本数	順位
那賀川中（徳島）		○ 2/1	0/0	1.5	1	2	2
塩竈一中（宮城）	△ 1/1		△ 0/0	0	1	1	3
燕中（新潟）	0/0	○ 7/4		1.5	4	7	1

予選リーグ　P組　第1試合

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	対戦結果	代表
那賀川中（徳島）	清水	竹原	長谷川	埴井	野村	○ 2/1	
			ド コ				
塩竈一中（宮城）	小林	奥田	中野	鈴木	加藤	△ 1/1	
	メ						

予選リーグ　P組　第2試合

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	対戦結果	代表
塩竈一中（宮城）	小林	奥田	鈴木	鈴木	加藤	△ 0/0	
燕中（新潟）	河嶋	小川	近藤	長谷川	村山	○ 7/4	
	ド メ	ド メ	メ メ		メ		

予選リーグ　P組　第3試合

学校名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	対戦結果	代表
燕中（新潟）	河嶋	小川	近藤	長谷川	村山	0/0	
那賀川中（徳島）	清水	西岡	長谷川	埴井	野村	0/0	

平成二十四年度 第五十四回全国教職員 剣道大会に出場して

福多雅英

八月十二日に山形市総合スポーツセンターに於いて、平成二十四年度第五十四回全国教職員剣道大会が開催されました。試合は女子個人戦、幼稚園・義務教育の部個人戦、高校・大学・教育委員会の部の個人戦と団体戦があり、本県からも全ての部にエントリーし、試合をしました。団体戦は、先鋒・次鋒・中堅は年齢制限はありませんが、副将は四十歳以上・大将は五十歳以上で、チームには必ず幼稚園・義務教育の教員を含むこととなっています。

本大会は、日頃学校教育に携わる者が、生徒達と共に汗を流して剣道の修練に励んでいる成果を試す機会であります。「師弟同行」の日々の取り組みのなかで、試行錯誤しながら指導者としての剣道のあり方を見つめ直す機会でもあります。剣道は「実践学」であるといわれています。稽古や試合を通して学んだことを生徒達に伝えて行きたいと考えています。

試合については、団体戦、一回戦で青森県と対戦し、一対一の勝ち数・勝本数ともに並んだため代表戦となりました。大会ルールで本戦で引き分だった対戦から抽選で代表戦の対戦を決めることになっており、抽選の結果、福多博史先生が出場し、延長戦の末に面をとり辛勝することが出来ました。二回戦は、近年この大会で優勝一回・準優勝二回の強豪チームである茨城県と対戦しました。それぞれが粘り強い試合を展開しましたが、〇対二で敗退しました。

個人戦は、女子の部に前田先生が出場、一回戦で前年度優勝者と対戦し、互角の攻防を繰り広げましたが、延長戦の末に惜敗しました。幼・義務教育の部には林先生が出場しましたが、一回戦で敗退しました。高・大・教育委員会の部には、岩原先生が出場、一回戦を見事に勝ち上がりましたが、二回戦で敗退しました。

団体戦において上位入賞することが本県学校剣道連盟の悲願でありますが、その為には、多忙な職務の中でも時間をつくり、稽古に励んで行くことが大切です。その取り組みによって本県学校剣道のレベルアップが図られるのではないかと考えられます。

試合結果につきましては次の通りです。

団体戦出場者

先鋒　林　義真（木頭中学校）
次鋒　福多博史（阿南第一中学校）
中堅　西山伸二（小松島中学校）
副将　冨浦廣志（日和佐中学校）
大将　福多雅英（城北高校）

一回戦

	先	次	中	副	大	勝数	本数	代表
徳島	林	福多博	西山	冨浦	福多雅			福多博
	×	×	×	コ	コ	1	2	メ
青森	×	×	×	メ ド		1	2	
	柳谷	木村	藤川	鹿内	川代			木村

二回戦

	先	次	中	副	大	勝数	本数
徳島	林	福多博	西山	冨浦	福多雅		
	メ ×	×			×	0	1
茨城	メ ×	×	メ	メ コ		2	4
	林	雨谷	細島	鍋山	西野		

代表戦

福多博 メ ― 木村

個人戦

女子の部

一回戦 前田奈々枝（山瀬小学校）
― メ 中谷（和歌山）

幼・義務教育の部

一回戦 林 義真（木頭中学校）
― コ 八巻（福島）

高・大・教育委員会の部

一回戦 岩原靖人（阿南工業高校）
メコ ― メ 稲毛（北海道）

二回戦 岩原靖人（阿南工業高校）
― メ 鹿野（山梨）

良さを引き出す

阿南高専　湯城豊勝

試合に臨んでは、選手・監督ともそれぞれに期するものがあるため、それなりに緊張するものである。またチームや状態によっては、ハラハラドキドキしながらも是非とも勝ちたい時、また自分たちの力を精一杯出せればよいと考える時もある。

第十一回全国高専女子剣道大会は、平成二十四年八月二十五日（土）、米子市の鳥取県武道館で行われた。ここ数年はチーム力が充実していたため、絶えず目標はメダル、あわよくば金色を目指していたが今回はかなり状況が違っていた。唯一考えられる勝ちパターンは先行逃げ切りしかないと想定されたが、そのような中で各選手の良さを挙げると次の通りである。先鋒・増金の持ち味はコテ・メンの連続技、中堅・槌井は高専入学後に剣道を始めた二年生で試合経験が少ないものの、とにかく声が大きくて思い切りが良い。大将・横手は練習不足で体の切れが悪く、得意の出ゴテに頼らざるを得ないため、出発前日の練習は切り返しと出ゴテだけで終わった。

このような状態で臨んだ初戦の相手はチーム力の高い徳山高専。先鋒には「一本取れ、逆に一本取られたなら無理してでも取り返せ」の指示。一年生同士で見事な試合を展開したが、気をつけるべきであったメンに飛び込むところをコテに押さえられた。その後はドンドン攻めこんだが巧みに隙をつかれて二本負けになったが仕方がない。相手は強いはずである、翌日の個人戦で優勝した強者であった。さて、中堅に対しては「大きな声を出して、メンだけでいいから絶えず攻め続けよ」と言ったら忠実に実行、相手も面喰らったのか引き分け。三級が二段と堂々と戦った試合であった。大将も執拗にコテを狙う戦法で引き分け。銀メダルのチームを相手によく戦ったものだ。次の近畿大学高専戦では、先鋒は初戦の反省を活かしてコテ・メンの連打で勝利。中堅は不戦勝ち、大将は出ゴテ一本で快勝した。

今回、あわよくばの望みはあったものの、無欲でリラックスしての出場であった。監督としてはほぼ描いた通りの試合展開になり、選手個々のそれぞれの良い所が出せたのでかなり満足できた。そして何よりも、私自身がこの試合を通じて教育の神髄を教わった感じがしたものである。教育という言葉は、英語で「エデュケイション」といわれるが、元々「エデュケ」とはラテン語の「引き出す」という意味である。教えるという〝上から目線〟ではなく、その人間自身の持つ良さを引き出すことが出来て私自身が非常に勉強になった大会でもあった。

現在、社会ではスポーツ界における指導時の体罰が問題になっている。選手の良さを引き出すためには、厳しい練習、叱咤激励、日々の練習からその気にさせる。試合に臨んで適切なアドバイスをする等、色々組み合わせての方法になるであろう。私もまだまだ「日に新たに、日々に新たに」の気持ちで精進したいと思っている。

第七回全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会

徳島少年剣道教室
山室和士

平成二十四年九月十六日、舞洲アリーナで全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会が行われ、徳島県代表として出場させていただきました。この大会のメンバーとして出場したい一心で日々の稽古、強化訓練に一生懸命取り組んできました。春からの強化訓練では、毎回、試合稽古を重ね、みんな必死に張りつめた雰囲気のなか臨んでいました。其の内容、結果により十名までしぼり、夏には、兵庫や香川へ遠征に行きました。稽古は厳しく大変でしたが、友達もできて楽しい思い出がたくさんできました。みんなで、ごはんを食べたり、お風呂に入ったり、トランプをしたり、こわい話をしたりして、とても楽しかったです。いつもと違うところも見えて、さらに信頼関係が深まり、チームワークも良くなっていったと思います。

香川遠征では、メンバーも決まり、それぞれの役割を考えながら試合をしました。自分は大将として、絶対に負けられない、という気持ちでいっぱいでした。

しかし、考えすぎたり、焦ったりして、自分の体が思うように動かず、悩んだ時もありました。そんな時は、ただひたすら切り返しと掛かり稽古を続け、しっかり肩と足を動かすようにしました。そして頭の中で、自分が試合をしているイメージを何度も繰り返しました。あと、気を付けたことは、規則正しい生活、好き嫌いせずよく食べる、遊んでいてケガをしないことです。その結果、万全のコンディションで大会当日を迎えることができました。

試合会場に向かうバスの中では、六年生として、小学生剣道最後の全国大会に出場させて頂いたことに感謝し、ベストを尽くして悔いのない試合をしたいという気持ちしかありませんでした。

予選リーグ一回戦は、対東京。一対二で大将戦となり、自分が二本勝ちをすると、引き分けにもっていけるところでしたが、相手も無理には出てこないので結局取ることができず、引き分けでした。最後まであきらめずに攻めたけど、勝つことができず、すごく悔しかったです。二回戦は、対宮城。○対二で大将戦となり、すでに勝敗は決まっていましたが、大将として団体戦の最後を締めくくるため「絶対勝つぞ」という強い気持ちで臨みました。そして、イメージしていた、真っ直ぐ打った面が一本となり、なんとか団体戦の最後を締めることができました。

残念ながら、結果は、予選リーグ敗退でしたが、戦った二試合の内容は僅差でした。しかし、その僅差が勝敗を分けます。何が、その僅差をつくり、どうすればそこを埋められるのかという課題もできましたが、強豪チームと剣を交えられたことや、全国大会という舞台で試合ができたことは、とても良い経験になりました。最後に、指導して下さった先生方、協力して下さった保護

者の方々、本当にありがとうございました。これからも、大きな目標を持って、努力していきますので、ご指導よろしくお願い致します。

〈予選リーグ結果〉

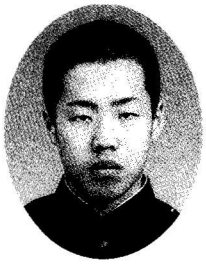
	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将		
徳島	熊橋	矢野	大城	前田	山室		1
		⊗⊗	╳		╳		2
	㊐⊗	⊗		⊗			4
東京	藤田	小松	原	井手	楠本		2

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将		
徳島	熊橋	矢野	大城	前田	山室		1
				⊗	⊗反		3
	⊗⊗	╳	不戦勝⊗	╳⊗	▲▲		4
宮城	庄子	相澤	木村	横山	岩渕		2

徳島	監督	生田　浩章				徳島少年剣道教室
	先鋒	熊橋　知晃	男	川内北小学校	5年	徳島少年剣道教室
	次鋒	矢野　郁	男	鳴門西小学校	6年	鳴門市光武館
	中堅	大城　明裕奈	女	今津小学校	6年	徳島至誠館
	副将	前田　龍志	男	鷲敷小学校	6年	振武館
	大将	山室　和士	男	北島南小学校	6年	徳島少年剣道教室

第七回全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会に出場して

阿南第一中学校三年
田中　皓己



平成二十四年九月十六日、大阪府舞洲アリーナにおいて第七回全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会が開催されました。僕は、中学の部の徳島県チームの大将として出場させて頂き、責任の重大さを感じましたが「絶対に勝つ」という強い気持ちで試合に臨みました。本大会には、小学校六年生の時にも大将として出場しており、二回目の出場となりました。

そして、大会前日は、大阪市立住吉第一中学校で各県代表チームが集まり徳島県代表チーム監督の福多先生のご指導のもと、練習試合を行いました。次の日の試合に向けて気持ちを高めることができました。

いよいよ大会当日。予選リーグ初戦の千葉県との対戦では、一本負けで大将戦。一本先取するも取り返され引き分けに終わりました。初戦は一対〇で勝利することができませんでした。続く鹿児島県との対戦では、気持ちを切り替えてチーム一丸となり、二対一で勝利することができましたが結果的には一勝一敗で決勝トーナメントに進むことはできませんでした。しかし僕は、この県代表メンバーの先鋒「文理中の玉田選手」、次鋒「県立川島中の上田選手」、中堅「那賀川中の松本選手」、副将「徳島中の南谷選手」以上の四名と全国の舞台に立つことができ、とても心に残った大会になりました。特に、男子の二名とは小学校の時にも一緒に本大会に出場しており、とても心強い仲間でした。

そして最後に、これまでご指導していただいた徳島至誠館の中山啓男館長先生、中山繁輝副館長先生、阿南第一中学校の監督である福多博史先生、そしてご指導していただいた多くの先生方、保護者の皆様本当にお世話になりました。また、高校へ進学しても全国大会に出場し活躍できるよう、努力していきたいです。

第五十五回全日本実業団剣道大会報告

リスペクト剣道部
目﨑明宏

平成二十四年九月十七日、第五十五回全日本実業団大会が日本武道館で開催されました。全国から三二五チームが参加し、今年も熱戦を繰り広げました。私にとって全国大会は少年の時に、出場して以来、約三十年ぶりです。昔の記憶がよみがえり、日本武道館で闘志がみなぎってきました。

目標はベスト八入りです。

初戦はシードでした。

二回戦は、UDトラックスとの対戦です。先鋒から大将まですべて二本勝ちの圧勝でした。先鋒は、はじめの合図と同時に手元があがる所を小手打ち、素早く先取。二本目も出ばな面を決め勝利。次鋒・久保選手は先鋒と同様出ばな面を先取し、相手が焦ってせた所に小手を決め勝利。中堅は、落ち着いて相手をさばき華麗に面を決め二本勝ち。副将・目﨑は、相手が手元を上げた所を見逃さず、出小手を決め先取。さらに、相手が焦り取りにきた所、小手を決め二本勝ち。大将は、落ち着きと風格で相手を圧倒し、難なくと面を決め、あっさり二本勝ちを収めた。チームとして五対〇で勝利となり、相手は全国屈指の実力チームであったため、初戦突破は次の試合に自信と勢いをつける試合となりました。

三回戦は、日本生命（本店）です。若いチームで勢いがあるチームと対戦しました。先鋒は、少し相手の気迫に押されてしまい、隙をつかれ一本先取され、時間がなく一本負。次鋒は、チームの流れが少し悪かったが、勢いのある面で先取し、流れを引き寄せました。二本目も勢いは止まらず、すぐに面を取り勝利。中堅は、この流れに続き、気迫のある試合を展開し、引き分け。副将は、双方緊迫した空気の中、それを見事に打ち破る出ばな小手を決め、一本勝ち。勝負のかかる大将戦はチーム全員が心一つに見守りました。気迫充分の試合内容で引き分けとなり、チーム一丸の勝利となりました。

四回戦は九州電力（本店）との対戦です。先鋒は僅差で相手に取られてしまい一本負け。次鋒は全日本選手権にベスト八に入ったこともある強豪選手と対戦したし、検討したものの面を決められ、二本負け。中堅は、均衡した試合になり、一本をとることができず、引き分け。副将は、合い面を先に当たったと思ったが、判定は相手にあがり一本負け。大将も先取はしたものの勝ちきることができず引き分けとなりチームとしては惜敗。

文字通り、もう一歩のところで勝利に届きませんでした。勝負の世界は時の運であります。実業団剣士として只、勝つための技術を習得するのでなく、剣道本質を見誤らせないようにし、剣道を通じて、仕事の事、私生活の事など相談し合えるアットホームなチーム作りにしていきたいと思います。

リスペクト剣道部は、徳島県剣道連盟の

先生方に、ご指導、ご鞭撻して頂き、運よく四回戦までいく事ができました。諸先生方には、感謝の気持ちでいっぱいです。今後はベスト八に目指し、稽古にはげみたいと思います。

【試合結果】

一回戦　シード

二回戦

リスペクト　五　対　〇　UDトタックス

三回戦

リスペクト　二　対　一　日本生命（本店）

四回戦

リスペクト　〇　対　四　九州電力（本店）

女性剣士としての全日本

警察支部　平野千尋

私は本大会三回目の出場となります。毎回、この会場で試合ができることに幸せを感じていますが、それだけではいけないといつも上位進出を胸に大会に臨んでいます。

過去二回は大学生であったため、稽古量にも自信があり、学内での調整もしっかりできていました。しかし、今回は社会人となって稽古量が半減、いや三割程度になったでしょうか、不安を抱えながら仕事と剣道の両立を誇りに思うとともに大変であることも実感できました。

大学卒業後、数ヶ月が経過した九月二日、兵庫県立武道館において第五十一回全日本女子剣道選手権大会が開催されました。ようやく自分の稽古ペースを保ちながら、量から質へと意識も変わり始めた頃でありました。

試合当日は最終調整がしっかりできて、何の不安もなく試合場に立つことができていました。一回戦は第十三試合目、相手は地元兵庫県代表の中園二佳選手です。

立ち上がりから積極果敢に攻め、終盤、コート際に追い込んだところを面に乗って一本勝ちを収めました。初戦としては、思い切ったいい試合ができ、気分良く二回戦に臨むことができました。

二回戦、相手は鹿児島県の西香織選手です。鹿屋体育大学時代には選手として大活躍された方ですが、結婚後復帰、主婦として国体をはじめ各種大会に出場されています。とてもうまさを感じる剣道であり、そのセンスも抜群です。私は若さを武器に先をとり切ることを胸に秘め試合に臨みました。

序盤から気に乗って先をとり、技をだしましたが、うまくかわされてしまいます。次の瞬間、乗ったと思った相小手面が逆に合わされ、面を先取されてしまいます。二本目、まだ時間はありますが、勢いだけではなかなか有効打とはなりません。終盤、面に飛び込んだところ、出小手を取られてしまいました。

試合を終え、自分の持ち味は先を利かした攻めから面、小手面中心の試合展開でしたが、これだけではいろんな選手には通用しないと感じました。これから、技の幅を広げ、攻めと技の関係についてもっともっと勉強していかなければならないと痛感しました。

また、試合は経験を積み、年齢を重ねることによって得られる部分がありますが、特に女性の場合は体力的な部分とのバランス感覚が大きいですから、挑戦できる時期を大切にしなければならないという意識も芽生えてきました。

来年は女性警察官として、新たな気持ちでこの場に立てることを目標に頑張っていこうと思っています。

瞬間善処

警察支部　平野誠司

平成二十四年九月十六日、宮崎武道館において第五十八回全日本東西対抗剣道大会が開催されました。今年は全剣連六十周年の記念大会であり、昭和十五年に第一回大会が行われた宮崎市で開催されたことはとても意義深いことであります。

私は西軍の十六将として、通算八回目の出場でありましたが、この剣道界最高峰の大会に出場し、今の自分の精一杯を表現する機会をいただけることに最高の幸せを感じております。推薦、そして選考して頂きました先生方に深く感謝申し上げます。

試合に臨んでは、ただ自己の心身を研ぎ澄ませ、来るべきその瞬間に最善を尽くすことだけに集中できました。

この大会の過去を振り返ってみても、この大舞台で勝ちたいという気持ちが強いときは、だいたい力を発揮することができていません。人間は勝負事において、誰でも勝ちたいものでありますが、この勝ちたい気持ちというのが打たれたくないという気持ちと表裏一体であり、自由自在の心身を奪ってしまいます。最近の試合では、この自由自在の心身を創造し、維持することをもっぱらの工夫とし、今回もその一点だけに集中しました。

立会から初立ちまでを回想してみますと、

「獅子の位から初太刀に至るまで、まさに真剣の心地。お互いに位詰めをし、打ち間を探り合う中、ここぞと間詰めをした瞬間、懸待は攻防に転じ、突いた剣先は突き垂を捉えた。」

二本目。

「前後左右、間の攻防を繰り返しながら相手の先も次第に強くなる。お互いが先を取り合う中で、相手の心へ表側から攻め入ると同時に小手に出ると相手は防御に転じて手元が浮いた。」

勝負あり。二分十三秒の戦いでありました。

剣道の長い歴史には、その時代の世相をうまく反映し、価値ある姿に展開してきた経緯がありますが、現代における「勝利至上主義」という切り札は、昭和から平成へと移りながら、求められる姿として、また武道である剣道としての価値観にズレが生じてきているように感じられます。

この意味において、剣道の醍醐味は真剣勝負の空間である事に違いなく、やるかやられるかという切羽詰まったところで自分はどうなるのか、という自己を対象とする剣道を展開しない限り、剣道は本質的に新しい時代に伝承していかないように思います。

当然、剣道は技術の向上なくして語ることはできませんが、相手を媒体にして自らの身体の中から新しい自分を発見するという行為を重ねていくことで、自他共に高めていくという相乗効果、これが共習、共導の空間であります。相和せずして一本を奪い合う剣道は「人作り」の理念からかけ離れるばかりです。

剣道は伝統文化として一つの価値観が存在します。それは現代において現代的な価値を持ったとき、その伝統がこの時代に展

開し、実生活にも活かされていくものであるといえるのであります。

今この時代に剣道が受け持つ価値観をお互いが熟慮して、今日も心に響く爽快な一本をめざし、交剣知愛を実践していきたいものです。

ぎふ清流国体　少年女子

監督　伊藤　奈津子

本年度、少年女子チームとしては、秋田国体以来五年ぶりの本国体出場を果たしました。選手の内訳としては、富岡東高校から五名、川島高校から一名、徳島文理高校から一名でした。そのうち富岡東の五選手が主力選手として本国体にも出場し、私も微力ながらも監督を務めました。徳島県にとっては、四国ブロックから一県の出場枠となってから国体出場は狭き門となっていましたが、インターハイでの好成績が生徒の自信につながったのか、ブロック予選では、全勝で優勝することができました。

本国体は、岐阜県の関市で開催されました。予選からおよそ一ヶ月ありましたが、二年生にとっては、その間に学校祭や就職試験等のために、十分に練習時間を確保するということが難しい状況にありました。また、初戦の相手が奇しくも開催県の岐阜県であることを知ったときは、選手も一様に落胆の表情を見せました。それでも、団結式や壮行会を経て、徳島県の代表であるという自覚をもち、未経験の国体で試合をすることに対する期待に胸を躍らせながら試合に臨みました。

国体チームの監督とは名ばかりですが、これまで選手たちを見てきた中で、のびのびと試合をしてもらいたいという気持ちがあり、本番ではいつも通りやるようにとだけ指示しました。気迫を全面に出し、攻撃力が持ち前のチームである一方、空回りし、試合が粗雑になる要素ももっていました。「いつも通りに」という言葉をどう受け取ったかはわかりませんが、果敢に攻めて最後まで戦う姿、そして仲間を応援する姿は高校生らしくさわやかであったと思います。また、成年男子の試合の応援を少年女子の選手が一生懸命する様子がとても印象に残っています。一進一退の攻防を見つめ、有効打突に歓喜することは、徳島県チームとして一体感をかんじられる国体ならではのことだと思います。今後、選手たちが年を経て、成年チームの一員として国体出場も目指してくれることを願ってやみません。

国体は、インターハイや選抜大会とは別の異なった雰囲気をもっています。勝敗が決するまでという試合は高校生にとっては過酷な面もあります。しかし、国体に関わるたくさんの方々の支えや励ましによって試合をすることができたということは、選手にとって大きな誇りになったにちがいありません。少子化に伴い、少年の剣道人口も年々減る傾向にあります。長期的多面的な選手の育成を図る中で、国体での活躍も一つの目標に置き、私たち指導者も取り組んでいきたいと考えています。

四国ブロック予選　少年女子の部　優勝

四国ブロック予選

順位	少年女子	
①	徳島	3勝0敗
②	愛媛	2勝1敗
③	高知	1勝2敗
④	香川	0勝3敗

山本・中村・田中・松本・湯浅・川原
徳島県が国体出場

【関市総合体育館】
09月30日

1回戦

岐阜					4	―	0		徳島		
○	乗田	②	メ	コ	―――				山本	③	
○	三好	③	コ		―――				中村	③	
○	藤田	③	メ		―――				田中	③	
△	高瀬	③	コ		―――	コ			松本	②	△
○	二宮	③	ド	コ	―――				湯浅	③	

第四十七回全日本居合道大会を振り返って

監督　岸田光博

日時　平成二十四年十月二十日
場所　静岡県　静岡県武道館
主催　㈶全日本剣道連盟

平成二十四年十月十九日

今大会の徳島県選手は前日、現地ホテルで集合する事として、私と、個人演武参加する徹心道場の吉岡・森七段と車で出発しました。私は大会会場に到着して、会場の下見をすませ、監督会議（午後四時から午後五時）に出席しました。監督会議は渡された大会プログラムにおける出場選手名、誤字脱字及び選手変更等の確認と、当日の刀の登録証の確認の場所や時間等でした。又、選手の試合が重なる時は監督代行（服装自由）でも許可しますとの事でした。監督会議終了後、ホテルチェックインして後、徳島の選手たちと合流しました。ホテルで選手集合して、打合せを行い、合同で夕食後、早く休養する事としました。

全日本居合道大会当日までの経過

徳島県の選手および監督は県下居合道大会（平成二十四年二月二十四日）での優秀賞者を対象とし、役員会議で選考し、全国大会に出席出来るか確認の上、五段・内海直弥、六段・一村昌和、七段・坂本憲一の三選手と監督岸田に決定しました。

選手の合同強化練習を翌月より毎週水曜日午後六時より九時まで、国府の徳島市農業環境改善センターで、教士七段福井・吉岡・森先生方の指導をいただき、強化練習を実施しました。（他の部員も自由参加可能として）全国大会に向けて、各道場での練習はもとより、毎週水曜日の強化練習、伝達講習会、四国四県稽古会、高知大会に参加出場し、本大会に向けて、今までに無い練習を行いました。実践に向けて、古流二本・指定三本を想定し、時間も測定し、実践練習を繰り返し、全国の諸先生方に見られても恥ずかしく無い徳島県の居合を心がけました。

平成二十四年十月二十日

大会当日早めに会場へ、八時開門前に到着し、受付を済ませました。選手は、練習場で練習してのち、開会式が始まりました。指定技の発表（全日本剣道連盟居合三・九・十本目）が有り、試合が始まりました。

《一回戦》

七段の出場は一番最初の一組目の一回戦で七段の坂本選手が出番となり、山梨県・島田選手と対戦し、結果二対一で勝ちました。本大会開始一番の試合で、監督の私も、非常に緊張しました。判定で勝った時は私も坂本選手以上に、「ほっと」しました。このまま勝ち進む事を願いました。

六段一回戦の十三組目に、六段・一村選手の試合があり、福井県の酒田選手との対戦でした。監督席で後より見ていて、練習してた時と感じが違い、緊張していましたが、相手も同じで、三対〇で勝ちました。坂本選手に続き一回戦突破で嬉しかったです。

五段一回戦の十四組目の五段・内海選手の試合は先の六段・一村選手の試合と前後しているため、吉岡先生に監督代行して頂きました。相手は岩手県の藤原選手で、三対〇で勝ちました。私は目標の全員一回戦突破して、徳島県が数年来低迷していた都道府県順位がよくなる事が出来る事を確信して、二回戦は気楽に望めました。

《二回戦》

七段・坂本選手は、奈良県の高橋選手との対戦で、結果は三対〇で勝ちました。

六段・一村選手は、長崎県の平選手との対戦で、結果は〇対三で負けましたが、後方で見ていて、五分五分の感じでした。

五段・内海選手は、鳥取県の大西選手との対戦で、結果は三対〇で勝ちました。

《三回戦》

七段・坂本選手は、広島県の大垣選手との対戦で、結果は一対二で負けました。どちらが勝ってもおかしくない試合でした。敗戦となりましたが、試合は徳島県の代表として恥ずかしく無い良い試合でした。五段・内海選手は、茨城県の磯口選手との対戦で、結果は三対〇で勝ちました。

《四回戦（準決勝戦）》

五段・内海選手は、福岡県井手選手との対戦で、結果は〇対三で負けました。

《都道府県団体戦順位及び個人成績》

徳島県は全国七位、七段・坂本選手は十四位、六段・一村選手は二十位、五段・内海選手は三位というすばらしい結果となりました。私が知る限り、ここ約十数年来であると思います。

閉会式後、四国の他三県の監督さんより、すごい、おめでとう等お声を頂きましたが、実感の無いまま成績表を頂き、急ぎ正門で選手と記念写真を取り、帰途に付きました。原田範士のよく言われる、「居合は試合して見なければわからない」を実感しました。

監督の所見報告

今回の大会は対戦相手にも恵まれ、試合結果は七位ですが、四国四県でも実力的には、下位に属する（前回全国大会優勝の愛媛県、高知大会の成績等）と思います。徳島居合道人数は少ないものの、原田先生の指導のもと、正確に適格に居合の稽古に励めば、全国で通用する事の証明であると確信しました。

六段・一村選手、七段・坂本選手は、三回戦（ベスト八）まで戦える実力があると思います。五段・内海選手は、京都大学在学中より居合道部で活躍され、社会人と成っても修業されています。徳島への転勤にともない、徳島県剣道連盟居合道部で福井先生等の指導の元、修業されています。

全国大会終了後、私と親しくしている、京都の藤井喜代子（教士七段）先生が、私の所へ来て、「岸田さん、私は内海を応援してました。三位ですね、大変嬉しい。内海にお祝いあげよう。」と声をかけていただきました。大学卒業後、藤井先生の道場生であったとの事でした。

近畿は大学の居合道部がたくさんあります。（同志社、立命館、京大、近大、京都産業大等）四国三県も徳島県にも、大学居合道部がありません。今、近畿の大学は盛んで、高知、香川、宇和島各大会は、貸切バスで参加していて、初段から二段までは好成績です。

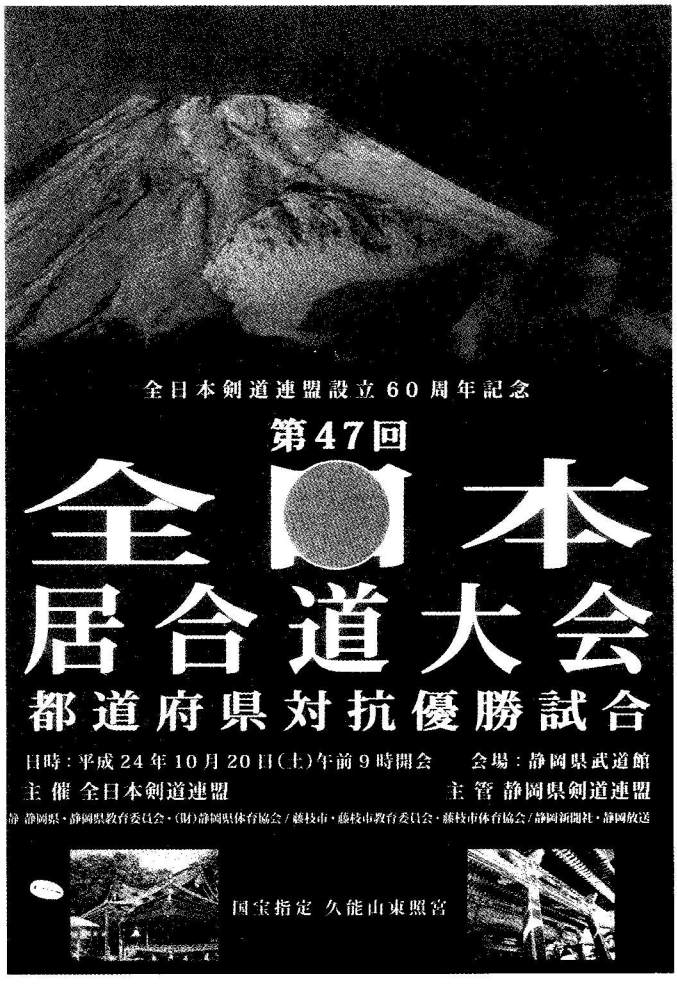
徳島県の大学も、居合道同好会等ができないかなと思います。良い情報をお願いします。

おわりに

今回、開催県の静岡が優勝し、二位は福岡県で、新潟県が三位でした。次回開催の県は全国大会に向けて、猛烈な準備をしていると思われます。徳島県の居合道人数又取り組みを考えると、これから頑張らねばという思いで一杯です。又、今回監督をさせていただき、監督も忙しく嬉しいかぎりでした。大会会場で、河口（山口）、玉川（大阪）等多数の範士より、お祝いの言葉を頂き気に掛けて下さり、ありがたく思いました。

帰路の高速のSAで、静岡に来て富士山を見ていないので見たい、現地の人に聴けば夕闇迫る中、遠方にぼんやり見えました。車中は、大会の話でいっぱいで、私達は午前○時少し前に鴨島に到着し、解散しました。

さらに今回の練修の成果は十二月二日の大阪大会で、坂本選手の七段の優秀演武賞という結果として、現れたと思います。尚一層努力し、徳島の居合発展を期したいと思います。



全日本選手権に出場して

警察支部　六條洋二

平成二十四年十一月三日、日本武道館において行われました第六十回全日本剣道選手権大会に出場させていただきました。

これまでの県予選会では、準優勝三回、三位二回と、もう一歩のところで敗れてしまい悔しい思いをしてきましたが、今回初めて悲願の優勝を果たすことができ、目標としてきた全日本選手権の舞台に立つことができました。

十月の下旬、トーナメントが発表され茨城県警の海老原選手との対戦が決まりました。

海老原選手とは、警察の剣道講習で二度一緒に汗を流した仲であり、私より一歳年下ということもあって、今でも親交がある剣友の一人です。

それより驚いたのは、二試合場の第一試合目だったということです。

「初めての大舞台で一試合目……」

色々なことが頭を過ぎりました。少し弱気になっている私に、

「全日本の大舞台で一試合目、観客みんなが観てくれるよ。自信を持って自分の剣道をしてこい。」

と特練の先輩から激励して頂き、素晴らしい相手と大舞台で試合ができる喜び、また徳島県代表としての誇りを持って試合まで、これまで以上に一生懸命稽古に取り組みました。

試合当日、付添いの六條勝仁（弟）と共に日本武道館に入りました。アップでもよく身体が動き万全の態勢で開会式に臨みました。

アリーナ席、一階席ともに満員の観客、多くのカメラマン、ざわめく歓声、今まで経験してことのない感覚でした。これまでに三度、先輩の付添いで周りから見て雰囲気には慣れているつもりでしたが、いざ自分が会場に立ってみると、独特の緊張感に息が詰まりそうになりました。

開会式が終わればすぐに試合、このままでは会場の雰囲気に飲まれてしまうと思い、満席の一回席から応援に来てくれている家族を探し気持ちを落ち着かせました。

いよいよ試合です。面を付けて会場に入り正面に礼、太鼓の音とともに試合が始まりました。

海老原選手は全日本選手権三回出場、茨城県警でも軸となっている百戦錬磨の選手、柔軟な攻めで相手を引き出して出頭を打つのが得意というイメージの剣道をします。

私は、消極的な試合だけはしたくないと開始早々から攻め入ろうと決め、間合いを詰めました。しかし、間合いに入れば足でさばかれ、得意の引き技も潰されなかなか打ちきれない時間が続きました。

開始から二分ぐらいが過ぎた時、

「自分の間合い、ここからなら打ち切れる。」

と得意の面を思い切って出しましたが、相手もそれに合わせて出頭小手、旗は相手に二本、小手を取られてしまいました。

その後、取り返そうと攻めましたが時間終了。一本負けで私の初出場、全日本選手権は終わってしまいました。

改めて試合を思い返してみますと、出頭小手を取られた所は、相手の思惑通りだったのかもしれませんが、私も捨てきった技、悔いはありません。

相手が一枚も二枚も上手だったということです。しかし、勝負を急ぎすぎ、落ち着いた攻めができなかったこと、構えが固く、攻めが淡白だったことが何よりの反省点です。

今回の経験をこれからの剣道人生に生かし、目標とする。

「やわらかく柔軟な攻め」

を目指して日々の稽古に臨んでいきたいと考えております。これからもご指導の程よろしくお願いします。

第六十四回（平成二十四年度）四国四県剣道大会観戦記

徳島支部　中尾正輝

平成二十四年五月二十日（日）
鳴門ソイジョイ武道館

～本県七年ぶりに優勝す～

昨年の該大会は、高知市で開催される予定であった。折しも、四国沖を通過した台風二号の影響で急遽中止となる。

第五十二回大会（平成十七年度）以来、優勝から遠ざかっている本県としては、是が非でも、地元での優勝奪回に燃える。

出場選手名、試合結果、成績表等については、本記の後に掲載する。

試合は、打太刀、教士八段・河田清美、仕太刀、教士八段・平野誠司両先生による見事なる日本剣道形演武終了後、戦いの火蓋が切られた。

美馬勝行監督のもと、抜群の協力体制で、全選手伸び伸びとした動きで三戦全勝を期す。各選手は、持ち場、その場でよく健闘し、試合の流れを失うことがなかった。

特に、関西女子学生剣道選手権大会の覇者、先鋒・平野千尋選手は、戦の行方を左右する斬り込み隊長としての任を全うす。団体試合（戦い）における、先鋒の大事を再認識した。更に、中盤試合を引き締めた、六條（勝）・六條（洋）兄弟。試合をけん引した平野（誠）選手。安定し観戦者をして安心感を印象づけた。冨浦、福多（雅）、近藤（亘）、西谷の各選手等々文字どおり、監督、選手全員のチームワークで勝ち取った優勝であった。勝負の道には、必勝の信念が必要。平成二十五年度における各種剣道大会での本県選手の活躍を期待し観戦記とする。

合掌

第64回四国四県対抗剣道大会　優勝　（平成24年５月20日（日））於ソイジョイ武道館

年齢別		女子			20代		30代			40代			50代			60代
順位	監督	先鋒	次鋒	13将	12将	11将	10将	9将	8将	7将	6将	5将	4将	3将	副将	大将
氏名	美馬勝行	平野千尋	近藤夏子	竹内佳代子	山本義征	六條勝仁	六條洋二	山名信行	前田秀一	福多博史	玉田晋作	平野誠司	冨浦廣志	福多雅英	近藤亘	西谷肇一
年齢	66	22	37	50	23	28	30	36	37	41	46	48	51	52	57	60
段位	教七段	四段	五段	教七段	四段	五段	五段	錬六段	錬六段	錬六段	教七段	教八段	教七段	教七段	教八段	教七段
職業	無職	会社員	主婦	教員	臨時職員	警察官	警察官	警察官	刑務官	教員	教員	警察官	教員	教員	警察職員	無職

	香川	愛媛	高知	徳島	勝敗	勝者数	得本数	順位
香川		△6/2	○13/6	△7/4	1	12	26	3
愛媛	○8/4		○6/4	△7/3	2	7	21	2
高知	△6/2	△6/3		△5/2	0	7	17	4
徳島	○11/6	○10/5	○11/7		3	18	32	1

第一試合

県名	順位	先	次	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
高知	氏名	中越	大崎	川村	高木拓	野崎	尾崎	中原	高木郁	小笠原	藤野	土屋	小谷	恒石	野中	本山
	得点		メ一本勝		ド					コ			コメ			
徳島	得点	一本勝メ		一本勝メ	ドメ▲			一本勝メ	メコ	メ	一本勝メ	コメ	▲			
	氏名	平野千	近藤夏	竹内	山本	六條勝	六條洋	山名	前田	福多博	玉田	平野誠	冨浦	福多雅	近藤亘	西谷

5 / 2

11 / 7

第二試合

県名	順位	先	次	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
愛媛	氏名	俊野	松木	山崎	國松	白石大	白石翼	鎌村	馬越啓	二神	池内	山崎	菅	真鍋	向井	馬越博
	得点		メコ		メメ	ド				メ					メ▲一本勝	
徳島	得点					ド	メメ	ココ		コ	一本勝コ		メメ	一本勝メ	▲	
	氏名	平野千	近藤夏	竹内	山本	六條勝	六條洋	山名	前田	福多博	玉田	平野誠	冨浦	福多雅	近藤亘	西谷

7 / 3

10 / 5

第三試合

県名	順位	先	次	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	副	大
香川	氏名	藤井	谷本	諏訪	松本	高木	安部	山畑	小川	井口	笹谷	香川	菰渕	桑原	井上	伊丹
	得点			コ一本勝	コ一本勝		ツ	▲	コメ					メ		メ一本勝
徳島	得点	ココ					メド			一本勝コ		ココ	メメ	ココ		
	氏名	平野千	近藤夏	竹内	山本	六條勝	六條洋	山名	前田	福多博	玉田	平野誠	冨浦	福多雅	近藤亘	西谷

7 / 4

11 / 6

全国警察剣道大会に出場して

警察支部　近藤正章

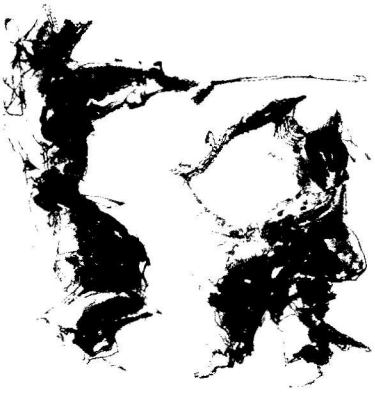
平成二十四年十月二十三日、全国警察剣道大会が開催されました。今大会は、私自身、チームの大将として初めて出場する特別な大会となりました。昨年の十一月に四回目の挑戦で六段に昇段し、今年から管区大会でもチームの大将として試合に出場させて頂き、絶対に悔いの残らない試合をしようと、いつも以上に強い気持ちで試合に臨みました。

今年の対戦相手は秋田県警と富山県警で、どちらのチームの大将も私が過去に出場した全日本選手権の一回戦で敗れている相手でした。

第一試合の秋田戦は一勝一敗となり、私が引き分けでチームが得本数で勝てるという状況で試合に臨みました。序盤は、相手の動きが良く見えて、落ち着いた試合を展開する事ができていましたが、時間が経つに連れて、相手も必死に一本を取るため、より厳しく間合いに入り、鍔迫り合いも直ぐに解消するなど、半ば強引な試合展開となり、互いに時間を意識するような状況の中、一瞬私の心に、「このまま守ればチームが勝てる」という迷いが生じ、体勢が受けになってしまった所を攻め入られ、相手に面を許してしまいました。残り時間も僅かでしたが、最後まで諦めずにチャンスを窺っていると、今度は相手が受けに回って左手を上げた所に、自分ではこれ以上ない会心の逆胴を打ち込みましたが、旗が上がらず、時間切れで敗れてしまいました。

次の富山戦も接戦の末、一対一の同本数での大将戦となりました。私は、「もう勝負するしかない。」と開き直り、開始線に立ちました。相手は、前回の全日本選手権で対戦した時よりも攻めが強くなっていましたが、私は、自分を信じて打たれる事を恐れず真っ直ぐに打とうと機会を窺い、相手が受けになった瞬間、捨てきった面を打つと、一瞬剣先が相手の面を捉え、その後で相手も私の体勢を抑え突きで制しようとしました。審判には面が評価され、これが一本となり、更に終盤に面を追加して二本を連取し、チームを勝利に導く事ができました。

結果、二試合とも大将戦の末、一勝一敗で二部昇格は逃してしまい、私は大将としての責任を果たし切れなかった事を深く反省しています。今回の悔しい思いを忘れる事なく、来年こそはこの僅差を埋めれるような稽古に取り組み、全員が一丸となって結果を残せるよう努力して参りたいと思います。



平成二十四年度 徳島県高齢剣友会活動状況

事務局　笠井　勝

徳島県高齢剣友会は、遠藤一美会長のもと、九十六名の会員（平成二十四年四月末現在）で活動を進めてきた。

平成二十四年度は、主な行事として次の活動をした。

（四月）

・第二十七回徳島県高齢者剣道交流大会開催

（五月）

・第二十四回土佐生涯剣友会交流大会参加

（六月）

・第三十四回全日本高齢者武道大会参加

（七月）

・西部地区稽古会開催（吉野川市）

（九月）

・第十八回徳島県健康福祉祭剣道交流大会（二〇一二とくしまねんりんピック）開催

（十二月）

・南部地区稽古会開催（阿南市）

（毎月）

・原則二回の稽古会開催（松茂町）

以上の行事の内、「第二十四回土佐生涯剣友会交流大会」、「第三十四回全日本高齢者武道大会」については、直接関係する会員の先生方から、ご報告いただくことにして、その他の活動について事務局の方から報告することとした。

◎第二十七回徳島県高齢者剣道交流大会

平成二十四年四月十五日（日）午前九時から県立中央武道館で実施。

開会式の後、日本剣道形が、打太刀・教士七段芝原功一先生、仕太刀・錬士六段平正明先生により行われ、続いて、全日本剣道連盟居合道の岸田光博先生立ち会いの下、五名の剣士による演武、さらに、岸田先生の試し切りが披露された。その後、二十八名の参加選手を年代順に二分して、紅白戦を実施した。

試合結果は、紅組四勝（一〇本）白組五勝（一一本）で白組の勝利となった。

紅白戦が終了した後、徳島県高齢剣友会総会が開催され、平成二十三年度の事業報告及び会計収支決算報告並びに会計監査報告がなされ、続いて、平成二十四年度事業計画案及び同予算案が審議され了承された。

午後からは、全日本高齢剣友会（高崎慶男、橋本保治）の二名の先生方、土佐生涯剣友会（総監督・三谷義守、監督・橋本正視、鮫島重雄、常光彰、戸田七夫、中野金夫、山本進、渡辺三則、武内土佐雄、小松武利、浜田善司郎）の十一名の先生方、愛媛県高齢者剣道同好会（監督・織田端、三好耕二、近藤克美、杉本和巳、川村博昭、向井健司、古谷龍夫、馬越博）の八名の先生方、兵庫阪神剣友会（監督・伊澤章、北二郎、前野頼彦、河原田良一、蛭子稔、川東清一）の六名の先生方、香川県高齢者剣道有志の会（小田俊夫、福原達、伏見憲男、修理輝男、上田一雄、伊賀昭芳、田中正広）

の七名の先生方の参加を得て、親善交流試合を実施した。

試合結果

第一試合場

一．愛媛県高齢者同好会　対　徳島県高齢剣友会A

三勝（七本）　対　三勝（六本）

二．兵庫阪神高齢剣友会　対　徳島県高齢剣友会B

六勝（一二本）　対　一勝（五本）

三．香川県高齢者剣道有志の会　対　徳島県高齢剣友会C

〇勝（一本）　対　一勝（二本）

第二試合場

一．兵庫阪神高齢剣友会　対　土佐生涯剣友会

一勝（三本）　対　四勝（六本）

二．愛媛県高齢者剣道同好会　対　土佐生涯剣友会

二勝（三本）　対　三勝（四本）

親善試合後、全参加者による合同稽古を実施して、お互いに良い汗を流した。

本県会員による試合だけでなく、土佐生涯、愛媛県、兵庫阪神、香川県の各先生方との親善試合・全日本高齢剣の会長、理事長の先生方を含めた合同稽古も行うことが出来、大変実りの多い一日となった。

午後六時からの第二道場は、ホテルグランドパレス徳島において懇親会が開催され、全日本、上佐生涯、愛媛県、兵庫阪神、徳島県の高齢剣士四十二名が杯を片手にして剣道談議に花を咲かせた。

◎西部地区稽古会（吉野川市）

平成二十四年七月十四日（土）午後二時から美郷ふるさとセンターにおいて、県剣道連盟麻植支部の先生方のお世話で、西部地区稽古会を実施した。

稽古会は、高齢剣友会員及び、地元近辺の先生方四十四名が集い、冷房設備の恩恵を受けて、酷暑の中、稽古を実施して心地よい汗を流した。

稽古会の後、有志の先生方は、第二道場である美郷ふれあいセンター温泉において、剣道談議に花を咲かせた。

◎第十八回徳島県健康福祉祭剣道交流大会（二〇一二とくしまねんりんピック）

平成二十四年九月二十三日（日）午前九時から松茂町第二体育館において実施した。

開会式の後、日本剣道形が打太刀・七段藤本文義先生、仕太刀・五段日野浦正一先生により行われた。続いて、居合道長谷川英信流古伝組太刀（太刀打位（たちうちのくらい））打太刀・教士七段一村昌和先生、仕太刀・居合道教士七段坂本憲一先生により鞘つき木刀を使用して、迫力のある太刀打の演武が実施された。

その後、準備運動をして、会員選手四十五名による交流試合が、団体戦・個人戦の順に展開された。

団体戦は、十四チームによりトーナメント戦が行われた。

・優勝…麻植A（藤川和秋・出葉成一・三木毅）

・二位…阿南B（芝原功一・平正明・有賀秀敏）

・三位…徳島A（忠津和憲・中尾正輝・高島稔之）

・三位…海　部（別宮憲治・中村稔裕・福永徳）

個人戦は、三十九名の選手が年齢別の四グループに別れてトーナメント戦を行った。

〔特組〕優勝（張西政晴）、二位（遠藤一美）、三位（有賀秀敏）

〔A組〕優勝（中尾正輝）、二位（高島稔之）、三位（久次米繁興・三木毅）

〔B組〕優勝（美馬勝行）、二位（北條憲治）、三位（後藤徳朝・佐野博志）

〔C組〕優勝（藤川和秋）、二位（芝原功一）、三位（藤本辰夫・忠津和憲）

◎南部地区稽古会（阿南市）

平成二十四年十二月八日（土）午後二時から阿南市スポーツ総合センターサブアリーナにおいて、県剣道連盟阿南支部の先生方のお世話で、南部地区稽古会を実施した。

参加者は、高齢剣友会員及び、阿南支部会員並びに少年・少女剣士合わせて四十五名が参加し、初めは高齢者が少年・少女剣士の元立ちを務め、続いて、高齢者相互の稽古を実施した。

なお、午後六時からの第二道場は、ロイヤルガーデンホテルにおいて、有志参加の懇親会が行われ、稽古に於ける技の研究など、剣道談議に花が咲き、会場閉鎖後の寝室において、二次会が熱心に盛り上がった。

◎定例の稽古会

定例の稽古会は、毎月第二、第四土曜日の午後二時から、松茂町第二体育館において実施しており、新しい会員先生の参加もあり、毎回十数名から二十数名の会員が参集し、熱心に心技体の向上を目指して稽古が行われた。

全国高齢者武道大会 参加報告（雑感）

芝原　功一

その一　武蔵（六三四）攻略ならず

「東京スカイツリー」の高さはムサシ（六三四）メートルである。覚えやすい。出発前から淡い期待はしていたが、天望ならず。それにしてもなかなかいい名称である。「天空の樹」、完全な造語（公募）ではあるが、日本人には感覚的に理解できる。十時に浅草にいた。浅草寺をお詣り、しばし休息。徒歩でスカイツリーに向かうことになった。結構長い道のり、しかも蒸し暑い東京の六月。御足を傷めておられる遠藤会長さんを気遣いながらの行軍であったが、へばったのは若い我々であった。感服しきり。各自、早朝に自宅を出発したので食堂街で昼食をとることにした。各店行列のできる有名店、覚悟しながらしばし回遊。いける、短時間で入店できると直感、「オムライス」の店に思いがけなく五人で滑り込む。結構うまかった。横浜の店だった。タワーを出て近くの寿司屋でくつろいだお仲間もいた。さすがー。

その二　早すぎたホテルチェックイン

一名を除いて、七時に夕食を近くのレストランでとることになった。九段下ホテルグランドパレスに早すぎるチェックイン。さあ、どうしようと悩んだ。靖国神社で「相撲甚句」を楽しんだ人がいた。自分はゆったりしたダブルの部屋で、柔軟体操、素振り、大鏡での姿勢チェックを念入りに行った。しかし、どうしても時間は捌けない。風呂にも入った。

出てからまた鏡が目の前に……。結局竹刀で同じことを。時間の経過は空腹感が教えてくれた。宴会とまではいかなくてもよく飲んだ。あとはホテルで寝るのみ。満月であった。東京の夜空はきれかった。

その三　出陣の朝

平成九年十一月二十六日、七段初の挑戦で合格の栄を賜った懐かしの日本武道館。九段坂はいい準備運動になる。目的を一にする人々が黙々と早足で坂を登る。そして戦いが終わってまた静かに下っていく。六月初夏の日差しを浴びながら、ホテルから一気に会場へ。やっぱり大きかった。懐かしかった。会場で徳島県の陣地を構え、じっくりと戦いの準備を始めた。それより一時間前、普段着で剣道具や荷物を持って一階ロビーに降りていった。そこに全員が着装、出陣の手はずを整えた集団がいた。高知県チームである。凛々しいその姿に何か予感、期待しているものを感じた。高知県は後の団体戦で見事準優勝を納めた。

その四　興奮気味の開会式

大会プログラムを手にして感激した。往年の名選手、憧れの範士・教士八段の先生の名前がズラッと並んでいた。矢野博志、岡村忠典、田口榮治、千葉　仁、中田琇士、

平川信夫、遠藤正明、戸田忠男他多数の顔ぶれに胸がときめいた。剣道雑誌やＤＶＤでしか存じ上げない有名な剣士達が、今自分の眼前に座っておられると思うと、「ああ、来てよかった」と感謝の念でいっぱいになった。とりわけ遠藤正明先生は、個人戦の試合会場の主任である。気合いが入った。

大会運営委員長は千葉県松戸市松風館道場の岩立三郎範士八段であった。松風館で修練し、八段に昇段した人の数が他と比べて非常に多い、評判の道場。あの小柄な体格での大きな面打ちは定評がある。全国高齢剣友会会長、高崎慶男先生には大会副会長として終始大会を見守っていただいた。挨拶で、東日本大震災の被災者の方の言葉を引用され、危機的な日本の自然環境に備えなければならないことは決して他人事ではないこと、そして本大会では心静かに熟練の技を披露してほしいとの期待を述べられた。「心静かに」とはどういうことか、春に来徳され、ご指導いただいたことを咄嗟に思い浮かべた。「究極の忍耐、読み、そして打ち切る」、この実践だと直感した。来賓祝辞は、神奈川県剣道連盟会長、小林英雄範士八段が述べられた。先生が指導・解説された「実践剣道～剣の秘訣～」実践Ⅰ・Ⅱは剣道における基本と応用について、自分にとってはこれまでの剣道観を根底から覆されるようなすばらしいＤＶＤである。「剣道の修行は、腸に汗をかくぐらいでなければ本物ではない」と、ある県の剣道の取材で聞き及んだことを話された。自分にとって本大会は、全く凄い出会いが仕組まれているように感じた。

その五　日本剣道形もいろいろ

今回の形は打太刀、仕太刀との呼吸がよく合い、手順通りできた、と内心自負していたとしても、必ずどこかから、誰かから注文が付くつくのが日本剣道形である。大会で形を打った経験は三回しかない。諸先輩からいろいろご指摘を受けながら自分なりにレベルを上げていったつもりでも、後になって冷や汗をかくのが常。とりわけ「緩急自在」という点については、「一本調子」とのきつい評価が待っている。

今大会では、こんな日本剣道形もあるのかという、インパクトのある演武を披露していただいた。これは到底まねはできない。しかし、「緩急を自在にする」ということは、もしかしたらこういうことかとも考えるさせられる面があった。果たしてどんな演武だったか？仕太刀は自分の感覚ではかなりオーソドックスであった。打太刀は、緩急をつけることにかなり拘泥していると感じた。「緩」については、立ち合いの間合い位置に復帰する時間をやたらと掛けていた。「急」においては、小太刀一本目、小走りで切り込んだ。あっと息を飲んだ。参観者一同、機を見て打つとはどういう演武かと注目したはず。過去にはするすると間合いに入って、さっと打つ演武は見たことはある。しかしこんなのは初めてである。あそこまでやらなくてもいいのでは、かなりオーバーだなと感じた。とはいえ、自分の剣道観を精一杯表現されておられることには敬服もした。自分ならもう少し淡々と打つのだが、いずれにせよ、日本剣道形を

打つことは自己の剣の修練に非常に有益であることは間違いない。

その六　試合のこと

団体戦初戦の相手は千葉県であった。先鋒としてメンとコテの二本勝ち、責任を果たせて安堵した。不思議と冷静に試合に臨めた。「ここまできたからには楽しもう」と自分に言い聞かせたのがよかった。結果は一勝（二本）二敗（二本）で千葉に惜敗した。ちなみに優勝は栃木県、準優勝は先述の高知県であった。

個人戦は四人一組の予選リーグで1勝1敗となり、残念ながら予選で敗退。予選突破は完璧な勝ち、二本勝ちで一本も与えない勝ち方をしないとだめである。遠藤会長さんにおかれましては、寿A組（八十五歳以上）で見事三位に入賞され、今年も輝かしい栄光の二文字を徳島県高齢剣友会の歴史に刻まれました。誠におめでとうございます。

その七　おわりに

大会参加にあたりご尽力を賜りました皆様方に心から深く感謝申し上げ、大会参加報告（雑感）といたします。ありがとうございました。

芝原先生におかれましては、
平成二十五年二月三日にご逝去
されました。謹んでご冥福を
お祈りします。

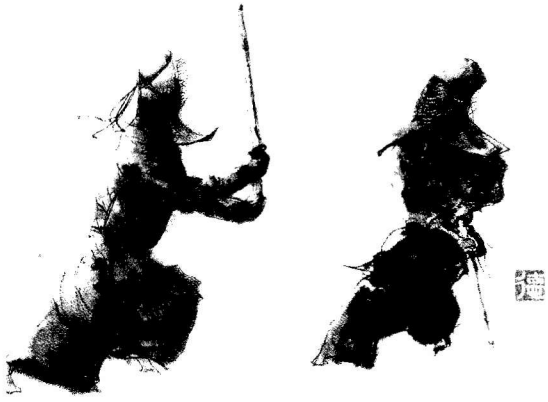
第二十四回土佐生涯剣友会交流大会に参加して

徳島県高齢剣友会
藤川和秋

平成二十四年五月十二日（土）高知県立武道館において開催された第二十四回土佐生涯剣友会交流大会に徳島県高齢剣友会の一員として初めて参加させて頂きました。徳島県からは十一名、愛媛県からは十三名、香川県からは五名、地元高知県からは二十名の総勢四十九名に及ぶ会員が参加して四国四県の親善試合をリーグ戦形式で行ったほか、試合後は合同稽古で心地良い汗を流しました。

私は当初、所用のため大会への申し込みをしていなかったのですが、日程調整がつき、急遽大会参加をお願いしたのです。親善試合では香川と高知戦に出場させて頂きました。試合時間が三分と短いこともありましたが、幸いにも一本勝ではありますが二勝することができました。対戦相手の先生は大変元気な動きで、稽古をしっかり積んで試合に臨んでおられ、その取り組み姿勢に感心させられました。親善試合の最後に、高知県の高石敏夫先生（八十八歳）と愛媛県の片岡義光先生（八十四歳）の最高齢対戦が行われ、その円熟な動きの中に気迫がこもった試合展開に勝負はつかず、引分けで試合が終わった時、会場からは大きな拍手が湧き上がりました。お二人の試合を拝見させて頂き、剣道の素晴らしさを改めて痛感させられました。親善試合後は合同稽古となり、昔よく稽古を頂いた高知県剣道連盟会長の友永隆雄先生をはじめ、たくさんの先生方に稽古をお願いすることができ、私にとって充実した一日となりました。夜の懇親会には参加できず、カツオのタタキに未練が残りましたが、今回の大会に参加させて頂き、剣道は勝ち負けだけではなく、剣道を通じて人との交流を深め、将来年がいっても剣道を続けていけるよう無理、無駄のない剣道に心がけていくことが大切であると痛感しました。

平成二十五年十月には高知県において「ねんりんピックよさこい高知二〇一三」が開催されます。地元開催のねんりんピックに向け今後の土佐生涯剣友会の益々のご健闘と会員皆様のご活躍を心からご祈念申し上げ、土佐生涯剣友会交流大会に参加した私の感想とさせて頂きます。



随想

剣道に惚れる

大澤孝彰

前回は埼玉の剣友が私を剣道の師とされ、数年に亘り切磋琢磨し、その間の手紙のやりとりの中、俳句短歌川柳等百首以上の中から約五十首を紹介させて頂きました。今回はこの剣友を私の所へお連れした東京の故山本和正先生について書かせて頂きます。

日本の剣道は第二次世界大戦の敗戦迄は剣道の黄金時代でした。特に昭和九年五月に開催された皇太子殿下御誕生奉祝昭和天覧試合は荘厳で火花散る大盛会の大会でした。この大会は、都道府県一名選抜の試合と選考委員による格式の高い指定選手による試合がありました。この指定選手の大会で優勝されたのが故山本忠次郎先生（故山本和正先生の御尊父の弟さん「叔父」）でした。決勝戦は上段も取り、華ばなしい激戦だったと記念誌に書いてあります。

さて、終戦迄は剣道家は勿論、一般の人も山本家周辺には人々が多勢集り大変だったそうです。ところが終戦になり、剣道が一時禁止になりました。あれだけ山本家周辺に集まっていた人々は蜘蛛の子を散らす様にいなくなったそうです。そして、剣道の禁止が解けても近親者は勿論、大方の人々が剣道を忘れてしまったのではないかと思う程でした。誰も剣道の事を言わなくなったのです。この光景を両親や叔父さんからもの心つく様になってから和正先生は聞いて、「よし、誰も剣道をやらないのなら僕がやる」と決心したそうです。小学生の頃、父親や叔父さんに少し指導を受けたそうですが、武家の貧乏で中学・高校・大学と自分で働きながら勉強したそうです。しかし、この間も剣道は野間道場を中心にあちこちの道場で修錬されておられます。従って勝負強く、あちこちの大会（八幡神社奉納大会等）で二刀流も駆使して優勝して賞金稼ぎと言われたそうです。又、東京都剣道連盟に属していたので若い時の佐藤博信（範士八段）と一緒に東京都代表で日光大会等にも出場して大活躍しました。

ある年、徳島県警の故岡本憲三先生と知り合いになり、友好を深め、徳島に時々来る様になり、私の道場にも稽古に来られました。それが縁で岡本先生が病気になられてからは私と親密に交際する様になりました。十年近く正月に私宅で寝食を共にして三日間位切磋琢磨しました。もちろん、私が東京等へ出張の時は必ず猛稽古をしました。職業として「ペンキ屋」さんを頑張りながら、剣道稽古だけでなく、剣道に関する種々の本は勿論の事、様々な本からも勉強し、大変な博識家でした。又、東大出身の無刀流の家元に月一回必ず剣友と一緒に指導を受け、竹刀剣だけでなく日本刀の剣道も大いに研究していました。少年教室も開きいくら時間があっても足りない様な仕事と剣道生活でした。

七段合格は非常に早く三十四歳でした。八段は何回か受審しましたが、不運で合格しませんでした。しかし、実力は充分八段と感じて居ります。非常に心やさしく、私

が東京で倒れ入院している時、わざわざ神奈川県の大雄山最乗寺に行き、病気平癒の祈願をしてくれました。私が病気で剣道が出来なくなってからも五月の京都大会が終わって、わざわざ徳島に来て私の道場生と稽古をしてくれていました。

ところが、昨年一月に検診で「ガン」が見つかり、十一時間に亘る大手術をしました。見事成功し、主治医先生も自信を持って居られた様です。本人もほんとうにびっくりする程元気になり、五月の京都大会に出場後、来宅され、道場ですばらしいお元気な指導をして下さいました。一泊し、五月六日朝タクシーにお乗せして手を振って別れました。これが山本先生との最後となりました。

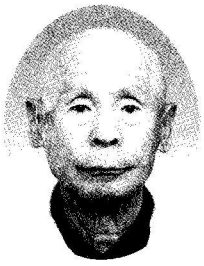
帰京後、お元気で稽古されている便りを頂きましたが、それからしばらく連絡が途絶えました。便りが無いのはお元気な証拠と私は思い込んで連絡しませんでした。昨年十一月末奥様からのお手紙で「十一月四日に逝去し、葬式等その他の事も全部終りました。通知が大変遅くなってすみません」とありました。びっくりして声も出ませんでした。享年七十歳でした。多忙な仕事をやりながら自分の修練はもとより少年指導、その他色々な研究をして剣道をほんとうに心から愛し、打ち込んだ人だと思います。警察剣道、学校剣道だけで無く、こう言う一般の剣道人が頑張ったからこそ、戦後の日本の剣道がここまで発展したんだと思います。

剣に惚(ほ)れ　生命(いのち)をかけて修練し
剣（道）をきわめて　枯葉と散りぬ

平成二十五年一月十一日

私の剣道人生（回顧）

高田　豊



剣道は私にとって人生の基盤であり、彩りでもありました。再び竹刀を握れなくなった今、更にその感を深くすると共に歩んできた剣道人生が走馬燈のように思い出されますのでそれを綴ってみました。

㈠　昭和十二年、中学校に入校し、初めて竹刀を握りました。学校は今の北朝鮮の清津に在り、先生は清津警察署剣道師範中福生達士でありました。以後五年間の学校と卒業後、中先生の道場、警察署で二年間修業し、道場では二段だったので元立となり、警察官や憲兵などの相手を勤めておりました。この頃が私の青春でした。やがて兵役となり、特攻訓練中、終戦となりました。家族は北朝鮮で生死不明であり、帰る家もなく、大阪でのすさまじい職探しなど経験し、人生の大危機に会いましたが、剣道で得た「地味でも正攻法」の精神のお陰で人の道を踏み外すことなく、徳島の知人の工場で肉体労働者として汗を流すことになりました。一年半後、家族も全員帰国し安堵。昭和二十四年に県警察に奉職しました。

㈡　警察に入り、二年後、県の選手候補となりました。当時は四国警察大会の一週間前に召集され、警察学校の寮に缶詰にされて稽古したという笑い話のような実状でした。しかし、本務の方が多忙となり、剣道から遠ざかり、再び剣道をとりもどしたのは教養課長となってからでした。堀江幸夫先生から直接ご指導を頂けることになり、私の剣道人生は大きく開花しました。警察剣道部会を創設したのもこの時です。以来、旧武道館での朝稽古にも参加しました。県下の大会等にも積極的に参加したお陰で剣友を多く得て、警察行政執行上格別のご援助を得ることが出来て大いに感謝したものです。

㈢　昭和五十五年警察を定年退職し、第二の会社勤めをはじめましたが、その会社が幸町に在ったので旧武道館の朝稽古には続けて参加し、一汗かいて入浴し出勤するという恵まれた環境で過ごしました。一方、地元藍住少年剣室に籍を置くと共に大人のチーム「知友会」を立ち上げ、県内外の大会に積極参加しました。五十五歳で六段、六十歳で七段を頂きました。念願の京都大会に参加出来た喜びは今でもなつかしく思い出されます。連盟の役員も受けて審査、審判などに奔走したことが思い出されます。

㈣　六十六歳で会社を退職し、全くの自由の身となり、剣道にドップリと入りびたることになりました。四八国体の実施などを中心に連盟の役員としても動き、県内外の大会に東奔西走、そして、ねんりんピックや四国四県大会、高知生涯剣道、東大阪遠征など広い経験をつむことが出来ました。この時期が私の剣道の満開期であったと思います。

㈤　好事魔多しと言いますが、七十八歳で胃癌となり、摘出手術を受け、私の生活は一変しました。ところが失望落胆の日々を送っていた私に「一緒に稽古しないか？」

と堀江先生から思いもしなかったお誘いを頂いたのです。メンバーは堀江先生、柏原浩、松村克隆、田村清憲、私の五人でした。毎週木曜日に中央武道館で一時間、ミッチリと剣の理法を教わると共に高齢者の剣道について教えを頂きました。それによって私は再び竹刀をとり高齢者剣道の場で活動することが出来るようになりました。堀江先生は亡くなられるまで私を指導下さいました。有難うございます。

高齢者剣友会にも参加し「打たず打たれず」の境地を味わい、八十五歳で実践剣道から退くこととしました。

(六) 私の剣道人生で見落とせないのはお酒の存在であります。大きい潤いを与えてくれました。「交盃知愛」です。盃によって多くの心友を得たことも幸せなことでした。

(七) 皆様には長い間お世話様になりました。心からお礼を申し上げます。本当に有難うございました。

合掌

感謝合掌

副会長　原田　勝

五十年前（故）大澤善二郎先生との出会がなかったら、おそらく今日の私はなかったと思います。偶然にも大澤先生との出会いがあり、何の因縁か大澤先生の運転手兼鞄持ちをしながら、剣道と居合道の手解きを受ける事となりました。「剣道は強くなれ、居合は上手くなれ、段位や称号に惑わせられるな」と言うのが大澤先生の持論でした。何時も昼間は二人だけの稽古で切り返しと、掛かり稽古ばかりが三年ぐらいは続きました。今では良き思い出なのですが、その当時は毎回がいじめと虐待にあっている様なもので、私が動けなくなってから「さあ、勝負一本！」と言うのが定番でした。それと合わせて稽古の後には毎回必ず大きな和の心についての講話を拝聴しました。これが後々大変役に立ったと今でも大変ありがたく思っております。

昭和四十二年ごろ、当時徳島剣連の理事長であった（故）堀江幸大先生との出会いがありました。ある日、堀江先生より「剣道の人員は今のところどうにか間に合っているが、現在剣道連盟に所属して居合道をする若い者が一人もいないので取り組んでくれないか」との要請でした。大澤先生からも勧められ、しぶしぶながら承諾する事となりました。

しかし、その頃、木頭村の大和錬心館に少年剣道部を立ち上げたばかりだったので、年間三百日の稽古を目標に、私もほとんどが剣道ばかりの日々でした。それから数年後に大澤善二郎先生がご他界されました。しかし、少年剣道は何とか軌道に乗り、県下大会でも優勝も出来るようになってきていました。そこで、自分の体調のこともあり、これを機に少年剣道を後輩に譲り、少し性根を入れて居合道に取り組んでみようと思うようになりました。

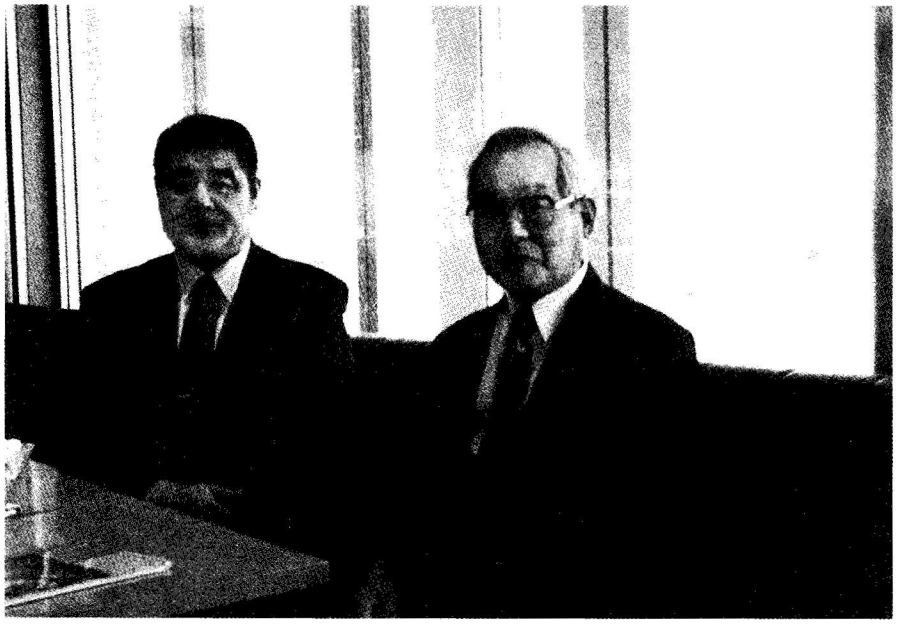
まず、居合道の師匠を求め、最終的には高知県土佐山田町の（故）三谷義里先生（後に剣道範士、居合道九段範士）の養心館道場の門を訪ね、後日入門を許され本格

的に居合道に取り組むようになりました。その当時の木頭村から高知県土佐山田町へはまだ悪路であり、往復五時間の道を毎週二回通うようになりました。最初に無双直傳英信流居合の技の名称と理合だけは教えて頂いたのですが、「後は自分で稽古をして考えろ」と言われるだけで、最初に期待していたほどは教えては頂けませんでした。稽古はまず先に三谷先生が数本抜いた後に「次は君が抜いてみろ」と言われ、私が抜くのを見ても良いとも、悪いとも何も言っていただけません。ただ毎回稽古の終わりには決まって、「謙虚にせよ」、「真面目に創意工夫をして一生懸命稽古をせよ」、「居合は下手でもいいから天狗にだけはなるな、天狗になると全てが駄目になる」と、耳にたこの出来る程に聞かされました。ありがたい事にこの時の教えが今日までの私を支えてくれた様なもので、衷心より深く感謝致しております。また三谷先生は「私のする通りにはするな、言う通りにせよ」、「剣道や居合道はいくら稽古をしてもそれほど目に見えて上達するものではないが、稽古は毎日せよ」、「そうして謙虚に一生懸命に取り組んでいれば、そのうちに人がほうってはおかないから、人が何とかしてくれる、それが上達や昇段の一番の近道だ」とも教わりました。そして概ね先生の教えの通りにしてみました。すると何時の間にか結果はその通りに成っていました。三谷先生の指導は取り組み方の心は教えても、術までは教えず、「自分で見て創意工夫をして覚えろ」でした。また、「喉の渇いていない者には水は飲まさない、飲ましても無駄だ」と言う考え方でした。今では斯道は教えてもらうものではなく、自ら求めて学び、会得して行くものだと思うようになりました。

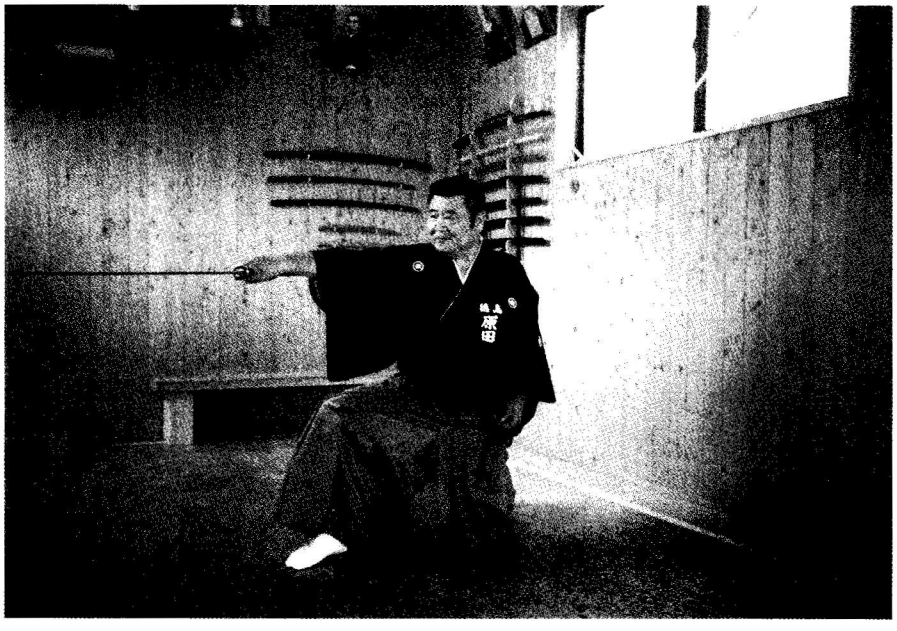
また、徳島県においては自県の講習会等では平尾勝美先生の居合道に対するご講話と技を毎回真摯に勉強させて頂きました。また機会ある度に、堀江幸夫先生、大澤譲二先生の両先生にもご指導を賜り、大澤先生からは剛を学び、堀江先生からは柔を学んだように思います。堀江先生からの指導に、「剣道は最初は相手を、たたく事から始まり、次に打つとなり、次は乗せるになり、最後は忘れるに至る。忘れるとは、打とうとも思わず、また打たれまいとも思わず、ただ相手の気と体の動きに無意識に体が反応し剣が出ている事だ」とも言っておられました。また、「居合道においても同じ事ではなかろうか」とも言われ、「剣道は立って行う禅であり、居合道は三尺の秋水（研ぎすました刀）を持って行う禅であるとも言われているので、青眼の心を那賀奥木頭の山川草木に学んではどうか」とのご助言をも頂きました。その後、堀江先生から最近の私の居合を見られて、「少し渋味が出てきているような気がする。早く社会人になれよ」、と言われたのが堀江先生から頂いた最後の言葉と成りました。その当時は何の事やら全く解りませんでしたが、今では少し解るような気がします。思えば、全国には八段を目指し、範士を目指して涙ぐましい血のにじむ様な努力をなさっても、なかなか目標が達成出来ない先生方が多くおられる中で、自分は何ほどの努力もしないままに、ただ運良く多くの先生方

の暖かいご支援とご教導により、気がついたら現在（居合道範士八段）に至っており、誠に申し訳ないような気がしております。

ご恩返しと思い、斯道発展のために微力ながらも最善尽くす覚悟であると共に、これからが本当の修行だと自分言い聞かせながらの感謝合掌の毎日です。



（故）堀江幸夫先生とともに



岫雲（しゅうん）

原田　進

今年、私は六十八歳を迎える。

これまでの人生を振り返ると、人間として生きていく上での大切なことは、剣道を通じて教わってきたといっても過言ではない。そして、人生の師として仰ぐ方々と私を巡り合わせてくれたのも、また剣道である。

ここで、私の人生を、少し回想してみたい。

私は、子どもの頃は虚弱体質であった。易者からは、「寿命は四十歳位だろう」と聞かされおり、中学校に上がる頃には盲腸のほか、年に数回は切開手術を受けていた。見かねた父親が、私に体力をつけようと目を付けたのが、剣道である。父は、私が高校へ入学するやいなや近所の先輩に頼み、私を剣道部に入部させた。私の意向も聞かずにである。これが私と剣道との出会いである。

当時を思い起こすと、毎日、厳しい稽古、冷たい床での正座、練習後の道場（傷んだ体育館の床）の雑巾がけ等々、よく体力が持ったものだと我ながら感心する。

その当時、月に数回指導に来られたのが、今は亡き堀江幸夫先生と岡本憲三先輩である。この両先生が指導に来られる日は、十数名の部員が数人となる。当然のことながら厳しい稽古で足腰が立たなくなるためである。しかし、先生は息一つあがらない。大変失礼であるが怪物のように思えた。

その後、大学時代には一旦剣道から離れていたが、役所に就職してから再び剣道を始めることになる。それが吉田静雄先生が指導する松茂剣道教室であり、川田、羽柴、久次米、石井先生との交流の始まりである。県連盟の講習会では三木只雄先生、堀江幸夫先生に指導を仰ぎ、特に柏原浩先輩には目を掛けて頂いたが、若くして既に故人となっている。

私が師と仰ぎ、人間として生きていくための大切なことを剣道を通じて教えてもらった先生方は今はもういない。だが、その教えは今もなお私の心に息づき行動指針となっている。私が今、幸せな生活を送っていられるのも剣道から学んだ「継続は力なり」を信じて進んで来たからである。

剣道の歴史では、戦国時代、剣術は人を殺す技術であったものが、江戸時代に入ると人間形成を目指す「活人剣」へと変貌をとげる。技術論から心法まで広がり、現在は、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」と剣道の理念が掲げられている。

「人間形成の道」に通じるものとして、人間の本性に対する主張としてよく引用される言葉に「性善説」と「性悪説」がある。私は「性悪説」に賛同するものである。

「性悪説」とは戦国末（中国：紀元前三世紀ごろ）に生きた荀子が社会の荒廃、礼儀の衰退を憂い、「人間の性は悪なり、その善なるものは偽なり」と唱えたものである。これは人間の性を悪（弱い存在）と認め、後天的努力（学問を修める）によって善へ

向かうという努力の持続性の重要さを主張していると考えられる。これが、剣道の理念と一致する。

六段合格時には、堀江先生に「叶」という書を書いて頂いた。

この年齢になって、やっと「善」なる人間になるためには「礼儀を尊び努力と継続」が必要不可欠であると実感している。

堀江先生が主宰し、過去に華やかであった「冨雪会」のメンバーも、講習会等でお会いできるのは福永徳先輩と元木武君の二人だけになってしまった。

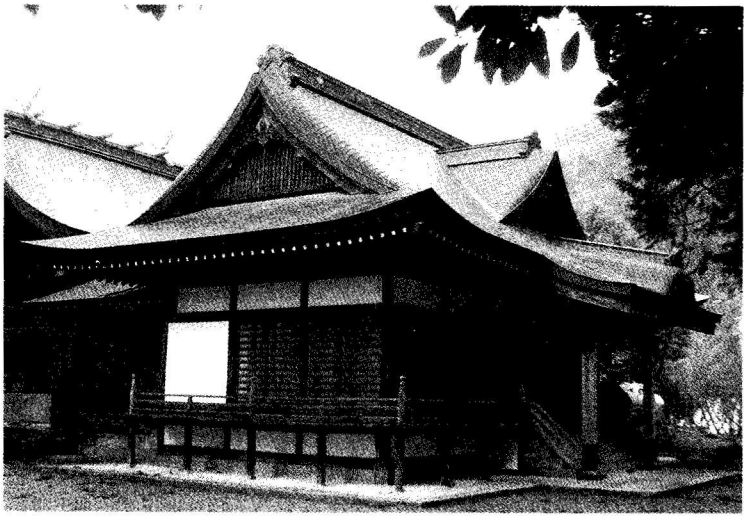
こうして人生を振り返り、今も色褪せない高校時代の厳しい稽古の思い出、堀江先生に頂いた「岫雲」のネクタイピンを心の支えとして、今後は、剣道を通じて未来を担う子供たちが国際社会で通用するようにと願い、人造りに努めて参りたいと考えている。それが「剣道の理念」に叶い、今までご指導頂いた先生方への恩返しであると思うからである。

今後も諸先生方には変わらぬご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

〈ネクタイピン〉岫雲（しゅううん）……「雲無心出岫」雲は無心にして岫（しゅう）を出（い）ず

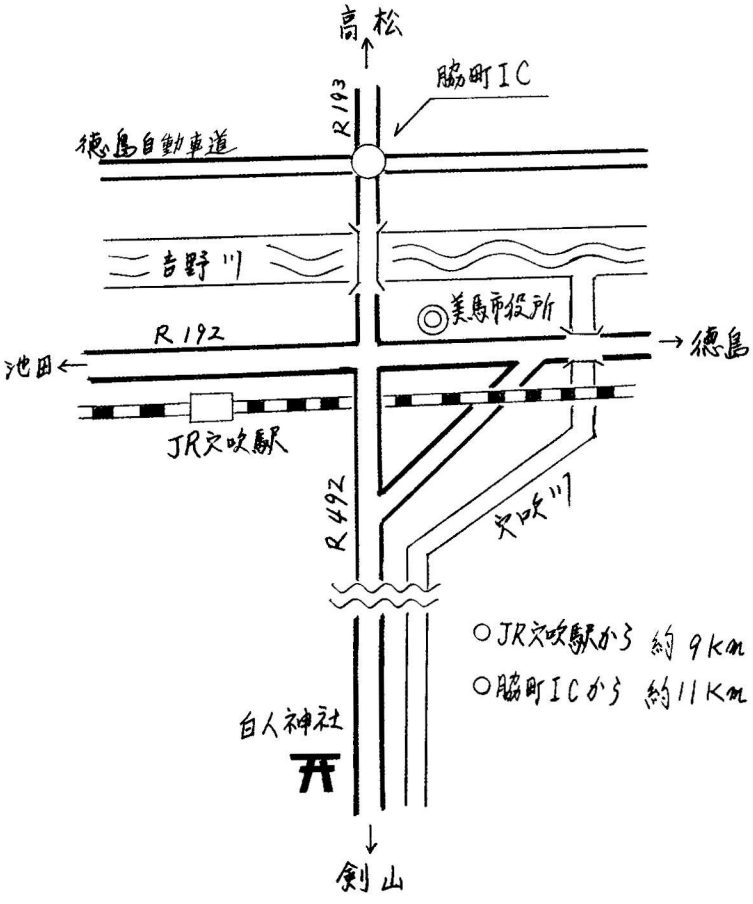
〈手ぬぐい〉 叶（かなう）……稽古を続けたおかげで六段に合格。
その時に堀江先生に書いて頂いた書を手ぬぐいに染め抜いたもの

修理亮は屋根の葺き替えを行っている。以後、代々の稲田氏によって御再興、上葺き等が行われている。また、稲田氏は代々鎧・刀・画などの寄進をたびたび行っているが、当神社玄関にある「白人大明神」と刻まれた扁額も稲田主税助植春の奉納したもので、慧雲鉄崖の書である。鉄崖は、禅宗の僧で、寛永三年（一六二六）仙台で生まれた。浅井長政の曾孫といわれ、書画に通じ楊柳観音図が著名である。その他、狩野方言が描いた黒馬の絵馬を稲田九郎兵衛植久が奉納している。



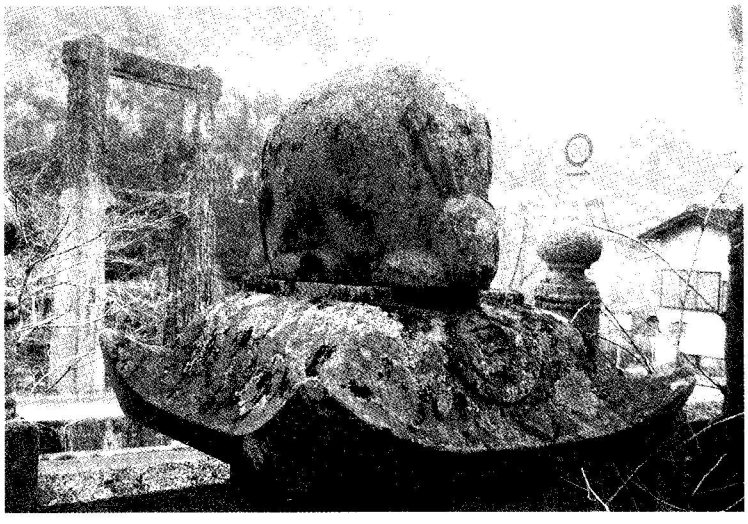
白人神社

このようなことから、「戦の神様」と慕われるようになったのであろう。境内は、大きな杉・楠に囲まれ、兎を載せた石灯籠が静寂の中に神秘的な空間を醸し出している。本宮のほかに、八幡神社、神明宮、天神社が祭られている。



白人神社扁額

神明山の磐境



白人神社　兎を載せた石燈籠

剣道家の竹取物語

竹刀師　高橋国保

竹刀を作るためには、良質の竹が必要であることは、誰しもが知るところではあります。

しかし、良い竹が容易に見つからない現在は竹刀師にとって、大変な時代になっています。近年、化学製品、特にプラスチック材料が普及し、竹製品を脅かしています。例えば、扇子・うちわ・花器・すだれなどですが、竹需要が減り、京都の竹製品の製造業者は昭和四十年代には廃業が相次ぎました。そのことが連動して、竹山から竹を切り出す量が減り、竹を切り出す職人もほとんどいなくなりました。

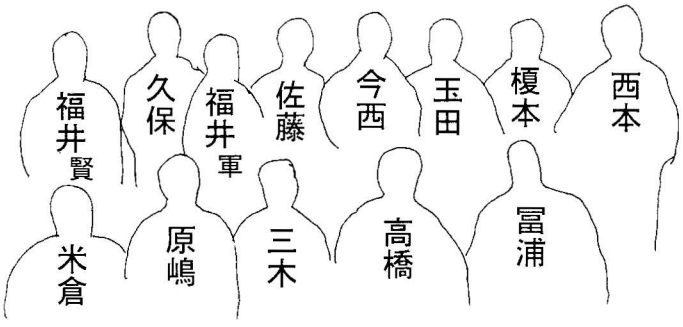
日本における竹刀の原材料の竹不足で、中国・台湾に原材料を求め、多くは「ケイチク」という中国・台湾の竹で、竹刀が作られています。中国での豊富な原材料と安い労働力により、中国・台湾製の低価格の竹刀が流通し、日本の竹刀関係の約八割の業者が廃業に追い込まれています。特に手作りで竹刀を作製できる職人は、四国では私一人、東京一人、福岡二人、熊本一人の五人程度しかいません。しかも、高齢化しており、若い本職としてやっている竹刀師の後継者があまりいないのが現状です。

そのような状況ですので、あと十数年もすると本物の竹刀を作れる人間が日本にいなくなるかもしれません。心ある剣道家の中には、このことを憂い自らが竹刀を作れる技術を持ちたいと思う方も出てきています。私のところにも数名の方が、竹刀作りを学びに来られています。平成二十年ころよりは、数名がまとまって、竹山から、竹を切り出すところから、行っています。以下にその模様を書くこととします。

○竹切り出し体験学習

（平成二十四年十一月二十四日）

今回で第三回目の剣道家の竹切り「竹取物語」です。参加者はリーダーの三木毅七段（徳島県剣道連盟副会長）をはじめとして、以下のメンバーが参加されました。県外から原嶋茂樹八段（東京）・榎本七段（埼玉）・今西健二七段（香川）・福井賢治七段（香川）・西本政弘七段（香川）、徳島県からは米倉滋八段・福井軍司七段・久保隆司七段・冨浦廣志七段・玉田晋作七段・佐藤光太郎五段のそうそうたる剣道家



の面々です。

よい竹刀の原材料となるための竹の切り出しには、五つの節があり、さらに適切な重さと大きさが必要となります。まずは、竹山に入って、その竹を見つけることが大変です。しかも、平地に生えていることは稀で、たいていは斜面を上った山にあります。足下の悪い斜面を登り降りするため、一回の登り降りでは、一本の竹しか持ってこれません。長さが一メートル三十センチ・重さ約四キログラムの竹ですから、平地ならともかく山の斜面では、転げ落ちないようにするために片手は何かつかまらなくてはならず、しかたありません。今回の竹取においても、十二人で四十八本、一人平均四本でした。参考までに、竹取に際して、私が与えたアドバイスを以下に列記しておきます。

①五つの節のある一メートル三十センチの見本の割竹を物差し代わりに持って山に入る（見本は私が用意）。

②見本の割竹を参考に切り出す竹を探す。

③青い竹はまだ若く、少し、色の悪い竹がよい。

④軽めの竹刀を希望する場合はビール瓶の太さの竹を、重めの竹刀を希望する場合は直径十センチくらいの竹を選ぶ。

⑤足場の悪いところの作業ではあるが、怪我をしないことを第一とする。

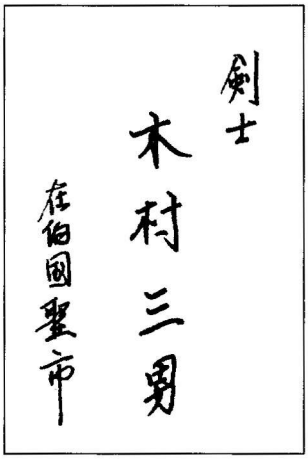
⑥切り出して来た竹を幅四センチメートルに割る。竹の太さにより、七・八・九枚になる。

⑦割った竹に自分の名前をローマ字で書き入れる。漢字で書くよりもローマ字の方が竹を削る際に、文字が残りやすい。

その後、割竹を乾燥させ、私が皆さんの顔を思い出しながら、割竹を削り、一本一本竹刀を作り上げて行きます。

○ブラジルからの竹刀師修行

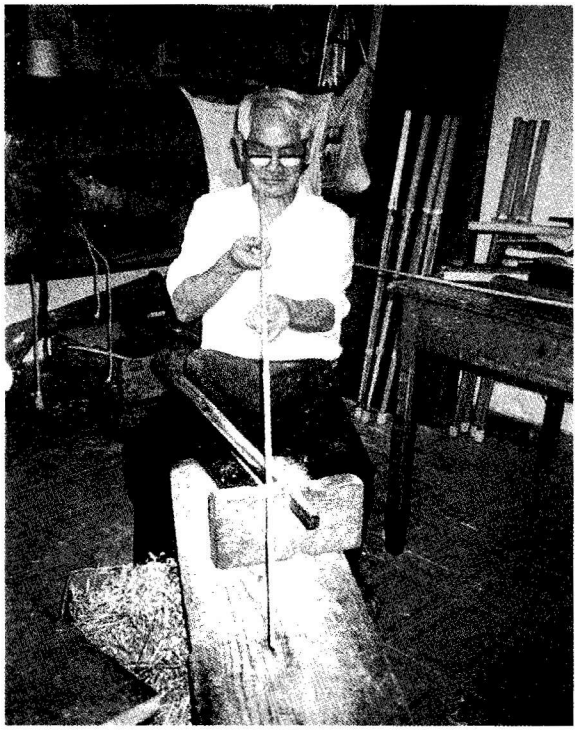
平成六年に、ブラジルのサンパウロ市在住の日系人である木村三男さんが私のところをたずねてきた。木村さんは群馬県の旧制中学校を卒業し、終戦後、両親とともにブラジルへ移民したとのことでした。剣道は旧制中学校で習い、ブラジルでは近くの学校の体育館で少年・一般の方を指導しながら、ご自分の稽古もされており、その当時、剣道七段でした。



（直筆のサイン）

ブラジルでは三九の竹刀が不足しているとのことで、木村さんが、私のところをたずねてきた目的は「竹刀作りの基本を教えてほしい」ということでした。私は「冗談でしょう。どんなに器用な人でも刃物磨ぎもすぐにはできませんよ。」と言いました。すると、「何日くらい習えばよいのか。」とたずねられ、「五・六年はかかるでしょう。」と答えました。

それから、毎年六月末から七月の一週間程度の竹刀作りの修行が平成九年まで続きました。その間、ブラジルでの様々な話を聞きました。例えば、ブラジルでは直径が三十センチ程度の竹もあり、それを半分に割って胴の型に細工して、紐をつけ、少年用の胴にしていること。今では各家庭に自家用車があるのが当たり前ですが、以前は稽古着・袴・胴・垂れをつけて、馬にまたがって、道場に来ている人もいたこと。当初は、試合に行くにも一日がかりで、トラックに枯れ草を敷いて、みんなで寝ながら行くそうです。木村さんの職業は農業で、苦労をしながら広い開拓地を得て、トマト・ニンニク・ハッカ・なすび・キュウリ等でブラジルでの生活に必要な米以外のものはほとんど作っているとのことでした。



また、愛媛県川之江市の製紙会社の人がサンパウロに仕事に来ていて、その時、ポルトガル語の通訳をしていた木村さんの娘さんが、その人と仲良くなり、その後、結

婚して、今、川之江市に住んでいるとのことでした。その話を聞いて木村さんに竹刀作り修行中に何かあっても、安心しました。本人の努力により、竹刀作りの修行も進み、柄削りもできるようになり、竹刀がある程度作れるレベルとなりました。

ブラジルに帰ってからのエアメールには、剣道家三十名で竹の切り出しを行ったことや木村さんの息子さんが高校教員をしながら、木村さんから竹刀作りを教わり、竹刀作りに励んでいること書かれていました。

私が木村さんに指導した技術がブラジルで一人でも多くの方に伝わることを願っています。木村さんは平成十七年に他界されました。心よりご冥福をお祈りします。

○四国の弟子

先の三木先生をリーダーとした「竹取」体験学習の折りに、名前を挙げました香川の西本政弘さんは、平成八年ごろから、「竹刀作りを教えてほしい」と、丸亀から三時間かけて、毎日曜日朝八時に、我が家まで通った人です。そして、修行を重ねて、

もう十七年、今では使える竹刀が作れるようになりました。十年先が楽しみな次代の竹刀師の後継者でもあります。今は一日に一本か二本のレベルかと思いますが、早く、一日で四本・五本作れるようになることを期待しています。

剣道と私

藤本辰夫

去年の社会人大会でリーグ戦を勝ち上がり、トーナメント戦に進んだ。一回戦目、大将戦を引き分けて代表決定戦となり、再び大将同士で戦ってまもなく、ブチッと左足のふくらはぎの辺りで鈍い音がして私は前のめりに倒れてしまった。ようやく立ち上がったものの動けない。試合を途中で棄権するという無念さと、ここまで勝ち進んできたメンバーや応援していただいた板野西支部の方々に申し訳なくて、痛みも全く感じないような茫然自失の状態を初めて経験した。二十年ほど前に何年も腰痛に悩まされて、とうとう大学病院で手術を受けることになった際にも、もう剣道ができないのではと思ったことがあったが、今回のけがは二度目の私の剣道人生の危機とも言える出来事であった。

私が剣道を始めたのは、脇町高校剣道部に入部してからで、今の時代では遅いと思われるスタートである。身長一五〇センチメートル、体重五〇キログラム弱の小柄な体の上、運動神経もなかったのになぜか剣道にあこがれて入った部活ではあった。故滝下勝先生にご指導を賜り、先輩たちに鍛えられながら高校の三年間を剣道に明け暮れて過ごすうちに、だんだんと面白いと思えるようになった。また、大学では私の生涯の師と仰ぐ故堀江幸夫先生に出会い、先生の愛情溢れるお人柄と剣道に対する深い造詣や真摯な稽古に魅せられて、ますますのめり込むことになった次第である。

大学を卒業後も此処かしこで剣道を続けているうち、縁あって警察官となり、剣道特練生となった五年間は剣道三昧の日々を送り、私の剣道人生にとっては大きな宝となる最高の成果も得ることが出来て貴重な時間を過ごさせてもらった。その後、三十七歳で警察を早期に退職し、徳島市内に剣道場を開き、十三年間子供たちの剣道の指導と自己研鑽に努めた。その間、平成五年には東四国国体の剣道が徳島県で開催されることになり、その事務を補佐するため剣道連盟の事務局長という大役を九年間務めることになった。その後も病気をされた故柏原浩先生の代わりに若輩ながら理事長を四年間務めさせていただき、幅広い年齢層を抱える連盟の組織運営に携わることができたことも、剣道を愛するものとしてこれ以上の幸せはないと思われることであった。

さて、最近いじめと体罰が大きな社会問題となっている。私が少年時代にはこれらの問題が取り上げられることはなかった。なんの苦労も知らずに平和を享受している今の日本では、いじめや体罰が力を持ったものの暴挙であり、お互いの人としての尊厳を壊してしまうということを考えない人がいるのではないだろうか。他人を痛めつけ犠牲にした自由はあり得ず、何の努力もしないで平等の権利だけを主張することは愚か。自由や平等という人類が長い間苦しみながら勝ち取ってきた素晴らしい価値を維持し続けるためには、しっかりと学び守り抜くという不断の努力を必要とし、自らを厳しく律する強い精神力を養う必要があるのではないだろうか。

私がこれまでの剣道人生を通じて、素質も何も持たなかった自分でも努力すれば必ず結果が出ることが分かったこと、勝負に勝ち負けることで他人の痛みを知らなければならないと知ったこと、自信を持つことで何事にも挑戦できるようになったこと、自分の健康に責任を持たなければならないこと、師や先輩を敬愛し弟子や後輩を大切に思い育てること等々、人として必要なすべてのことを学んだといっても過言ではないと思う。このような剣道との出会いに心から感謝をし、けがを治してこれからも日々稽古に精進していきたいと願っている。

称号・段位合格者

七段に合格して

阿波支部　藤井利一

このたび、稽古をご一緒させてもらいました県西部の先生方とともに、合格となりましたことは同慶の至りです。これまで、ご指導、稽古頂きました県剣連会員の先生方、お世話になりました。また、たくさんの方から祝福のお言葉を頂戴しまして、ありがとうございました。

さて、長い修行期間となりましたので、前回（昨年秋）名古屋の審査あたりから書いてみます。午後二部夕方終盤のBでした。一人目は男性、二人目は女性（初めて）との組み合せで、どちらにも何とか一本入ったかと結果を待ちましたが、残念でした。家内が所用で上京しましたので、ビデオに撮ってもらっていました。見るとするでは大違いで、自分が思っていた姿でなく、一本になっていないし攻めていない。逆に相手の間合、攻めが良く見えました。自分の意識と実行とのズレを感じました。それで、出足の良い面打ち、応じ技を磨くとともに、中心を攻めてからの打突に心がけて稽古をしました。京都審査の直前になって、やっと攻めと打ちが調和してきたような感触をつかめてきました。

審査は久方ぶりの午後一部、初めてのDでしたので、AとB、BとCの対戦を見ることができました。A、Cからは時間内に一本頂戴できると感じました。

立ち会ってようすを見た後、中心を攻めると、竹刀を押さえに来て小手をかばったので、すかさず小手を打ちました。パン、切り落としたように決まりました。次は面で決めようと出端を狙いました。少し出遅れたのか、Cの竹刀が右肘に当たりました。持っていくようなことをしてはいけないと思い直し、打ち気にはやらず攻めていると、Cは打って来ようとしたので、出小手をパクリ。構え直して間合いに入ると、面を打ってきたので返し胴をパチン。またもや間合いに入ると打って来ようとするので、出小手がポコリ。面白いように決まって一人目が終了しました。二人目Aは攻めてくるものの打ってはきてくれません。面を打っても止められて時間は経つばかりでした。これでは良いところがありませんので、打てとばかり前へ出ましたら、面を打ってきてくれましたので、返し胴をパチンと決めることができて終了となりました。

二回の審査のことをそのままに書きましたが、昇段を目指す方の参考になれば幸いです。中年はけがと仕事の折り合いをつけ稽古しなければなりません。若いうちから取り組み、早い段階で気づくことができる人は幸せです。あなたが信頼する先生の教えを素直に稽古することをお勧めします。審判として試合に参加していると、運動能力があり体力がある者が無理な体勢から一本取っても喜ばしくなく、理合いにかなう打ちが出るとうれしいこの頃です。

徳島県社会人大会準優勝
阿波支部メンバーとともに（筆者中央）

剣道七段に合格して

美馬支部　藤本文義

平成二十四年四月三十日、京都七段審査に合格できましたことを、ご報告させていただきます。これも一重にご指導賜りました諸先生方のお陰様です。厚くお礼申し上げます。

最初の七段挑戦は、平成二十一年五月、名古屋審査での不合格でした。しかし、多くの立派な立会を拝見させて頂き、私自身の未熟さと、七段位に求められている高さとの距離の大きさを痛感しました。

まず、これまでの剣道への取組みの甘さと、欠点の再確認から始め、長い年月で身についてしまった悪い姿勢や癖は一朝一夕に改善出来るものではないと念頭に置き、諸先生方よりいただいたご指摘やご助言を常に反復しながら稽古を続けてまいりました。日頃の練習には、立会審査時間一分三十秒を充実した気力と体力を維持し、短い時間内で有効打突を取らなければならない難しさを克服する為に、二分間から三分間単位で交互に二本づつ打つ基本稽古と打込み稽古の実践に心掛けてまいりました。

審査当日、一人目の立会は互いの礼の前より気持が張りつめ、蹲踞、触刃から交刃に至るまでの時間を長く感じましたが、さらに間合を詰め相手の動こうとした瞬間を捉えて、初太刀、思い切った面を打つことが出来ました。後は互いに数回打ち合って終りになりました。二人目の立会では、私はBでしたのでAとCの両方同時に礼を行いましたが気の緩みも無く、相手に対峙が出来ました。今度は相手から初太刀の面を打って出られたのですが、動じる事無く、腹に力を入れると私の剣先が相手の喉元にささりました。一瞬「応じ技を出すべきだったのか。」と頭をよぎりました。後は、数回打ち合って終りになりました。

すでに合格を決められておりました阿波支部藤井利一先生と美馬支部中川正先生よ

り、「良かったよ。合格じゃなあ。」と声をかけていただきましたが、あまり期待をしないで発表を待っていました。発表では先に美馬支部の中川正先生の番号があり、幸いにも私の番号も見つかり、三人手を取り合って祝福をかわしました。

今回は前日より妻と同伴で京都にて宿泊、午前チェックアウトの後、別行動を取り、京都駅バスターミナルで待ち合わせました。徳島への高速バス車中での会話を少しご紹介させて下さい。突然妻が質問。

妻 合格おめでとう！いちばん誰のおかげで合格したの？

私 エッ？

妻 今度で何回目だったの？

私 六回目。

妻 じゃあ、五回目は一人で受けに行って不合格だったんでしょ。今回初めて二人で行って合格したのよネェ。じゃ誰のおかげ？

私 ハイ、お母さんのおかげです。ありがとうございました。

家族の理解と協力を得られなかったら七段はおろか今まで剣道を続けて来れなかったのではないでしょうか。本当に感謝の気持ちでいっぱいで有ります。

平成二十三年八月には徳島県高齢者剣友会に加えていただき、折に触れ、すでに七十歳・八十歳になられてもなお、お元気で剣道を楽しんでいらっしゃる諸先輩方を拝見すると、思いも新たにこれから十年、二十年と少しでも長く剣道を続けようと思っております。今後共どうか宜しくお願い致します。

七段合格に感謝

中川　正

平成二十四年四月三十日、京都市で行われた剣道七段審査会に於いて、お陰様で合格することができました。ご報告致しますとともに、紙面をお借りし、今日迄、御指導頂いた県剣連、西部支部の諸先生方に心よりお礼申し上げます。

今回の七段審査受験の取り組みは、過去四年の受験の取り組みと違って、自分なりに、稽古量、稽古内容も格段の違いがありました。各先生方から御指導頂いたことを、実行し、且、継続して守り抜き、自然に自分の物に出来た事が合格に繋がたと思います。審査の出番までの間、兎に角、前に攻めるのみ、勇猛果敢に何も考えずドスンと行こう。と、それのみ考えておりました。立ち合いが始まる迄そういう思いでいて、始めの掛け声から二人目のお相手との立ち合いの時間が終わるまで、何の恐怖も迷いもなく、終始攻め一筋で時間が過ぎたように思います。お陰様で、合格することができました。数えきれない先生方のご指導のお陰で今日の七段位合格があると思います。そうでなければ取れるはずもありません。

本当に有り難うございました。あらためて厚く御礼申し上げます。また、家族の後押しも大きな励みになりました。孫の二人にも感謝です。

技術の練習、身体の鍛錬、精神の練磨と、剣道の目的は考えられますが、やはり、行き着くところ剣道は、人間性の涵養にあると思われます。自己本来の面目を打ち出してくれる剣道を、これからも、健康に留意して続けていきたいと思っています。県剣連の先生方をはじめ、県西部支部の諸先生方には、今後ともご指導頂きますようよろしくお願い申し上げます。

生涯剣道に向かって

麻植支部　三木　毅

この度、剣道七段を授与され、その大きな喜びは大きな節目となった。

恩師平尾勝美先生が子供達に剣道を教えてくれることになった昭和三十二年のこと、中学二年生であった私は十人ほどの仲間の一人として剣道をはじめることとなった。

それから、数えると五十五年の時が流れている。剣道を志した者としては七段到達にあまりにも長い時間を要したという思いがある。

顧みると、警察官となって剣道特錬生の生活が始まり二十三歳で五段を授与され張り切って剣道に明け暮れていたが、その時大きな岐路がやってきた。それは剣道を続けるかそれとも警察官本官の道を進むのかということであった。

警察剣道師範の堀江先生に背き、警察官本官の道を選択し、刑事警察官の第一歩を踏み出したのである。

自分では、本官の道でやり遂げなければ申し訳が立たないという気持ちが常につきまとっており、常に頑張ってきた。お陰で多くの先輩や同僚そして後輩に支えられて警察官生活のほとんどの時間を刑事警察官として過ごし、大過なく退職を迎えたのである。

その間剣道から遠ざかっており、退職後の剣道はそこそこやりながら別のライフプランを描いていたところ、剣道連盟の理事長の話がはいってきた。私は万年五段の身であることから固辞をしたが、最終的にはお受けすることとなった。

理事長となったものの、剣道をあまりやらない理事長というレッテルを貼られることではいけないとの気持ちが段々強くなり六十歳での再開となった。理事長になっていなければ私の剣道は万年五段で終了していたはずである。

六十三歳で六段を授与され、平成二十四年四月の審査で受審資格ができるので、七段受審をしようかという気持ちから稽古を続けてきた。中でも自分の正中線と相手の正中線を大切に攻防することを強く言い聞かせながら、面・小手・胴の攻撃を意識してきた。こんなことは冷静に考えると基本中の基本でありながら、いざ展開すると自分に備わっていなかったことがありあり感じられた。若き時の試合剣道に明け暮れた昔の剣道が今も続いているのかと自問しながら、強い別離を意識した。

受審二ヶ月ほど前に多くの剣友から、受審時の展開を耳にしたことは、この上ない有り難いものであった。

それは、①多くを振らないこと、②そして力強く打つには右足を強く踏むこと、③あくまで正中線の攻防という三つであった。

受審会場で、受審者が元気一杯挑んでいる姿に接し、先に述べた三つを自分に言い聞かせ、そこで大きな賭けを決意した。特に受審時間九十秒の間三回しか竹刀を振らないということであった。

そして、竹刀を三回振る順序を決めた。

それは、小手・面・胴の順番であった。いよいよ自分の受審となり、まず、一人目は思いのまま小手狙い、そして出頭面を狙い、最後に胴抜きであった。その間十分な残心がとれ、あっという間の九十秒が終了した。二人目も自分の賭の通りに打突した。ところが二本目の面の時に相手に胴抜きに出られたが、正中線に進んでいたお陰で相手と体がぶつかるような状態になったため十分な抜き胴とはならなかった。そこで渾身の力で思い切って面に出た。相手も面を打ってきたが、私の面が先に当たっている手応えを感じた。

二人目もあっという間の九十秒であった。面をはずし「受審の様子を見てくれる」と声をかけてくれていた京都の井上先生の元にご挨拶に出向いた。井上先生は「あれでよかったのでないかと思うよ」と一言。その言葉を信じて発表をまった。その結果、実技合格に自分の受審番号を確認することができた。

形審査での相手の先生と挨拶を交わしたところ、その先生は、五十歳で六段をとり二十年目で実技七段合格したと述べられた。それを聞き、この先生の生涯剣道への強い思いに触れることができ、形終了後、再び挨拶を交わし共に合格したことを祝し合い、今後の健勝の言葉で会場を後にした。

私が受審した第六会場は、六十八歳以上の会場であり、約二百人ほどであった。最高年齢の先生は八十三歳であった。今、生涯剣道の声が定着している中でそれに自分を置き、実践している先生方の姿を目にし、今後さらに生涯剣道への思いを強くした次第であった。

これまで剣道の稽古でお相手をして頂いた多くの剣友諸氏に改めて生涯剣道への思いをお誓いして、七段合格のお礼といたします。

七段審査に合格して

桝山紹生

この度、岡山で開催された審査会で合格する事ができました。剣道連盟の先生方に厚く御礼申し上げます。

私にとって剣道七段とは、恩師である範士清原栄先生の段位でもあり遥か遠くのことのように思っていました。しかし、同級生や後輩達も合格していく中、自分もいつか合格するのでは、と思い受験を試みましたが、結果は「不合格」。自分なりに、ご指導いただいた点を参考に、取組む姿勢を改めることにしました。

まず最初に、よく注意されていたのが、『姿勢』です。もともと猫背であり腰痛持ちであった為、自然と前傾になり普段の立ち姿も悪く、合格した人のビデオを見ると、蹲踞から構えた瞬間、合格を予感させます。立会いで、見た目が悪いと見る人を引きつけません。日常の歩行姿勢から改善に取り組みました。

次に、『まっすぐに打突すること』相手より先に打つには、竹刀を最短距離で相手へと吸い込ませること。左手の握りや右手の使い方、左足の蹴りと引き付けを稽古しました。

最後に『攻め』立会の気迫から、相手を引き出すように攻め込むこと。その後の面・小手・胴への変化である。

以上の事を注意しながら稽古に励むこととしました。稽古は週二回、私の出身である阿南少年剣道教室で有賀先生を中心に小学生との稽古、引き続き阿南支部の一般稽古会。娘の通う高校での稽古会。職場の体育館で、気の合う仲間との剣道形・基本稽古を含めた稽古会。考えてみると週四回も稽古が出来る環境に恵まれていることを実感しました。

審査まで二週間を切った日のこと、またもや腰痛が発生し、病院と整骨院に通いましたが、あまり改善しないまま審査の日が来ました。腰痛は左足に症状が出ていた為、無理せず初太刀は返し技から行こうと決めましたが、相手も動かず、たまらず小さく攻め込むと相手が面に飛び込んできて私の面をかすめました。『やられた、またダメか』と脳裏を横切りました。しかし、気持を切り替え、気迫を込めた右足の攻めに対し、相手の手元が上がった所を小手、続いて同様に面を決めることができました。これが合格に繋がったのだと思います。

ある先生の言葉に、『気攻めで相手を動かし、然るべき時に振り抜く・打ち切る一本を打たなくてはならない』この言葉がほんの少し理解できたように思います。これからも学ぶ事がたくさんあります。自己の修錬を怠らず、段位に相応しい剣道、指導者を目指し精進してまいります。

最後に、剣道連盟の先生方を始め、多くの方々に支えられたことや、家族の理解と協力に深く感謝申し上げます。

七段審査に臨んで

矢武秀生

六段より欲も無く過ぎた十年、ごく単純に十一月の名古屋での七段審査会受審を意識した稽古を始めました。私は一〇三歳で去られた竹原常雄範士先生の徳島親道館剣道場の門弟です。当時の親道館は館長の下、西野先生と勝浦先生が先頭に立たれ、優等生である忠津先生をはじめ二十余名がひしめき合い稽古に励んだものでした。常雄先生が亡くなられた後、しばらくしてご子息の竹原実太郎先生が引き継がれ、いつの頃からか私も指導に加わり今日に至ります。その間、上八万剣道倶楽部に出向き吉本先生と杣友先生のご交流も頂きました。吉本先生は親道館の指導者でもあります。

七段審査を意識し始めた頃、渭東剣友会の吉田昌彦先生に教えを請いました。その後、親道館に入門する以前に通った東内道場（東内勉館長先生）を訪ね指導者にお加え頂き、ご子息の徹先生、守先生、茂先生とご交流の中、少しは技に冴も得られたかと思います。

稽古の中で一番のヒントとなりましたのは、剣窓に記されていた審査に対しての寸評「謙虚に師に学ぶ。姿を鏡に照らして無理の無い立派な立ち姿を作る。焦らず、迷わず、平常心で臨む。気で攻め、機を見、機を作り、機を打つ。」という菅波一元先生のお言葉でした。竹原実太郎館長先生には立ち姿また手の内などご意見を頂戴し、道場の鏡に写し、台に向かい、一息で打ち込むひとり稽古を主としました。

審査に当たっては、前日から当日、不思議と鈍いほどに落ち着いた自分を感じました。一人目の立ち合いでは、気で攻め気合とともに出ばな小手を打て、面も打ち切ることができ、二人目も同様の面と出ばな小手を打つことができました。おかげさまで初回で合格を頂け、名古屋を後にしました。県連事務局にご報告の際「ひょうひょうとしたところが良かったかも……」と長谷川様のお言葉でした。諸先生方には深く感謝を申し上げます。

七段を拝受して想うこと

板野西支部　福永　徳

平成三年十一月十七日名古屋で六段初めての受験で合格しました。そして二十一年後の十一月十七日、再び名古屋で七段を拝受いたしました。何か因縁めいたものを感じます。

六段に合格してから十一回、七段に挑戦しましたが、全て失敗でした。今思えば、一回で六段に合格したので、少し甘く見ていたようです。仕事が忙しいのにかこつけて、「まあ健康のために剣道をすればよい」と、自分に都合のよい理由を付けて、半ば諦めていました。

しかし、二年ほど前に、吉田茂先生、長崎秀信先生から「折角稽古をしているのに、今受験しなかったら、後二、三年すると身体が動かなくなりますよ、再度挑戦してみたら」と進言して頂き、眠っていた子が目を覚ましました。それから蔵本、徳島支部の稽古会、高齢剣友会、北島、藍住と一年間は週三、四回の稽古を続けました。各剣道道場、クラブ、教室の先生方、本当に有難うございました。

今までは、受験の前後は何となく自信が無く、不安でしたが、今回は「これだけ稽古したんだ」と言う自信と落ち着きがあったように思います。立会はいまず面を一本と思い打ち込むと、相手が首を横に振り空振りでした。しかし、今のは私の面だと思った次は、相手が面にきたので小手を打ちました。二人目はよく覚えていないのですが、終了間際に出鼻面がきまり、振り返れば「止めー」の合図でした。

少し自信は有りましたが、今まで全て失敗していますので、どうかな？という思いでした。発表を見て私の番号が有り、思わず年甲斐も無く熱いものがこみ上げて来るのを感じました。故堀江幸夫先生の「只管稽古」の教えがよみがえってきました。

今年七十二歳古希を過ぎて、遂に合格しました。人間目標を持って努力すれば達成できる。この事を子供たちに伝えていきたいと思います。いみじくもある先生が言いました。「福永さん七段が偉いのではない、それに向かって努力した事が立派で七段はその勲章だよ。」

私の剣道の始まりは十六歳（高校一年）でした。故柏原浩先輩に誘われ、何と無く始めたのですが、それが運の尽きでした。半年位してから猛烈な稽古が始まり、立てなくなる程でした。故堀江幸夫先生がまだ警察に入る前でしたので、三年間御指導していただきました。

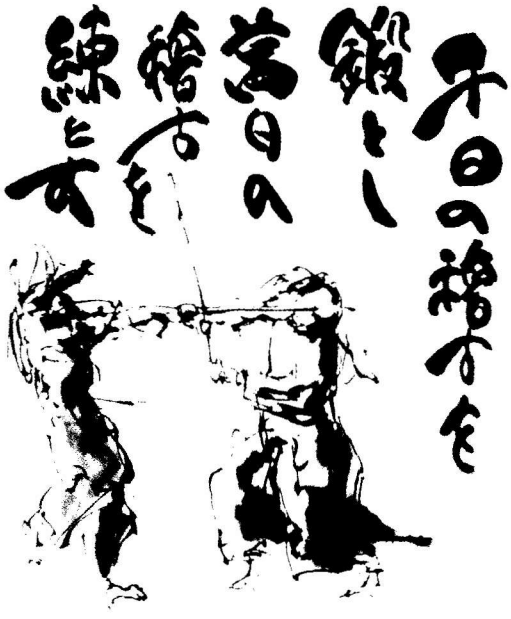
やがて先生は警察に入り、先輩は大学へ、私は一年後卒業し就職しました。指導者と場所を失い、たまに鳴門警察署道場へ行く程度でした。その後結婚し徳島へ移り、十三、四年間剣道とは無縁でした。

三十七、八歳の時、藍住で剣道をしていると聞き、尋ねて行き快く入会させて頂きました。高田亮先生、高田豊先生に御指導を頂き、その間十年。私も六段までこぎ着けました。

ある日、突然故堀江先生から「蔵本少年剣道クラブの井上先生がご病気なので治るまで行ってくれ」と電話があり、故柏原先輩からも強い要請も有り、自信も無く不安でしたが、渋々引き受けました。ところが井上先生は快方に向うことなく御他界いたしました。あとは御父兄の皆さんに泣きつかれ、それ以来二十数年が過ぎました。

今、蔵本少年剣道クラブは、小中学生二十名が毎週火・金・日と週三日頑張っています。又、日曜日は夜八時から中学生以上の稽古をしております。日曜日に稽古をしているところは少ないのか、外部の先生方もたくさんお見えになります。老若男女を問わず同じ条件で出来るのは剣道だけだと思います。

この素晴らしい剣道を、今七十二歳になった私は、身体が続く限り心技の向上を目指して精進したいと思います。どうか今後とも、御指導の程宜しくお願いいたします。



六段に合格して

鳴門支部　谷　博

平成二十四年四月二十九日、京都での審査において六段に合格する事が出来ました。二十三年十一月に名古屋で初めて六段に挑戦し、受審の難しさを経験して一分間に有効な技を出し、二人の対戦者に優勢に試合を進める難しさを感じました。京都でも練習・工夫した面を十分出せず、小手だけが数本打てたのですが、小手では前回同様不合格かと心配して次はどうするかと考えていた時、合格と発表され「やれうれしや」と帰って参りました。これも今まで多数の先生方に指導して戴いたおかげであると感謝しております。

小学校五年の夏、町内に住んで居られた故・山本清先生に指導受けたのを始め、徳島工業時代は伊原秀文先生、又、当時武道館にて練習をしていた関係上、館長の魚沢先生、赤沢先生に可愛がって稽古をつけて戴きました。同時に県警の堀江先生を始め岡本先生、坂下先生、川田先生等に指導して戴きました。以来、地元鳴門にて子供等の指導の手伝いをしながら、自分の一生の内に「五段位まで取れたらいいな」と思いつつ自分の練習をせぬまま仕事に打ち込んでいました。

ある日鳴門武道館の練習で木原先生と稽古した時なんと面打ち落とし面を二回続けて打たれたのです。以来、鳴教大剣道場へ週二回、瀬戸中に週一回というペースで「木原先生から面が取れるよう」に練習を積んで参りました。おかげで四段、五段、六段と進んで来る事が出来、昔考えていたよりも上のクラスになりました。木原先生はあまり細かく指導されませんが、常に横から見ていると教えられる所が多く、考えることを覚え、テーマを決め、工夫してクリアして行く事を楽しみにやって居ります。それに加え、木原先生の御供で講習会、稽古会等に参加させて戴き、目を開かせてもらいました。これも大きな私の経験となりました。

六十五歳となった今、どこまで出来るか分りませんが、前向きに工夫している剣道を進めていこうと思います。今後は故山本清先生から言われた「地元の子供の指導をしっかりしてやらないかんでないか」との言葉を思い出しつつ剣道人生を歩みたいと思います。今まで御世話になった先生方に感謝し、今、恵まれた環境の中で行える同好の仲間達との練習の大事さを感謝して、六段を取って気持ちを緩める事なくこれからも精進して参りますのでご指導頂きますようよろしく御願いします。

剣道六段に合格して

徳島支部　金野裕美

平成二十四年八月二十六日、岡山県での審査会で、六段をいただきました。私は、小学二年生から剣道をはじめ、中学、高校、大学と、指導してくださった先生、先輩、仲間、素晴らしい環境に恵まれ、剣道を続けてまいりました。出産を機に剣道から離れ、十年間、再開するとは夢にも思わず、仕事や育児に追われ、日々過ごして参りました。

再開のきっかけは、娘が小学生になり、この子にも剣道をしてほしいな……と思うようになり、私が始めたらやる気になるかなという期待から、思い切って十年ぶりに防具をつけてみました。

主人がお世話になっている刑務所の道場で、皆さんの稽古に参加させてもらいながら、一からのスタートで、手も足もバラバラの状態からの再開でした。が、自分が思っていた以上に楽しく、先生方に指導していただける事の新鮮さ、稽古後のおしゃべりや、食卓での主人との会話までもが楽しいもので、本当に剣道を始めてよかったと思っています。

今回の審査は、二度目のチャレンジでした。初めての審査会では、自分でも落ちて納得の内容で、打たれるのが怖いので、機会でもないのに勝手に打ちに出て、お相手関係なしといった感じでした。今思えば、審査以前の問題ですが、これから、自分の剣道をどうしていこうと悩み始めた頃、「試合にも出て、色んな経験を積んでみたら」という主人の言葉で、各種の予選にも参加してみることにしました。運よく国体成年女子の中堅として、ブロック予選突破を目標に切り替え、全国の強豪選手との試合を沢山させていただきました。練習試合でも審査の時と同じで、打たれるのを恐れ、ひとりばたばたして、チームの足を引っ張るばかりの散々な結果が続きました。ブロック予選直前まで、どうしようこのまま終わってしまうのかなと、逃げ出してしまいたい気持ちでした。監督が何とかしてやりたいと必死で稽古をつけてくださる、先鋒がチームを引っ張ってくれる、大将の先輩が、どうにもならない私を大きな器でいつも受け止めてくださる、常に励まし、指導してくださる温かい先生方がいてくださる。そして家族がサポートし、応援してくれている。相手に恐れている場合ではない、今ある私の実力全部出しても勝てないだろうけれど、持っている力も出せないような試合だけはしたくないという思いで臨みました。不思議と、お相手と相対しても恐怖がありませんでした。残念ながら、予選突破は叶いませんでしたが、自身の壁を、周りの人たちに越えさせてもらえたと思います。

審査でのお相手は、男性だと思い込んでいたのですが、一人目は女性でした。予想外でしたので、動揺しましたが、色々考える暇もなく自分の番になり、意識を取り戻した時には納めの蹲踞でした……二人目の礼で我に返り、次は強い気持ちで勝負させていただこうと望みました。ブロック予選一週間後という審査でしたので、諦めることなく、気持ちの切り替えができたのでは

ないかと思います。面をはずし、観客席へ戻り、防具をしまい、後の方々の立ち合いを拝見しました。終わってみると、技のキレのなさや、打突の弱さ、捌き方、粗さと、たった二分少々の立ち合いで、次回までの課題が山積みであることに気づかされました。合格発表で、無いと思っていた自分の番号を見つけた時には涙がでました。支えてくださるたくさんの方の顔が次々と浮かびました。合格の知らせを聞いて、自分のことのように喜んで駆けつけてくださったり、お祝いの言葉を沢山頂戴しました。感謝の気持ちでいっぱいです。

仕事と家庭の両立、心身のバランスの変化など、思うように稽古できないもどかしい時もありますが、協力してくれる家族に感謝し、目標とする先生、先輩方に少しでも近づけるよう、時間を見つけて、これからも剣道に携わっていきたいと思います。

六段審査に合格して

警察支部　野崎寛治

去る平成二十四年八月二十六日、岡山県において実施されました六段昇段審査におきまして、合格することができました。これもひとえに、ご指導いただきました皆様のおかげと感謝しております。またこの度、一筆の機会を与えていただき、有り難く思います。

私は、中学一年で剣道に出会い、故山田冨康先生、故寺内慶裕先生ほかのご指導をいただき、警察官拝命後、昭和五十三年春に県警特練員となり、故堀江幸夫先生、坂下彦之先生ほか先生、先輩方の御指導を仰ぎ、昭和六十年春まで県警機動隊で稽古しておりました。その後、防犯（生活安全）の刑事となり、仕事にかまけ稽古らしい稽古から遠退いておりましたが、平成十八年、県庁剣道部からお誘いを受け、月に一度の稽古会に参加させていただくようになりました。そして、平成二十四年春に県警機動隊に転勤となり、再び稽古ができる環境に身を置くことが出来ました。

このような中、日帰り出来る岡山での審査の案内を知り、また周りからの勧めもあって、昇段審査を受けることに決めました。

とは言いましても、四月から再開した付け焼刃では、幾度かの受審は覚悟しておりました。しかし、同じ受けるなら笑われない程度には仕上げておかねば、同じ受審に来られた方々に失礼と考え、受審を決めた六月ころから審査を意識した稽古を始めました。

幸いにも、私の稽古環境は、近藤口先生、平野誠司先生、ほか諸先生方や機動隊特練員というものであり、これ以上の稽古が出来る所はそうざらに有るものでは無く、非常に恵まれておりました。

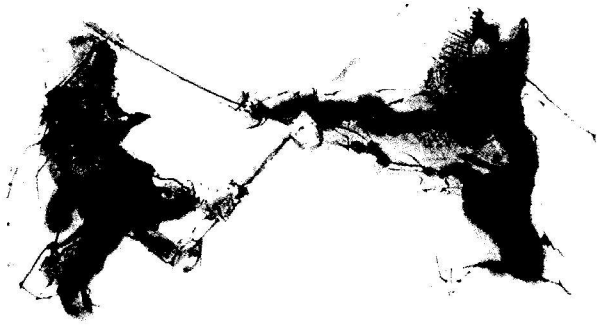
今回の審査に向けて私が心掛けたことなど、諸先生方や剣友の皆様にお話しするほどのものはありませんが、一応披露します

と、一つに、中心を取らせないことを意識しました。兎角、中心を取ろうと仕勝ちですが、無理をせず取らせないことを心掛けました。二つに、姿勢を意識しました。ブランクが長かったせいか、または稽古相手が凄過ぎるのか、撃っても凌いでも体勢が崩れてしまっていました。ですから、ここでも無理をせず、体を崩さないよう心掛けました。そして、審査の一週間前ころからは、平野先生の胸を借り、審査を想定した一分間二本の稽古をいただき、一分間という時間の感覚をつかむことと、初太刀を打ち切るとともに、最後まで心身を充実させることに重点を置き、本番に備えました。

こうして審査の日を迎えた訳ですが、会場では受審者の多さに圧倒されるとともに、一分間の短さを目にし、不安と緊張が高まるばかりでした。しかし、この期に及んでジタバタしても始まらないと気持ちを入れ直し、稽古で心掛けたことに加え、「慌てないこと」「撃ち過ぎないこと」を意識して臨みました。私は、Cであったので、最初の相手であるBの方の手の内を見ることが出来、落ち着いてしっかりと構えてくるタイプであり、慌てさせられることはありませんでした。続くDの方は女性であり、あまり女性の方とは稽古したことが無く、またK特練員から「女性はやり難く、当たるとやばいですよ。」との言が頭を過ぎりましたが、意識せず、打ち過ぎないことだけを心掛けました。とは言いましても、満足出来る程の出来とは思えませんでした。ところが、実技後に挨拶に行くと、お二方から「今日は参りました。受かってますよ。」との言葉をいただきましたので、実力以上の出来であったものと思われます。

この度の合格は、職場での立場上、ほっとするところが大きいのですが、再び剣の道を歩めるようになったことを心から嬉しく感じております。

これを一つの励みとし、精進する所存ですので、皆様よろしくお願いいたします。



六段に合格して

美馬支部　横畠　保

平成十七年八月に高松で行われた審査を最後に、稽古も審査も遠ざかっておりましたが、今回、審査会場が岡山で近いから、緒に行こうと、先輩から熱心にお誘いを頂き重たい腰を上げました。高松での審査以前にも東京、名古屋、京都、福岡と受験しましたが、稽古せず旅気分で行っておりましたので、不合格でも落ち込むことも無く反省もしないと言う状態で真剣に取り組んでおりませんでした。

以前、大石雅生先生から「研心館（故滝下勝先生館長）の門下生で中央審査を通ってないのは横畠だけになりましたよ」と励ましを頂いておりました。春風館の青木茂生先生教士七段、久次米繁興先生、大石雅生先生、後藤徳朝勝先生、松田久司先生は各錬士六段で七段へ向かって調整中、他に誰か居られなかったか考えても私だけになっておりました。それでも、稽古と言えば西部地区での審査会の前に行われる朝稽古で先生方に稽古をお願いする程度で、その時でも面を付けるのは遅く外すのは早く、飲み会の時とは全く逆の状態でした。

私は、剣道以外に狩猟、スキー、登山、ソフトボール、下手なゴルフと色々遊びに忙しくしておりました。そういうこともあり稽古にも余り身が入りませんでしたが、三十年来所持していた銃も、孫を抱く手で殺生は止めろとの忠告があり手放して、猟も止め、町内のソフトボールチームの監督も十年を機に交代してもらい、少し時間が出来た時に今回の審査のお誘いがありました。

剣道から少し離れておりましたが、この審査を機会に少しづつ稽古を続けて、合格するまで挑戦しようと決心し、先生方にご指導をお願い致しました。四月に受験票を出してから稽古を始めましたが、当然に体は動かないし、次の日にダメージは残ります。そして、審査を意識すればする程自分の未熟さを思い知らされて受験票を出した事を後悔していたところに、持病の腰痛、そして、足に風が当たっても痛い様な痛みに追い打ちをかけられ、逃げ出す言い訳ばかり考えておりました。そんな時、阿波支部へ稽古に伺った時に、一村昌和先生から「それはいい、そういう体調が悪い時こそチャンスですよ」と励ましのお言葉を頂き、少し開き直ることが出きて随分楽になりました。

今まで、ほとんど稽古もせず急に思い立ったように審査を意識してもそんなことは許される筈もありません。今回が不合格なら十一月、来年と考え直し、体調が悪い時は稽古を休ませて頂き、審査を意識せず先生方に頂いたアドバイスを少しでも直すことを心掛けました。お陰様で今回、課題が多い中で幸運にもめぐまれ、合格を頂きましたが、稽古不足は自覚おりますので、少しづつ稽古を重ねて行こうと考えております。

今回の審査に際してご指導を頂いた美馬支部の先生方を始め、県西部地区の先生方に感謝を申し上げると共に、今後のご指導をお願い致します。

剣道六段に合格して

鈴江　俊和

平成二十四年八月二十六日、岡山の審査会において六段に合格することができました。これもひとえに加茂名少年剣道教室をはじめ、北嶋少年剣道教室、徳島市立高校剣道部ＯＢ会、徳島県支部の先生方の御指導を頂いたお陰と感謝し、心から御礼を申し上げます。

私は中学校で剣道を始めたといっても稽古熱心ではなく、高校一年の夏合宿までやめ、正課の授業も二年で終り、それで剣道とも縁がきれてしまいました。

フタタビ剣道をはじめたのは、息子達が加茂名少年剣道教室でお世話になりだした三十五歳の時からで、それから審査も受けるようになりました。

三段までは順調に昇段しましたが、四段は基本が出来ていない中途半端な稽古のせいで合格するまでに五年がかかりました。

五段の審査では思いがけず一回の審査で合格させていただきました。

六段は県外での審査という事や、又仕事の都合や先に審査を受けられた方々の話を聞いていると、これは今の力では合格する筈がないと足が向きませんでした。それゆえに五段に合格してから十一年がすぎてしまいました。定年になってから一年勤めていた会社も平成二十四年五月末で退職しましたので、秋の名古屋での審査に行こうかなと思っていた矢先、友人から八月に岡山で審査があるので一緒に行こうという話があり、申し込みをしました。まあ今回は審査に向けた稽古もしていないし、合格する筈もないという気持ちから様子を見てこようとなりました。しかし、審査にいく以上は稽古は十分にして行こうと思い、加茂名での稽古以外に北島少年剣道教室に出向くなどし、稽古に頑張って励んでやりました。

そのうちに審査の当日となり、岡山の会場には昼前に入りました。審査は午後からでしたが、立合の順序、所作は、前の者のすることを見ればよいと思っていましたが、審査が始まると、最前列に並ばされてしまった。それでこれはどうしようと思っていると、案の定、立位置の左右を間違え注意されてしまいました。戸惑っているうちに立合いが始まってしまい、もうこれはしょうがないと覚悟をきめ、最初は伊賀先生がいっていたように腹に息をため一気に面を打って行き、初一本は面が当った。後は無我夢中で、小手も打てたかなという感じで、始めての六段の立合は終りました。また今度という思いで発表を待ち、番号を見ると合格していました。次に形審査に入り、小太刀の一本目で正面を打って行くと相手が小太刀を落としてしまいました。「またか」と思い、どうなるのかとの心配のうちに形審査も合格することが出来、六段の審査に合格することができました。これで良いのかなという反面、合格できないと思っていたので、うれしい気持の一日が終った。

これからは六段に合格したという自覚をもち、それにふさわしくなるように稽古に励みたいと思いますので、御指導よろしくお願いします。

剣道六段審査に合格して

敦賀晋平

平成二十四年五月、愛知県枇杷島スポーツセンターで行われた昇段審査において、六段に合格させて頂きました。

これも自分の努力の賜物……ではなく、偏に日頃からご指導を頂いている先生、先輩方のおかげであり、また同僚や剣道連盟の皆様との稽古、大学や高校での稽古など、全ての剣道家の皆様のおかげであると、感謝しています。

本当にありがとうございます。

私は昔、審査にあまり意識を持っていなかったので、同級生から二年ほど受審が遅れていました。そのため、今回が初めての全国審査でありましたが、受ける前は、

「必ず一発で合格してやる。」

という意識を強く持っていました。

三十歳を越えたころから自分の剣道を見つめ直し、強く正しい剣道を理想にやってきました。

特に意識したことは、左手をなるべく上げず心を動かさないこと、打突の機会には自分の身を捨てて打ち切ること、姿勢を正しく大きく構えることを意識しました。

しかし、実際に昇段審査が近づき、稽古で一分の模擬審査をしたらいいと言われ、特錬の先輩と同僚にお願いしたところ、自分が形ばかりにこだわってしまい、相手に試合の感覚で先をかけられ、一分が長く苦しく感じました。

稽古後も、

「もっと打たなあかん。」

「自分から仕掛けていかな。」

とアドバイスを頂き、これではいけないと気持ちを入れ替えて稽古に取り組みました。

審査当日、全国から集まった人数は千三百人を超え、その規模の大きさに驚きました。この中で審査をするのかと、少し緊張しましたが、

「五段に昇段してからの五年間、自分がやってきたことを信じてぶつけよう。それでだめならしょうがない。」

と開き直り、心の内は試合のつもりで、打突の機会には打ち切ることのみに集中しました。

とにかく立ち上がっての一声は会場の誰よりも大きく、気合を入れて発声し、

「来るなら来い、来ないなら行くぞ。」

という気持ちで挑み、気がつけば立会いが終わっていたように思います。

終わった直後は

「名古屋まで来てこんなに一瞬で終わるんか。」

「もっとこの雰囲気の中で剣道をしたかったな。」

と思うほどあっさりとしていましたので、次の結果を見たときは実感もなく不思議な気持ちでしたが、形審査を終え、

「二次審査は全員合格です。」

と言われたときには素直に嬉しさが溢れてきました。

今回の合格を一番喜んでくれたのは一緒に付いてきてくれた妻であり、その笑顔を見たときに、合格して良かったと心から思いました。

自分一人で剣道は成り立たず、家族や周

りの人たちの支えで剣道ができているのだと改めて実感しました。

また思い返せば小学五年生から歩んできた剣の道は、親の支えがあってここまで続けてこられたもので、あらためて両親に感謝しています。

これからは六段の修行が始まりますが、この機会に自分の剣道をもう一度見つめ直し、あらためて強く正しくを目標として、

「打って反省、打たれて感謝」

の言葉を胸に、向上心を持って稽古を続けていきたいと思います。

そして、これから徳島の剣道を支えていく子供達や後輩と一緒になって稽古に励み、剣道の素晴らしさ、尊さを少しでも伝えられるよう、自分も剣と共に成長できるよう努力していきたいと思います。

今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。

六段合格に想うこと

警察支部　南谷雅彦

神戸に向かう新幹線の中での私は、かなり饒舌でした。名古屋で行われた六段審査に合格、次第に沸き起こる喜びを表現する私に、電話を受けた先生や上司もさぞかし驚いたことと思います。

私は、六歳から剣道を始めたものの、たいした実績もなく、単に運動神経だけの男でした。そんな私が、警察に入ったのを機に、運よく剣道特練員に指名され、以後、剣道漬の毎日を送ることとなりました。稽古は、坂下・松村両師範のもと、米倉先生、近藤先生をはじめ、平野先生等、錚々たるメンバーで行っており、一日三～四部練習という過酷、いや、素晴らしい環境の中でのものでした。ただ、本当に強くなる人というのは、「絶対に選手枠を獲る」等の信念を持ち、それに見合う「努力」をしておりましたが、いかんせん、根性・努力とも足りない私は、その日の稽古を消化するので精一杯という感じでした。

このように私は、競技者としては三流でしたが、特練員として過ごした七年間は、苦しかったことも含め心底楽しかったと思える、かけがえのない時間でした。

その後私は、刑事部門での勤務が主となり、剣道とは無縁の生活を送るようになりました。しかし、剣道の魅力というのはすごいもので、周りの方の昇段、また、剣道を通じ成長していく息子の姿を見るにつけ、自分も六段に挑戦しようと考えるようになりました。ただ、当時の私は「警察や教員の現役組はもういない」「まあ、受かるだろ」等と、何の裏打ちもない自信から、何の準備もすることなく審査に臨みました。奇しくもそれが、平成十九年十一月の「名古屋」でした。そして、当然のごとく不合格。しかし私は、自分の努力不足を反省することなく、「出頭もあったし、返し銅もあって打ち勝ったはず」等と自分を肯定し、

最後には、「もう二度と受けない」等と言い出す始末。今にして思えば、本当に恥ずかしく、さもしい限りです。

その後の私は、まさに、剣道から目を反らし、仕事に没頭することで自分を誤魔化してきたように思います。

平成二十四年七月、私はある理由から六段への再挑戦を決意しました。仕事では検視官という立場上、防具をつけての稽古に多少なりとも制約があると考えた私は、素振り三百本と数キロのランニングを日課としました。当初、不安が払拭できれば、という思いで始めたわけですが、次第に竹刀を振る力、前に出る脚の力を実感するようになりました。

そして、何よりも嬉しかったのは、久々の稽古にも関わらず、笑顔で道場に迎え入れて下さった先生や先輩、剣友の皆さんでした。そして、稽古の中では、「構え・攻め・打ち・合気」等々、いろいろなアドバイスを頂きました。それらは、即実践できないまでも、素直になることで全てが新鮮に感じ、少しでも近付きたいと思えるものでした。特に元に立たれる先生方には、その攻防の中に必ず「懸」と「待」を持ち合わせていると実感した時、「剣道って、なんて素晴らしいんだ！」と感動すら覚えました。このように、「努力」とは程遠いものでしたが、私なりの濃密な時間を過ごしたように思います。

そして迎えた審査当日。順番を待ちつつ寝入ってしまうほど不思議と落ち着いており、改めて気持ちを作り直し審査に臨みました。すると、何故か身体、竹刀とも〝キレキレ〟自分でも驚くばかりの立会で、終わった後は声が枯れて喉が渇ききっていました。

そして合格。それから、冒頭の新幹線のくだりになったわけです。

この度の受験にあたり、たくさんの方々に支えられました。そして、改めて剣道の素晴らしさを教えて頂き、体現することができました。この感謝の気持ちは絶対に忘れません。本当にありがとうございました。

剣道六段に合格して

鳴門支部　岡本　茂

平成二十四年十一月十八日に剣道六段審査会（愛知県）において合格しました。所属する鳴門支部並びに徳島県剣道連盟の諸先生方には熱心にご指導を頂き紙面を借りて御礼申し上げます。

六段審査に挑戦し合格するまで、仕事に忙殺され剣道どころでなく、週一回稽古ができれば御の字みたいな時期が続いた。一方で周りの方々は昇段し、私は一人取り残されたなと思った時期もあった。その頃の稽古会で徳島県剣道連盟理事長の近藤巨先生から自身の経験も交え「今はしんどいだろうが、チャンスは必ずある。それに向けて頑張れ」と話して頂いたり、鳴門支部長の佐伯守夫先生からも「岡本、まずは仕事や！焦るな！」との話を聞いて、自分の要領の悪さを棚に上げ、環境のせいにして六段受審から逃避しているなと思った。そこで来るべき時期が来たら挑戦してみるかと思うようになった。

平成二十四年四月より私は介護職員として更なるスキルアップと介護福祉の国家資格・介護福祉士の取得を目指し、四国大学短期大学部・人間健康科・介護福祉専攻に自分が保持している資格（ヘルパー二級）を利用して、社会人入学することになった。この間稽古ができる千載一遇の機会と思い、今年中に六段取得を目標に定めた。

鳴門支部の稽古会では元木武先生・近藤敏晴先生・松本日出夫先生・櫻井一志先生・石村行範先生には少年指導で疲れているのにもかかわらず熱心に基本打ち・地稽古の相手・審査の立会いの練習をして頂いた。鳴門教育大・木原資裕先生には剣道に取り組む姿勢、構え方から懇切丁寧なご指導を頂いた。まず力試しに春の京都審査会、夏の岡山審査会に挑戦したが結果は不合格。これまでの審査内容を反省し、前述の先生方のアドバイスを頂いた。

そこで課題として、

一、自分の打突できる間合ができるまで溜めてから打突を繰り出し、打ち切ること。

二、どんなことがあっても不用意に後ろに下がらない。

三、あくまでも自分のペースで相手と立ち会う。相手のペースについていかない。

以上三点を掲げ、今年中の六段取得を目指し、秋の審査会に向けて稽古を再開した。

稽古の幅を広げたいなと思案していたら、社会体育指導員繋がりでお世話になっている板野東支部・武田修典先生に松茂第二体育館での稽古会に誘って頂いた。審査時間一分間を覚えこませる練習と面を打ち切る練習を何度も繰り返し、その後に川田武志先生との厳しい指導稽古をお願いした。前述の武田先生や板野西支部・月岡陽市先生には六段の実技審査の傾向を教えて頂いた。自分の剣道のいいところを見て頂けるようにとのアドバイスから「剣道プレゼンテーション」（講義でプレゼンテーション概論という科目があるので）と題し、何度も立会いの練習をして頂いた。苦手な日本剣道

形は板野東支部・西堀和文先生に稽古会で顔を合わせたら相手になって頂き、構え方から所作事まで微に細に教えて頂き、審査に備えた。

愛知県での審査当日、大勢の受審者の数にビックリしたが、周囲は気にせず審査に集中することを考えた。実技審査開始後一時間位で自分の番が巡ってきた。初めの礼から終りの礼まで基本に忠実に、打突は攻めて打ち切ろうと立ち会った。一人目は私の苦手な女性で（過去二回共女性と立ち会いました）嫌な予感がしたが、六段を受審されるだけあり、しっかり構えてくれたので男性と思い、自分の間合いで面を打ち切れた。二人目は私と同じ位の体格の男性で、積極的に自分の得意技を自分の間合いで出すことを考えた。立会いの中で自分が攻めて相手が後ろに退った時に面を繰り出すことができた。攻めて打ち切る目標は達成できたので大丈夫かな……と振り返っていると、程なく実技審査の合格発表（午前の部・前半）が行われた。

自分の番号「514A」を見つけた時には一安心。間もなく、係員の誘導で日本剣道形の会場へ。日本剣道形審査番号「1076」を渡され剣道形の審査を静かに待った。形審査は周囲は気にせず、剣道形を最後までやりきることだけ考えた。

結果は「合格」。発表を聞いた瞬間、ホッとしたのかその場に座り込んでしまったのを覚えている。

今回、幸運に合格することができたが、これは更なる高いレベルでの修行の機会が与えられたこと、次（七段審査）への出発点と捉え、奢らず、家族・周囲への感謝・理解・協力そして徳島県剣道連盟の諸先生方の熱心なご指導があればこそ続けられることを忘れず、時間と体の許す限り精進したい。

審査当日、徳島県剣道連盟事務局長の藤本雅史先生や社会体育指導員繋がりでお世話になっている名西支部・久保隆司先生からご多忙にもかかわらず早々に電話で「おめでとう。これからも更なる精進を」との言葉を頂いた。そこでやっと六段の実感が湧いてきた。

最後に私事だが、原稿作成時期が後期試験や介護実習計画・レクリエーション計画（二月十一日より特別養護老人ホームで実習です）に忙殺される時期と重なった。段取りが悪く、稽古せずにボヤボヤしていたら、草葉の陰から亡父（岡本憲三）が鬼籍に入られた先生方と一緒に「おい！茂！稽古するぞ！稽古！なにをグズグズしよるんな（怒）早よう稽古せんか！」と大きな声で言いながら竹刀片手に私の所にやってきそうである。（汗）

剣道六段に合格して

柳谷照男

この度、平成二十四年十一月十八日、愛知県名古屋市での昇段審査において、六段に合格させていただきました。

これもひとえに、剣道を再開するきっかけを作っていただいた、山川スポーツ少年団修錬館の植田一夫先生をはじめ、日頃から温かくご指導いただいた先生方や仲間の支えがあっての結果です。紙面をお借りして、心よりお礼申し上げます。

私と剣道の初めての出会いは、昭和四十八年四月に県立川島高校へ入学した時、何か部活をやりたいと思い、柔道を始めてみようと思い、柔道場を目指して歩いて行ったのですが、中学校で野球を三年間頑張っていた友人が、剣道部に入部していたことから、その友人から誘われたのがきっかけで、剣道を始めることになりました。

同級生の中で中学校での剣道経験者は二人でしたが、結果としていつも団体戦のメンバーにはなれず補欠ではあったものの、二段までは昇段させていただきました。卒業し社会人になってからは、剣道をする機会はなかったのですが、三年間やり遂げたこと、その中で経験したことが、いつも自分の心の支えであったように思います。

そのような自分が剣道と再開するきっかけとなったのが、娘が小学校三年生の時に剣道をやりたいと言い出したことから、山川スポーツ少年団修錬館の植田一夫先生にお世話になることとなりました。

私自身は二十年以上剣道から離れていましたので、まさか自分が剣道をするとはその時は思ってもいなかったのですが、先生から、「動く人形を子供に打たせるほうが練習になるので、子供の打ち込み台になってやってくれ」と言われ、軽い気持ちで始めてしまいました。

当時は、六段など夢のまた夢で、私のようなものが取得出来るものではないと思っていたように記憶しております。

剣道を続けるために昇段を目標とし、四段までは幸運にも初回審査で合格させていただいたのですが、五段審査は三回目でやっと合格することができました。

この経験から昇段するためには、何か自分が変わらないと昇段することはできないと思うようになり、五段審査に向けて防具を付けての練習の機会も少ないことから、毎日、切り返しの素振りを百回行うことによって（剣道家にとっては、当たり前？）、自分自身の心を強くしたことが、合格につながったように思います。

六段審査に向けては、練習時間があまり取れない中で、自分を変えるものはないかと考え取り組んだのが自転車での通勤でした。

仕事も忙しくなり、練習時間もあまり取れないことから、天気の良い日だけですが自転車通勤を続けたことで身体のバランス感覚もよくなり、動きも安定して良かったように思います。

テレビでも紹介されていましたが、テニ

スのクルム伊達公子が二〇〇八年に復帰したときに取り組んだのが、股関節の運動機能の強化に取り組み、膝の筋肉を強化するよりももっと大きな股関節の筋肉を強化するほうが、安定した動きになると言うことを話されていたことからも裏付けされたように思います。

また、発声について、大きな声を出すことが気迫になり、緊張もほぐれると考えていたのですが、「六段以上になると、その声では剣道を軽く見られますよ」と言われ気づいたのが、真剣に相対した時の声は、下腹部から湧き上がるような声ではないのかと思い、変えてみました。審査当日にもそのような声を出している人が数名おられました。

心構えとして、審査当日には、会場に入ったら、「じたばたしない」と何人もの先生からアドバイスをいただいておりましたので、あえて軽く準備運動した以外何もせず順番を待って、いざ立ち合いとなり自分がどのように攻めたのか、初刀に面を打ったのですが相手に当たることもなく、それから頭が真っ白になり、何を打ったのかまったく記憶がなく、一人目、二人目と終わってしまいました。

このような状況だったことから、自分の心の中では、今回は審査の雰囲気を味わうだけに来たのだから仕方ないかと言い聞かせていたのですが、合格発表の時、自分の番号を見つけた時には信じられない思いでした。

あえて無心になれたことが、合格につながったのかもしれません。

剣道に出会い、また再開できたこと、このような自分が、今回ここまで昇段できたことについて、多数の先生方がご指導してくださったおかげで、感謝、感謝の思いです。また、山川スポーツ少年団修錬館で、先生方と一緒に指導をさせていただいていたと思っていましたが、逆に子供達からたくさんの事を教えてもらっていたのだと実感しております。

これからも、剣道を楽しみ生涯剣道を目指して頑張っていきますので、よろしくお願い致します。

剣道六段への挑戦

三好支部　島尾　眞且

平成二十四年十一月十八日名古屋の審査会において、五回目の挑戦でやっと六段に合格することが出来ました。

私が剣道を始めたきっかけは、今から二十六年前の山城剣道修錬クラブでの鏡開きで、親子で剣道の試合をする機会がありました。負けてなるかと面を着けて試合に臨んだのですが完敗でした。「親の面目丸つぶれ、子供に剣道しっかりせえよと偉そうな事を言えたものでは無い」と深く反省、平田照男先生にお願いする事となりました。四人の子供達と剣道で汗を流しながら、次第に昇段試験に挑戦して行くようになりました。稽古を重ねて行くうちに剣道の難しさ奥深さに何度も悩み苦しみ、萩田奉弘先生、増田和広先生等のご指導によりやっとの事で五段に昇段した時は、「もうこれで昇段審査は受けなくていいだろう、六段は夢の又夢」と諦めていたのですが、平成二十二年川崎剣道クラブの喜多一幸先生、藤本常巳先生が福岡と名古屋で六段に昇段され、それを機に尻をたたかれ、翌年四月頃から六段に向かって本格的に週四回稽古に励みました。いつも稽古の度、山城では平田先生、川崎では合田秀實先生始め各先生から的確な助言を頂きながら、その年福岡で初挑戦したのですが、人数の多さに圧倒され何にも出来ずに終わりました。名古屋では中途半端な攻めで自滅、しかし同行していた堀川修先生が見事合格され、川崎では三人の先生が立て続けに六段合格の快挙となりました。

その年の暮れ川崎で稽古が終わった後の雑談の折、今迄川崎で鏡開きの時に剣道形をした人は、皆六段に合格している事を聞き、勧められ、それにあやかろうと二つ返事で引受けました。そのジンクスが後に現実のものになるとは思ってもみませんでした。

二十四年京都での審査会では、「打つ機会はまあまあですが、手と足が合って無いのでそれを直さないことにはまず無理だろう」との評価でした。

どの様な立ち会いをしているのか一度見させて貰うと言って岡山の審査会には喜多先生が同行。その評価は「これじゃあ何回受けてもまず無理、手と足がバラバラ、打ちも棒打ち」とのことでした。

それからは、足さばき、左手首のスナップを効かした素振りを毎日行うよう心掛け、次第に名古屋の審査会が近づきましたが、稽古不足の課題を残したまま、「あー又滑りに行くのか」という気持ちを拭い去ることが出来ないまま当日を迎えました。びっくりしたのは対戦相手の一人が昔稽古したことのある県外の先生で、互いにお手柔らかにお願いしますと挨拶を交わし、着装も確認しあいながら審査に臨みました。「今日もこれは駄目だ、ヨシ打たれてやろう」と心を決めた途端、今まで打ってやろう、打ってやろうと言う気持ちだったのがいつの間にか消え、自然と肩の力が抜けておりました。審査が始まっても冷静さを失うことと無く前にジワジワ攻めて入って行くと相手が動いたので、無意識に打った「コテ」

が審査員席のすぐ前で決まり、「あれ今日は相手がよく見えるなあ」と感じつつ、自然といつも稽古で言われている「攻めて、攻めて、相手が動いたら打つ」という状態に成っていました。その後で「メン」も一本決まり、いよいよ二人目、ジワジワ攻めて入ろうとした瞬間、相手が出てきたので「コテ」を打っていました。攻めて入ろうとするとすぐ出てきたのでそれに合わせたものの不完全燃焼のまま終了。今度も駄目かなあとやや諦め気味で発表を見ると、あるではありませんか私の番号が。目頭が熱くなるのをぐっと我慢、そして形審査も無事終わり会場に戻ると喜びが次第に現実味を帯び、お世話に成った先生方の喜ぶ顔が浮かんで来ました。

今回六段に昇段できましたのは、徳島剣道連盟並びに三好支部の先生方のお陰だと心から感謝しております。

今後は、段位に恥じない様な剣道が出来るよう精進して参りたいと思いますので今後ともよろしくご指導賜ります様お願い致します。

剣道教士号をいただいて

美馬和義

この度、平成二十四年五月に「教士」称号をいただきました。これも徳島県剣道連盟の諸先生方のご指導、ご鞭撻のおかげとこの場をおかりしてお礼申し上げます。

さて、このたびの剣道教士号全国審査ですが、私の場合全国審査を受けずに合格させていただきました。それは、徳島の剣道二十八号に久保隆司先生が「第十四回全剣連社会体育指導員上級コース養成講習会」で随筆されていた、上級指導員に合格させていただいたからです。その後、全剣連より「剣道称号『教士』審査会筆記試験免除の証」が送られてきました。早速、徳島県剣道連盟事務局に問い合わせたところ、「徳島の審査を受けていただければ後は、必要書類を送るだけです。」と言っていただき、徳島の審査の為の講習会、徳島の審査を受験し、必要書類を剣連事務局に送付、以上で全国審査を受けることなく、剣道教士号をいただきました。

社会体育指導員講習会に参加し、（初級年四回・中級年二回・上級年二回）認定講習会（実技試験、学科試験）に合格すると四年に一回の更新の為の講習会、全剣連の先生方の指導のもと本講習会の目的である、「初級、地域において、剣道活動を実施している学校・道場・クラブ・グループ・スポーツ教室等で剣道の実践的指導に当っている指導者の資質の向上を図り、より高度な指導者を養成することおよびより正しい剣道を普及発展させること。」「中級、地域において、剣道活動を実施している学校・道場・クラブ・グループ・スポーツ教室等で剣道の実践的指導に当っている指導者の資質の向上を図り、剣道をより充実し正しく発展させること、および指導者に必要な知識・能力を得ようとする者の養成」「上級、地域指導者として各都道府県内の講習会等で、指導法・審判法・日本剣道形の実技・理論および剣道に係る学科を指導できる者を養成する。」このような講習会の中で、自己の技術、指導の向上はもちろん、先生方との会話の中で貴重なお話を聞くことができ、講習生にとっては剣道の理論を深めるまたとない機会と思います。社会体育指導員講習会に参加されていない先生方、初級、中級を修得されている先生方、是非とも参加され上級取得していただければと思います。私自身参加して参考になることが多々あったように思います。

教士号をいただいた私ですが、教士とは「剣理に熟達し識見優秀なる者」とありますが、まだまだ未熟な私です。先に述べた事に少しでも近づけるよう修錬をコツコツと積んで、教士に恥じない自分を作って参りたいと思っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻よろしくお願いいたします。

錬士号に合格

篠原永光

剣道六段に合格して一年半が経った平成二十四年五月の京都審査にて剣道錬士の称号に合格させていただきました。これまでご指導下さいました諸先生、諸先輩、剣友の皆様のおかげと心から感謝申し上げます。

錬士号審査においてまず県剣道連盟における予備審査を受けました。同時に受験される方が数名いらっしゃり錬士号、教士号を受審される先生方との立ち会いとなりました。段位相当の立ち会い、剣道形が十分に行えたかは後の反省材料となりましたが予備審査合格をいただきました。

その後全日本剣道連盟へ小論文を提出の運びとなりました。小論文に与えられた課題は『平成十九年三月十四日制定の「剣道指導の心構え」を記し、それをふまえたあなたの剣道修行について述べなさい。』といった内容でした。実際この剣道指導の心構えをみると「竹刀の本意」、「礼法」および「生涯剣道」の三項が記されていました。「竹刀の本意」とは剣道の正しい伝承と発展のために、剣の理法に基づく竹刀の扱い方の指導に努める、「礼法」とは相手の人格を尊重し、心豊かな人間の育成のために礼法を重んずる指導に努めるとあり、また「生涯剣道」とはともに剣道を学び、安全・健康に留意しつつ、生涯にわたる人間形成の道を見出す指導に努めるとありました。これら示された事項を自身の剣道修行で理解を深めることを要とし、後進への指導においてはそれを示し伝えることが大切であるといった内容でまとめ提出いたしました。非常に限られた字数内であったため非常に難しく感じられました。

称号は剣道の技術的力量に加える指導力や識見などを備えた剣道人としての完成度を示すものとあります。自身の剣道技量を高めるとともに剣道に対する理解を深め、指導者としての立場も求められるということを肝に命じて今後の修行に取り組みたいと考えております。まだまだ段位・称号に恥ずかしくない剣道をするために修行中です。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

平成二十四年度

称号・段位合格者一覧

―剣道―

【教士】

五月六日
美馬和義
中川正
三木毅

【錬士】

五月六日
篠原永光
近藤浩文
月岡陽市
藤本常己

十一月二十六日
中尾幸雄
吉田彰夫

【七段】

四月三十日
藤井利一
藤本文義

八月二十五日
桝山紹生

十一月十七日
矢武秀生
福永徳

【六段】

四月二十九日
原芳弘
谷博

五月十三日
敦賀晋平

八月二十六日
野崎寛治
福井勝
横畠保
鈴江俊和
金野裕美

十一月十八日
南谷雅彦
岡本茂
柳谷照男
島尾眞且

【五段】

五月二十七日
湯村義喬
北川成仁
松本憲二

九月九日
長井薫
佐藤光太郎

十一月二十五日
花房祐希
竹原匡
尾脇広美

平成二十五年
二月十七日
岸野哲也
香川利浩

【四段】

五月二十七日
柳谷俊樹
玉井翔
小西矩子

九月九日
立川拓也
谷本浩志
横川光
村田奈津季
片山由貴

十一月二十五日
佐藤裕
松村慎太郎
髙尾健二郎
重田松弘
田内照男
前川亜希子

平成二十五年
二月十七日
上田義弘
藤田翔
飯尾秀行
西山拓志
舛田浩一
台越潤平
岡山真輔
三好延年
笠井孝明
後藤由水

【三段】

五月二十七日
西川航平
住友皓紀
桑原知弘
畠中雄人
藤本凌平
新矢祐介
坂口剛史
高尾柊
野上祐作
日浦平祐
青木一明
真鍋良人
長戸健吉
西沢知也
前川真里奈
大岩千紘
篠原瑠莉
田中里称
中村亜梨沙
原郷瑞希

住友裕菜　田中由貴子　西田和弘
山本悠　瀧浦颯
湯浅絵里加　**十一月二十五日**　福田篤己
西川知見　近藤恭平　岩原将兵
島田凜一郎　岩木佑都　田中悠太郎
竹内優介　齋藤法信　玉川貴文
九月九日
高野俊一郎　大西修平　林勇作　玉川博文
阿部正典　近藤康平　田上和男　梅本聖也
佐賀誠典　竹原慎弥　檜田柊吾　西岡楓賀
山田渓太　米川雄貴　村﨑裕介
金川京平　上田雅大　東知勇　上原大毅
西田凌介　永濱裕基　早岡凜太郎
杉本純　丸尾龍二　木村知寛
宇井友隆　松浦園　福田崚斗
平野智将　美馬汐里　荒瀬友佑
山口喜生　三島花織　大島稜平
森建介　藤本澪　立川裕也
西岡大輝　住友海斗
稲村慶祐　**二月十七日**　黒崎悟
橋本千里　志賀龍一　石川貴大
河野優季　田村幸太
玉田理沙子　田村隆晟
栗野安香音　小川虎太郎

平成二十五年

【二段】

菅生優輝　西岡楓賀　玉川貴文　梅本聖也　荒瀬友佑　大島稜平　立川裕也　住友海斗　黒崎悟　石川貴大　鈴江勇汰
仲野和樹　田中皓己　**五月二十七日**　村﨑裕介　田中悠太郎　福田睦　藤本周平　和田直也　走川海秀　荒木崇志　藤田靖生　福崎充　後藤聡　鳥澤武志　深見桃子　新宅美佳　津田実穂　住友陽南
内藤杏　大西真央　増金沙織　鎌田紗奈　富川友貴　竹内裕香　眞貝敬子　**九月九日**　新矢直士　熊橋和真　安丸和来　酒巻伶央　高開祐弥　大西弘起　小川純平　長船修三　織野将寛　佐野皓亮　坪井貴裕　南谷飛鳥　井川瑛士
正木宏明　山岡洸喜　板東亮佑　上田慎　藤井貴之　林菜緒　岩崎弥呼　山下瑞稀　玉田真子　横川千紘　野村愛里　清水真優　竹原桃香　笠井里奈　岡本佳恋　山内悠　七條はるか　**十一月二十五日**　島田天空　塚田圭吾　高瀬陽平　山下英寿

秋田修平　森本瑞季　行譜巴望
濱田諒　西本麻生　谷美緒
野上優輔
佐々木凌
松本高史
岡田隆希　武知良祐
田村敢太　富田涼太
河野倫生　鎌田実徳
庄野智　平井稜一
藍谷烈　木原奨郷
福永裕大　村本恵太
目崎潤一　吉田和晃
太田風人　要遼太郎
南亮輔　坂東惇平
麻植太一朗　池本幸司
大村猛夫　佐藤浩太郎
猪野明日香　飯田時生
民采加　住友勇希也
森永祐奈　浅沼哲雄
上田真奈　原拓巳
織田綾乃　南條淳
石村静香　三宅誠一
山本あかり　堀真奈美

平成二十五年
二月十七日

【初段】

原田侑汰
濱田卓也
井戸香奈子
島村星伍
柳川圭市郎
小川楓実
柳田詠作
遠藤雅資
市川未来
川田将也
坂口雅彦
平島かれん
宗野虎滋
四宮龍一
中井靖乃
松本和暉
井本佳孝
豊成春子
坂田浩太
高野加奈子
内藤仁美
湯浅滉平
長谷川瑞実
姫野綾子
鳴川了介
丸岡由理奈
仁木純子
谷本真宏
福崎ひかり
岩佐静美
内村龍起
平田佳那
美馬州一
佐古龍哉
福田大貴
賀川義文
福良海都
小糸翔太
播磨慶人
多川和明
廣浦正樹
宮本豊
伊藤碧志
深見佳太
中島佳汰
福田哲也
佐藤智哉
藤見文信
高砂淳之介
岩本竜治
川田航大
郡昂
松山和樹
森政悠
千石貴基
山出亮介
新宮裕太
林淳也
木村岳
清部皓太
梅津広子
森陽美
太田あかり
東條愛果
甲谷英三
福田美穂
横田純一
瀬川楓
川西大貴
田渕南帆
森永真衣
児島翼
宮城佑季
絹川嵩仁
中野萌々
小林凌
湯浅麻菜美
北村怜暉
下渕由璃加
大戸璃玖
堤綾乃
兼松綾那
岩本太平

六月二十四日

中西夏香　木内拓実　佐野茜
中川楓　岸本大希　石井志津香　三好歩
近藤亜寿香　射場哲人　杉友美里　寺野直仁
新菜摘　吉岡真子　藤田昂
深澤聖人

八月二十六日

大和優介　生田朱音　武藏晴香　山尾勇太
安澤樹一　木庭詩乃　熊橋凌司　**十月二十八日**　福田倫太郎　三浦健
古川勇真　西條朱莉　乃一明哉　蔭山武史
由比空　高司彩美　上田瑛斗　應地郁汰
藤井海音　上田麻由佳　三宅凜　逢坂幸輝
野田靖仁　山本菜緒　高橋周平　清原将人
香川紘輝　山本麻緒　住友駿介　堀川洋平
近藤堪太　兵頭優里　仲須大晟　村西健一
前田宗一郎　峰珠希　坂野弘気　近藤慶彦
吉岡楓馬　宮本未来　受川士　マクラウド スティーヴィー
宮川弘大　小西由乃　岡部遼太郎　井後浩二
大西賀樹　井原ほのか　柏木崇寿　山﨑舞
青木優樹　近藤理沙　岡田健　榎本優花
安田有冶　佐藤美杜　楠本直樹　中野真緒
三原杏介　橋出夏希　藤原令路　井川由麻
宮内憧　丸山純弥　萩田雄士　竹本まりあ
片岡璃空　三好舞　廣澤慶充　竹本ゆりあ
島口開　川田真莉子　藤山敦司

平井泰葉
橋本理奈
大倉花菜
岩崎華織
谷琴音
油津彩花
住友美夢
渡邉美鈴
吉田衣梨花

平成二十五年

一月二十七日

井川友暉
市橋泰成
七條将吉
平井靖子
田渕舜也
西岡祐紀
小川浩希
福井優人
本田俊介
大原一輝
着藤永大
棚瀬慧
東谷瑞穂
清水将貴
中川新
郡悠也
三宅遥稀
小川真由
中村隼人
若林佑希
赤川笙
西岡直人
北栄司
久米健士郎
曽根玄貴
傍示健太
田岡優弥
布施匡一
田上治人
多田朝美

―居合道―

【教士】

十一月二十六日　森　将夫

平成二十五年二月二十四日　林　由美

【五段】

【四段】

五月十三日　久米俊二

平成二十五年二月二十四日　三木恭子

松原美和

【三段】

平成二十五年二月二十四日　山田師正

【二段】

十月十四日　荒瀬友佑

仲野和樹

【初段】

五月十三日　近藤亮哉

内藤靖二

十月十四日　村田圭

がんばろう徳島
部活だより

人間として成長する剣道を

鳴門教育大学剣道部
前主将　真嶋健司

鳴門教育大学は、徳島大学から教育学部を移行する形で、昭和五十六年一〇月一日に創設されました。学校教育に関する理論的・実践的な教育研究を進める「教員のための大学」、学校教育の推進に寄与する「開かれた大学」です。また創部から二十九年しかたっておらず、剣道部の歴史はあまり深くありません。しかし、創部当時から少人数で工夫して行う練習は今でも受け継がれています。

さて私たち剣道部の活動について紹介していきたいと思います。部員は総勢十七人。部員数は少ないですが、学部生・院生とも

に仲が良く、互いに刺激し合い切磋琢磨しています。練習は週に三回、それに加えて各々が自主練に取り組み、高い目標を持って日々の修練に励んでいます。さらに、地域に住む中学生や年配の方々と剣道を通して交流を深めています。私たち鳴教大剣道部の特徴として、やはり少人数ならではの仲の良さがあげられます。練習ではお互いの注意点を指摘し合うことで、より充実した練習ができています。練習後や休日には、親睦を深め、チームの結束をより固いものにしています。

私はこの大学で、四年間剣道部に所属し、日々の修練に励みました。剣道部で学んだことは、剣道の場面だけでなく日常の生活の中でも生かすことができました。剣道では、礼に始まり礼に終わりということばがあります。日常生活では、礼儀作法は、人と人との

信頼関係からバイトの接客など多くの場面で重要になるものだと考えることができます。剣道の礼節は、生活の基本にもなり人間性を高めることができたと思います。剣道とは、たんに勝負だけではなく、剣道とは、離れた場面での成長を促してくれました。小学校、中学校、高校と剣道をしてきたなかで大学の剣道が一番、人として考えさせられ、勝負だけでは、ないことを知ることができました。不健康になりがちの大学生活で一週間に定期的に練習があることは、体だけでなく精神面でもおおきく影響があり、健康的に大学四年間を過ごすことができました。

私たち鳴門教育大学剣道部一同は、先輩方の伝統を守り教師となるために剣道の技術だけではなく、人間として成長をすることを目指し日々精進してまいりたいと思います。

部活だより

城東高校剣道部顧問
山本雅裕

本校は、明治三十五年に徳島県立高等女学校として開校され、その後、昭和三十一年に徳島県立城東高等学校と改称。今年で創立百十年目となる学校である。生徒数は千名を超え、そのほとんどが大学進学を希望しており、毎年二百名の国公立大学合格者を輩出している進学校でもある。しかし、勉学のみならず、文武両道の精神のもと、部活動にも熱心に取り組み、バスケットボールやバドミントンなどは常に上位の成績を残している。

剣道部についても歴史は古く、城東高校に改称された翌年（昭和三十二年）に創部され、武道館がない状態で、部員二十名が集まりスタートされた。その後、昭和四十八年に武道館が完成し、平成十六年の校舎改築を経て現在に至る。

現在は、部員七名と少人数ではあるが、生徒は真面目に日々の練習に取り組んでいる。練習時間は、七時間授業や学習塾等のため、多くは取れない状況ではあるが、その分、練習内容を精選し、一本一本集中して取り組むよう心がけている。また、練習後には瞬発力と跳躍力を高める筋力トレーニング、週一回の全身持久力を高めるトレーニングも並行して実施している。どの練習メニューにも必ず個々の課題を持たせ、自分の動きを意識するとともに、それを客観的に把握し、調整や修正が自分でできるよう指導している。特に重点を置いていることは、「構えを崩さないこと」、「身体の軸をぶらさないこと」、「上半身（竹刀さばき）と下半身（足さばき）を連動させること」の三つである。部員は、基本練習では意識して取り組めているが、実践を想定した応用練習となると、心技体が崩れてしまい、思うような動きができていない者が多い。これらを克服するためにも、基本練習のときから緊迫した攻防を行うこと、試合経験を多く積み、崩れてしまうと打つことができないうえに、簡単に打たれてしまうとい

うことを、一連の動きのなかで理解することが今後の課題である。

また、部員達には剣道を通して多くのことを学び、そこで培ったあらゆる力を発揮し、自らの人生を切り開いていってもらいたい。そのためにも、高校卒業後も剣道を続けていくことが大事であり、高校三年間で正しい剣道を身につけるとともに、剣道の醍醐味を味わえるような活動を目指し、将来につなげていきたいと思う。嬉しいことに、今年の三年生は全員が進学後も剣道を続けていく意志があり、さらには剣道の指導者になることを目標としている者もおり、これからの活躍が大いに期待される。

今後も先生方や保護者の皆様への感謝を忘れずに、城東高校剣道部の伝統を受け継ぎ、新たな歴史を築いていきたい。

阿南第一中学校剣道部

阿南第一中学校剣道部
顧問　福多博史

本校区は昔よりたいへん剣道の熱心な地域である。本校剣道部は伝統があり、これまで全国大会への上位進出や四国大会優勝をはじめ各種大会において優秀な成績を残している。また、地域の方々からの期待も大きく、徳島県剣道連盟名誉会長の遠藤先生をはじめたくさんの先生方から熱心にご指導やご支援を頂き、たいへん有り難く感じている。このように地域の方や保護者の方の物心両面にわたるご支援により生徒達はすばらしい環境のもと剣道に取り組んでいる。

「おはようございます。」本校剣道部の朝はこの大きな声から始まる。基本的な生活習慣の育成と体力作りを目標に始めた朝練のスタートである。体力作りのためのトレーニングだけでなく、挨拶運動や清掃ボランティア活動などの人のために、学校のために取り組む活動にも力を入れている。「剣道部は大きな声で挨拶ができる。」「きれいに掃除してくれてありがとう。」他の教職員や生徒たちからこの様な声を聞くと生徒と共にうれしく思う。「剣道即生活」と言われるが、剣道部に所属した生徒たちに剣道と生活を繋げながら心も体も大きく成長して欲しいと感じる。放課後の稽古は二時間程度、基本の習得を中心に進めている。試合稽古や県外への遠征等も休みの日に実施しており、全国大会上位進出を目指し日々稽古に励んでいる。

今年度、男子十六名、女子十名の計二十六名の部員たちと活気のある稽古を行うことができた。今後、部員数の減少等様々な課題が考えられるが、伝統ある阿南第一中学校剣道部がさらに発展できるよう生徒と共に取り組んでいきたい。

阿南第一中学校剣道部の良いところ、剣道を通して学んだこと。（生徒の感想から）

○礼儀を学ぶことができたり、みんなでレベルアップをしていくことができる。
○部員がたくさんいて、練習がしっかりできる。
○みんな明るく、仲良く活動している。
○挨拶がしっかりしていて、何事にも一生懸命することがいい所。
○誰に対しても挨拶をしようとしている。
○みんな楽しそうに剣道をやっていて、積極的に行動できる。
○一人ひとりのいいところをみんなが知っている。
○一中剣道部に入って挨拶を大きな声ですること、行動を素早くすることを学びました。
○チームが一つになって、仲間を大切にすることを学びました。
○武道をすることの楽しさと難しさを学びました。技を考えて打って一本になった時はうれしく、技を打たれた時、なぜ打たれたのかを考える難しさを感じます。
○普段明るく、挨拶も良くできる。剣道をするときはみんなで気持ちを一つにしてがんばれるところ。
○礼儀の大切さや自分が今、何をしなければならないのかという事を考え行動する

事の大切さを学びました。
○毎日の練習を一生懸命に取り組むところがいいと思います。
○みんな仲良く、元気がある。練習では大きな声を出し、真剣に取り組むことができる。
○遊ぶときと部活の時の区別ができている。そういう環境をつくった先輩方を見習いたい。
○男女とも仲が良く、チームワークがよい。
○チームで助け合って、一人ひとりが自分のすることをちゃんとする。
○武道の楽しさを知った。

居合道　道場案内

日本古来の伝統武道である居合道。時代を超えて受け継がれてきた居合道をより多くの人に体験していただきたいと願っております。是非お問い合わせ下さい。

道場名	代表者・連絡先	稽古場所	日時
徹心道場	代表 範士八段・平尾 勝美 連絡先 教士七段・吉岡 修一 0883-24-5341	鴨島第一中学校武道場	月曜日 19:30～21:30（少年） 水曜日 19:30～21:30 金曜日 19:30～21:30
大和錬心館	範士八段・原田 勝 自宅 0884-68-2239 携帯 090-7141-8996	前、那賀高校 木頭分校体育館	月曜日～金曜日 17:30～19:30 （祭日を除く）
阿波洗心館	代表 教士七段・高橋 憲司 連絡先 三段・村井 恒治 090-3789-7846	松茂町第二体育館	火曜日 20:00～22:00 （月曜祝日の週は休み）
		セント歯科体育館	土曜日 19:00～21:00
居合道錬成会	教士七段・前田 健志 自宅 088-622-8559	徳島県立中央武道館	月曜日 19:00～21:00 金曜日 19:00～21:00
阿波居合道伝習会	教士七段・坂本 憲一 自宅 0883-36-3008 携帯 090-1576-4773	阿波市立八幡小学校体育館	火曜日 19:00～22:00
		徳島市農業環境改善センター	水曜日 19:00～21:00
		徳島県立中央武道館	月曜日 19:00～21:00 金曜日 19:00～21:00
大潟道場 （全日本剣道連盟）	錬士七段・福井 勝 携帯 090-5143-3596	阿南市武道館	日曜日 10:00～12:00 （行事日を除く）
鳴門洗心館	錬士六段・青山 善雄 自宅 088-687-2802	鳴門ソイジョイ武道館 サブ道場	水曜日 18:00～20:00
徳島春風館道場	錬士六段・青木 茂生 自宅 0883-53-7118 携帯 090-8693-4935	徳島春風館道場 （穴吹町三島）	水曜日 19:30～21:00
居合北島道場	五段・伊賀 雅人 自宅 088-698-4528	居合北島道場 （北島町北村）	水曜日 19:00～20:30 土曜日 19:00～20:30
剣道・板野道場	五段・岡田 良人 自宅・FAX 088-672-2436 携帯 090-4787-1998	南公民館	水曜日 19:30～21:30
		板野町体育センター	日曜日 11:00～12:00

徳島県剣道連盟　居合道部

徳島県剣道稽古場所一覧（平成25年度版）

支部名	教室および道場名	代表者・連絡先	稽古場所	日時 （少年・一般の区別明記のこと）
徳島支部	徳島少年剣道教室	生田浩章 088-664-1971	徳島県立中央武道館	少年（水・木・土）17:00－19:00
	蔵本少年剣道クラブ	福永　徳 088-631-0207	加茂名中学校武道場	少年（火・金）19:00－21:00 少年（日）　18:00－21:00
	加茂名少年剣道教室	藤本俊夫 088-632-8748	加茂名小（木） 加茂名中（土） 加茂名南小（日）	少年（木・土）18:00－19:45 少年（日）　17:20－19:30
	東内道場	東内　勉 088-631-3971	研修道場 東内会館	少年（木・土）18:00－20:00
	上八万剣道倶楽部	吉本呂弘 088-668-0356	上八万小学校体育館	少年（水・土）17:00－19:00 一般（水・土）19:00－21:00
	宅宮（えのみや）剣道倶楽部	河野通宣 088-668-0167	えのみや睦会武道場	少年（土）19:00－21:00
	入田錬成会	佐藤佳宏 088-644-3124	入田中学校体育館	少年（火・土）19:30－21:30 一般（火・土）21:30－22:30
	北井上剣道教室	美馬勝行 088-642-3898	北井上中学校体育館	少年（火・金）19:00－21:00
	徳島清風館道場	久保隆司 088-633-0727	国府小学校体育館	少年（土・日）17:00－19:00
	養武館	米倉　滋 088-668-6650	八万中剣道場（火） 養武館道場（木・土）	少年（火）　19:00－21:00 少年（木・土）19:30－21:00
	徳島親道館剣道場	矢武秀生 088-644-5171	親道館道場	少年（火・金）19:00－20:30
	佐古剣道クラブ	谷本浩志 088-637-2204	佐古小学校体育館	少年（火・木）17:00－19:00 少年（日）　9:00－12:00
	渭東少年剣道教室	吉田昌彦 088-664-2153	城東中学校黎明館	少年（火・木・金）19:00－21:00
	徳島錬心館	大澤孝彰 088-654-6325	錬心館道場	一般（火・木・土）19:00－20:00
鳴門支部	鳴門市光武館	寺西明弘 088-685-0703	光武館剣道場	少年（火・木）18:30－20:30 少年（土）　17:30－19:30
	鳴門市少年剣道教室	元木　武 088-685-3705	鳴門ソイジョイ武道館	少年（月・水）18:00－20:00 少年（土）　9:00－11:00 一般（月）　20:00－21:00
	大麻錬成館	近藤敏晴 088-689-0857	大麻中学校剣道場	少年（火・土）18:30－20:00
板野東支部	北島少年剣道教室	伊賀雅人 088-698-4528	北島小学校体育館	少年（月・木）19:00－20:30 一般（月）　20:45－22:00
	誠武館道場	井川理之 090-4976-4477	北島町立武道館	少年（木・土）19:00－20:30 一般（木・土）20:30－21:00
	松茂少年剣道教室	米田利彦 088-699-6176	松茂町第二体育館 （武道館）	少年・一般（火・金） 19:00－22:00

板野西支部	板野西稽古場	久次米繁興 088-692-7198	藍住町武道館	一般（火・木・土）21:00－22:00
	藍住剣道スポーツ少年団	原　多三夫 088-692-5780	藍住町武道館	少年（火・木・土）19:00－20:30
	剣道板野道場	米崎信弥 090-4972-4177	板野町体育センター	少年（火・水）19:30－21:00 少年（日）　9:00－11:00
	上板少年剣道教室	藤本辰夫 088-694-5031	神宅小学校体育館	少年・一般（月・木） 19:00－21:00
阿波居合道伝習会	阿波少年剣道教室	桑原啓治 090-2789-1801	林小学校体育館（火） 阿波中学校体育館（木）	少年（火・木）19:00－21:00
	土成町 剣道スポーツ少年団	出口正春 088-695-3606	土成農業者 トレーニングセンター	少年（火・金）19:30－21:00
	市場剣道教室	井内勝則 0883-36-2686	市場武道館	少年（火・木・土）19:30－21:00
	阿波支部稽古会	塩田善治 0883-35-2894	市場武道館	少年・一般（月）20:00－21:00
居合北島道場	脇町少年剣道教室	柴田宗忠 0883-53-2629	脇町小学校体育館	少年（火・金）19:00－21:00 一般は8:30－22:00
	徳島春風館道場	青木茂生 0883-53-7118	徳島春風館道場	少年・一般（月・木・土） 19:30－21:00
	半田剣道教室	大川功 0883-64-2181	半田スポーツセンター	少年・一般（月・木） 19:00－21:00
	美馬市体協剣道部	中川　正 0883-53-0116	脇町中学校武道館	一般（月・水・土）19:00－22:00
三好支部	東みよし淳志館	増田和広 0883-79-3704	三好中学校体育館	少年・一般（月・木） 19:30－22:00
	佐馬地少年剣道クラブ	笠井憲次郎 0883-74-0036	馬路小学校体育館	少年（水・金）19:30－20:30
	川崎少年剣道クラブ	山下敏雄 0883-74-1325	川崎小学校体育館	少年（水・土）19:00－21:00
	三野少年剣道クラブ	久保和雄 0883-77-3899	三野中学校体育館	少年（土）18:00－20:00
	山城町剣道修錬クラブ	島尾眞且 0883-86-1398	山城中学校武道館	少年（火・金）19:30－21:30
	奥祖谷剣道クラブ	中石　昭 0883-88-5802	旧 栃之瀬小学校 体育館	少年（火・金）19:30－21:00
	井川武道会	中川勝弘 0883-78-2115	三好市柔剣道場	少年（水）20:00－21:00
麻植支部	麻植支部稽古会	出葉成一 0883-24-7433	川島中学校体育館	少年・一般（20:00－21:30）
	上浦剣道教室	出葉成一 0883-24-7433	上浦小学校体育館	少年（水・土）18:30－20:00
	鴨島少年剣道教室	三木　毅 0883-24-1934	鴨島第一中学校武道館	少年（火・木・土）19:15－21:00
	川島剣道スポーツ少年団	猪野和男 0883-25-6004	農村環境改善センター 市立川島中学校体育館	少年（火・木・土）19:00－21:00
	山川スポーツ少年団 修錬館	柳谷照男 0883-42-6936	山川中学校武道館	少年（水・土）19:00－21:00
	吉野川少年剣道教室	片山尊史 0883-25-6014	牛島小学校体育館 西麻植小学校体育館	少年（火・水・金・土） 20:00－22:00

阿南支部	阿南少年剣道教室	須藤恭宏 0884-22-6402	阿南市武道館（火・金） 阿南第一中武道館（木）	少年（火・木・金）19:00－21:00 一般（火・金）　21:00－22:00
	新野少年剣道教室	馬見和秀 0884-36-2428	新野小学校体育館	少年（火・木・土）18:30－20:30
	大野小学校剣道部	西岡直彦 0884-22-6535	大野小学校体育館	少年（月・水・木）18:30－20:30 一般（水）　21:00－22:00
	徳島至誠館	中山繁輝 090-1002-8976	徳島至誠館道場	少年（火・木・土）19:00－21:00
	那賀川少年剣道クラブ	二反田和則 0884-21-2207	今津小学校体育館（火） 那賀川B＆G体育館（水・金）	少年（火・水・金）19:00－21:00
	那賀川剣道教室 わかあゆ会	山田耕司 0884-42-3381	平島小学校体育館	少年（月・水・金）19:00－21:00
	羽ノ浦少年剣道教室	森　眞一 0884-44-5415	羽ノ浦中学校武道館	少年（火・金）19:00－21:00 一般（水）　19:30－21:00
丹生谷支部	振　武　館	奥田博志 0884－62－1134	那賀町B&G 海洋センター武道場	少年（水・金）19:00－21:00 一般（水・金）21:00－22:00
	相生龍虎館	野村幸大 0884－62－0800	相生小体育館	少年（火・木・土）16:00－18:00
	木頭錬心館	小川大造 0884－68－2242	木頭中柔剣道場	少年・一般（月・水・金） 18:00－20:30
	北川小学校剣道クラブ	谷　次郎 0884－69－2430	那賀町北川体育館	少年（月・水）18:00－19:30 （金）　18:00－20:00
小松島支部	小松島支部稽古会	梅山寧史 0885-33-1251	小松島中学校武道場	一般（木）19:30－21:00
	小松島小剣クラブ	青木博志 0885-33-1251（梅山）	北小松島小学校体育館（月金） 小松島小学校体育館（水）	少年（月・水・金）19:00－21:30
	和田島少年剣道クラブ	篠原誠一 0885-37-2030	和田島小学校体育館	少年（月・水）19:00－21:00
	坂野少年剣道クラブ	櫻木鉄也 0885-38-2302	坂野小学校体育館	少年（月・木）19:00－21:00
	立江剣道教室	原　知永 0885-38-2121	立江小学校体育館	少年（火・土・日）18:30－20:00
	芝田剣道クラブ直心館	岩田善則 0885-32-3319	芝田小学校体育館	少年（月・金）19:00－21:00
海部支部	海部川剣道教室	丸岡偉人 0884-73-3175	海部小学校体育館	少年・一般（月・木） 19:00－20:45
	牟岐剣道クラブ	谷口順二 0884-72-0490	牟岐町民センター	少年・一般（月・水）19:00－21:00 少年・一般（土）　18:30－20:00
	一心館道場	影山美雄 0884-79-3125	一心館剣道場	少年（月・木）16:30－18:00 一般（水・第2金・第4金） 18:00－20:00
県剣道連盟	徳島県剣道連盟稽古会		警察学校体育館	一般　水　18:30－20:00 一般　土　9:30－12:00
	女子部稽古会		中央武道館	一般　第1日曜　18:00－19:00

徳島武徳殿の雄姿を求めて
未完成ながら想像図を作成
新たな資料を求む

徳島剣道史編集委員　三木　毅

一　絵図作成の意図

徳島剣道史を編纂することとなり、藩政時代は坂本裕二先生・明治時代以降を堀江幸夫先生が担当し、精力的な資料収集にあたってきた。

堀江先生がご健在の折、先生が収集されていた一部資料をお預かりし、明治時代以降の剣道史編纂に向け更なる収集を続けているところである。

私が今、明治時代以降を執筆しようと考えている中で特に念頭においているのは「徳島武徳殿の雄姿の写真を手に入れること」なのである。武徳殿の姿が頭に入らないと文字を書く気にならないからである。そんな折、奇遇にも平成二十三年五月一日徳島新聞の移動編集局徳島市編では「昭和十二年大徳島市勢大観」の絵地図が報道された。私はその絵地図を食い入るように観察し、城山東側にある「武徳殿」の記載がある建物を発見したのである。

これを機会に、「大徳島市勢大観」の原図探訪を端村　武先生にお願いした。先生はその作業を快諾してくれ、徳島新聞社、市図書館、県図書館など奔走していただき、多くの関係者に接触され、米軍が徳島市空襲の前後に撮影した航空写真の存在まで明らかにしていただいた。資料の存在が確認されると更に食い入るように観察探訪を進めたが、武徳殿全体像が鮮明な姿として目に映る資料には出会わなかったのである。

徳島武徳殿で剣道をされ、ご健在の先生は、「勝浦守先生、竹原実太郎先生、山田仁先生、平尾勝美先生、高下正義先生、笠井選先生など」であった。各先生方のもとに参上して、収集した資料をもとに、武徳殿の外観や間取りなどをお聞かせていただいた。

おぼろげながらの姿が出来上がり、これを目に見える形にすることとし、吉田昌彦先生に絵図作成を依頼した。吉田先生とは勝浦先生のもとに足を運び修正に修正を重ねてようやく、現在の想像絵図が完成したのである。顧みるとこの作業だけで平成二十四年一年間を費やしていたのである。

二　徳島武徳殿の場所と建物概要

徳島武徳殿は、昭和三年に元徳島県会議事堂の建物を移築したもので、その場所は、現在の徳島市中央公園バラ園の南端に位置していた。すなわち、城山の貝塚の東側ということになる。

建物は木造二階建て入母屋作りであり、東向きであった。道路

に面した正面は土盛りされた上に生垣され、門扉はかなり高い作りの鉄製の観音開きで外部からは武徳殿を容易に見ることができなかったようである。

二階建て入母屋を本館と称すると、本館南側には、弓道場があり、北側は、二階建ての建物で一階は更衣室、二階が薙刀演舞場であった。この建物の西奥は、事務所や炊事場・風呂場などであった。

三　資料がない理由

徳島武徳殿の資料がない理由は大きく四つである。一つは、昭和初期の年代に写真機の存在が少なく、写真は貴重なものとしてふんだんに普及していなかったことである。二つには、昭和二十年七月の空襲で武徳殿が焼失したこと。三つには、敗戦により連合軍総司令部は武道の中でも特に剣道に対して厳しい扱いを打ち立てた。このことにより、大日本武徳会は昭和二十一年十月、自主解散をおこなったが、日本政府は同年十一月解散命令を発するに至り、財産没収、役員の公職追放がなされ、関係文書など廃棄の運命をたどり、武徳会資料が消失したのである。四つには、前記した剣道の先生方が武徳殿で剣道をされた年代は十五歳前後のことであり、武徳殿の事務方のことや間取りのことなど眼中にない時代でありしかも貴重な写真を手にするという時代ではなかったということである。

したがって、現段階では武徳殿外観を知るどんな子細な写真や絵図でも欲しいということである。

四　徳島武徳殿の歴史概略

前記したように、武徳殿外観資料の希薄さから多くの会員諸氏のご協力を得るため、徳島武徳殿の歴史概略を申しのべます。

警察協会徳島支部昭和十二年五月発行の「第八十八号警友」による「武徳会徳島支部状況」の項では次のように述べられている。

㈠　明治二十八年四月大日本武徳会の創立に際し徳島県知事村上義雄以下庁員挙げて趣旨に賛同。警察職員及び各種武道の先覚者を委員として、会員募集に努める。明治三十一年秋には三千余人となる。

明治三十一年十二月六日徳島支部設置が許される。

明治三十二年二月二十六日支部発会式。

会員募集・基金の造成に努める。

明治四十年ころ、支部財政窮乏。大会中断。

㈡　その頃、剣道演武場は城山山麓の「徳島市滴翠閣」であったが移転することとなり、稽古場は警察署演武場や、徳島県会議事堂で随時行う。

㈢　明治四十一年七月、県下警察署長、一市十郡の市町村長、地方有力者、各種武道家数百名を委員に嘱託して寄付金や会員募集に努める。

㈣　大正四年基金「二万円」が造成された。

㈤　昭和三年となり支部設置三十年の記念事業として、多数の

演武者を収容できる「武徳殿建築の本部承認を得る」

㈥ 昭和三年五月、武徳殿新築の基金不足で新築できず、借り上げ演武をしていた県会議事堂と付属建物全部を、三千百十円で県から譲り受けた。また、徳島市の滴翠閣と付属建物を無償で譲渡を受け、移転改築費を一万六千九百八十円として、安宅町「大松磯吉氏」と改築契約した。

㈦ 昭和三年十一月二十六日武徳殿の形態が整う。

㈧ 昭和四年三月二十三日と二十四日落成式を兼ねた第二十五回武徳祭並びに演武大会を挙行した。

㈨ 昭和九年四月十三日、閑院宮載仁親王殿下の台臨を得て日赤有功賞・帝国軍人徽章親授があり、剣道・柔道の試合を台覧された。

㈩ 昭和二十年七月徳島空襲で武徳殿焼失した。

五　会員諸氏にお願い

徳島武徳殿は、昭和四年三月に落成し、昭和二十年七月の空襲までの約十六年間徳島城山東側に所在し、徳島県の剣道・柔道・薙刀の武道発展の施設として、多くの武道家が親しんだ。

剣道史編纂のため、確実かつ鮮明な資料を収集しいであるようと大いに努めているが、さまざまな理由により鮮明な資料に到達していないのが現状である。ついては、会員諸氏の想像力と人脈を得て武徳殿像の資料はじめ、剣道史に関する資料収集に力を添えていただきたい次第である。

前号「徳島の剣道 28号」に誤記がありました。
謹んで、関係者にお詫び申し上げるとともにここに訂正します。

○P33 平成23年度 徳島県中学校剣道優秀選手
【誤】女子 19 稲生美穂（加茂名）
【正】女子 19 稲生美穂（加茂谷）

○P178 第65回 中学校夏期総合体育大会　剣道競技　女子個人戦
【誤】優勝　岡田（那賀川）
【正】優勝　川原（徳島文理）

○P191 第41回 徳島少年剣道錬成大会
【誤】優勝　阿南少年剣道教室 1/0
【正】優勝　徳島至誠館 1/0 代

編集後記

この『徳島の剣道』の編集作業をさせていただきながら、徳島にこれほど多くの剣道を愛し、熱い心をもった人たちがいることを嬉しく思います。『徳島の剣道』はその年に徳島県剣道連盟関係者の特筆すべき事柄の記録です。自分の与えられた持ち場で、精一杯の努力をしている人たちの記録であり、まさに一隅を照らす剣道実践であります。その『徳島の剣道』の編集を担っていることに、僅かながらの自負を持っております。

私（木原）ごとで、恐縮ですが、昨年は三ヶ月入院する大病を患い、編集作業に多大なる遅延を招いてしまいました。今年も、体調不良で編集作業が遅れてしまい、関係者に多大なご迷惑をかけております。編集責任者は、必ず、表紙から最後のページに至るまでを一人の目で、確認する必要があり、その作業が滞るのであれば、私自身、編集担当の任を交代しなければならないと考えています。どのように交代していけばよいのか、試行錯誤の一年にしていくつもりです。

『徳島の剣道』第二十九号

編集委員会

木原資裕　三木毅　藤本雅史　手塚十三子　中村稔裕　美馬和義　影山美雄　伊賀雅人　柴田宗忠　松永貴史　上田宏司　月岡陽市　笠井勝　別宮憲治

『徳島の剣道』第29号

平成25年7月21日発行

編集・発行　徳島県剣道連盟

代表者　坂下彦之

〒770-0861　徳島市住吉三丁目9-6
栗本マンション106号室

TEL 088－652－2337
FAX 088－652－2360

表紙題字　堀江幸夫
さし絵　村嶋恒徳